

# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

# Kodak Color Control Patches

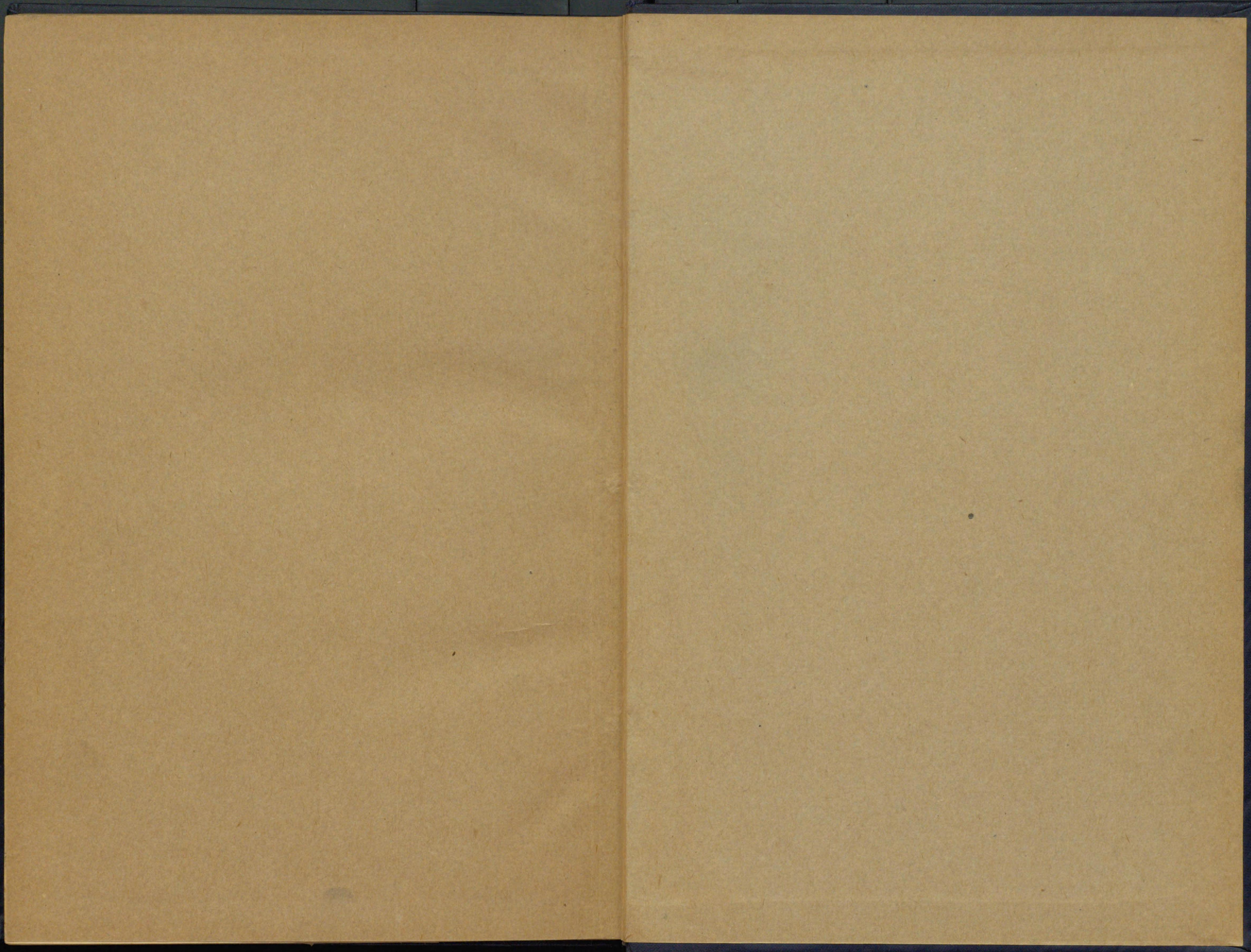
© Kodak, 2007 TM: Kodak



727  
68

727-68  
1200501588567

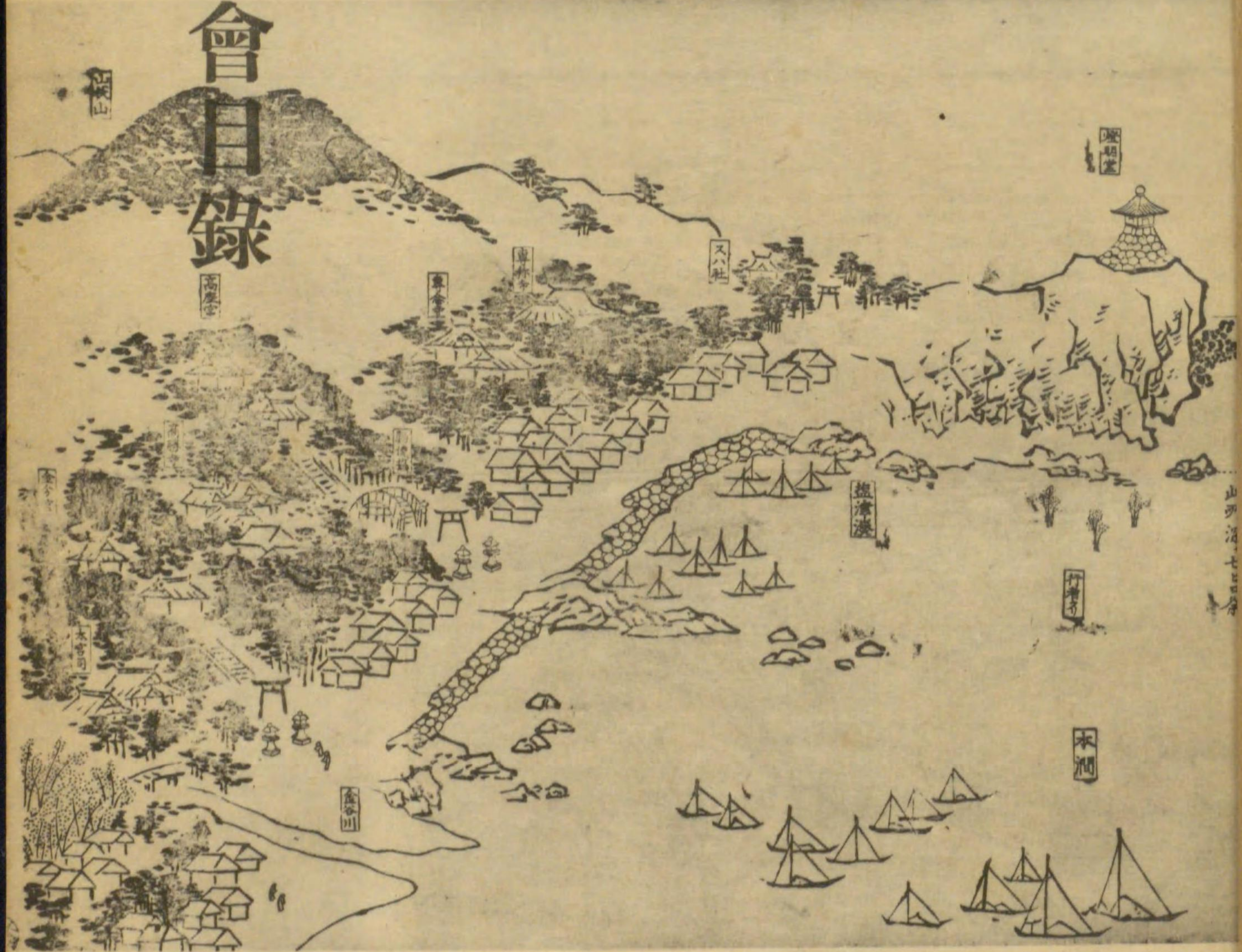






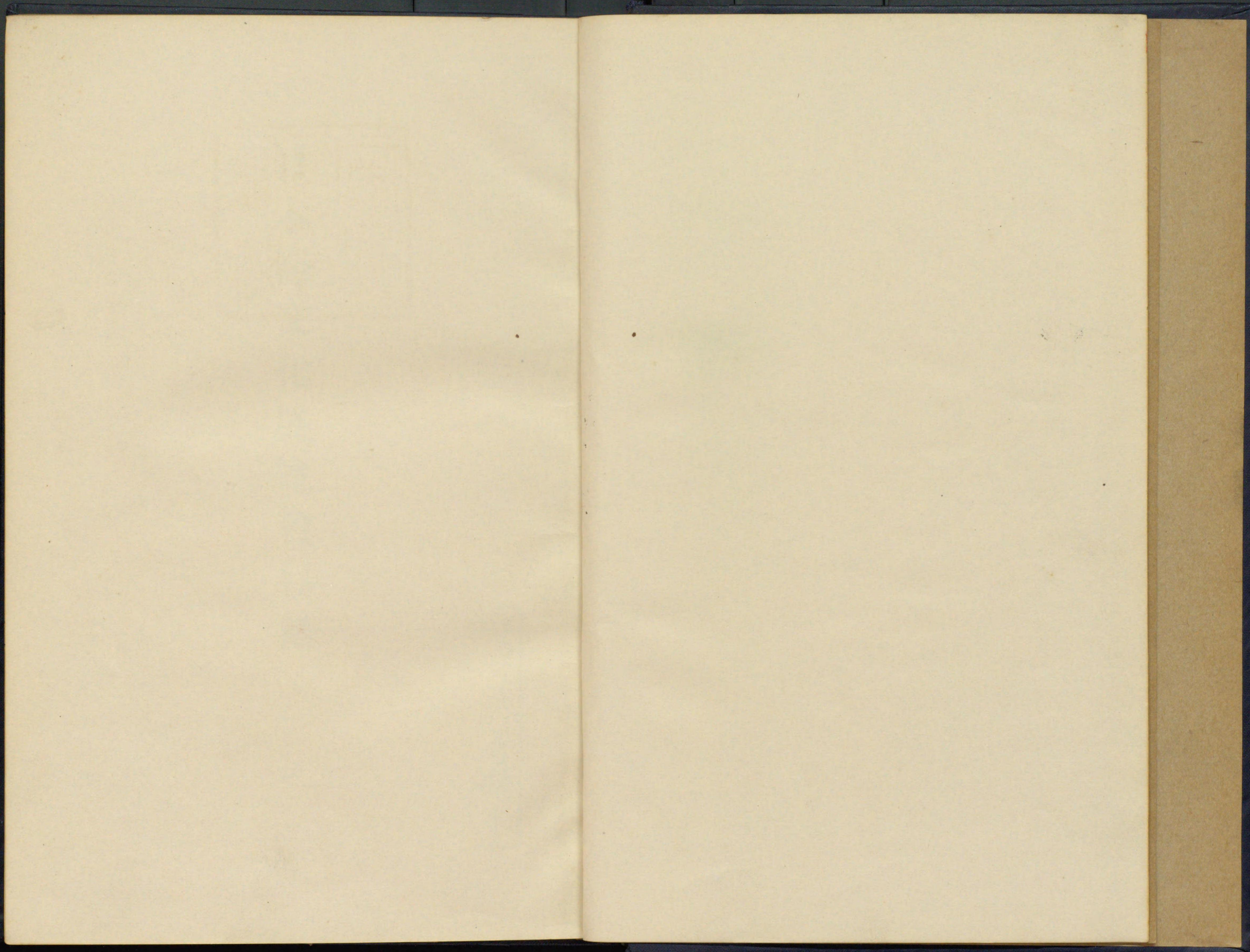
727  
68

日本海文化展覽會目錄

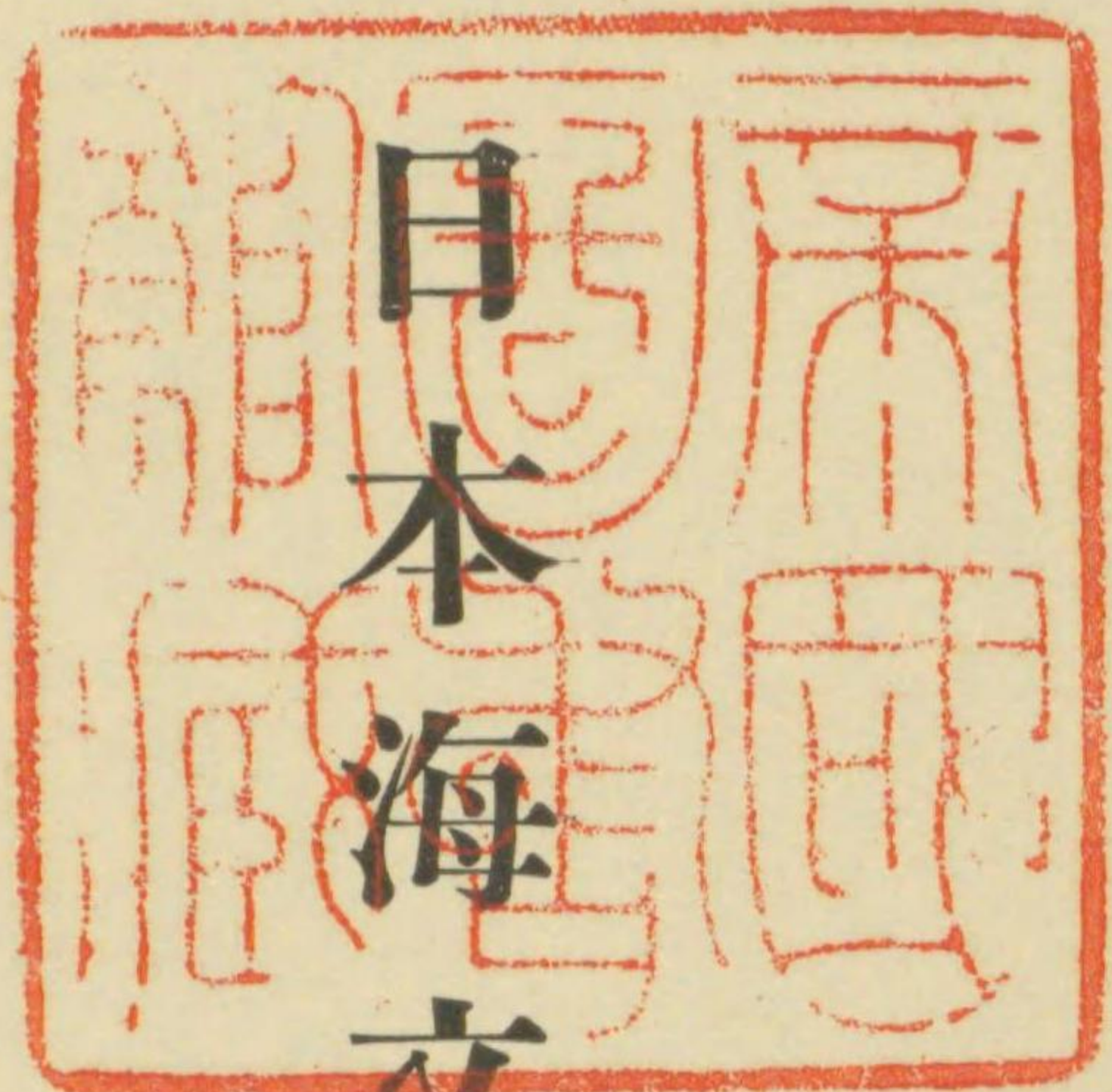


石川縣圖書協會





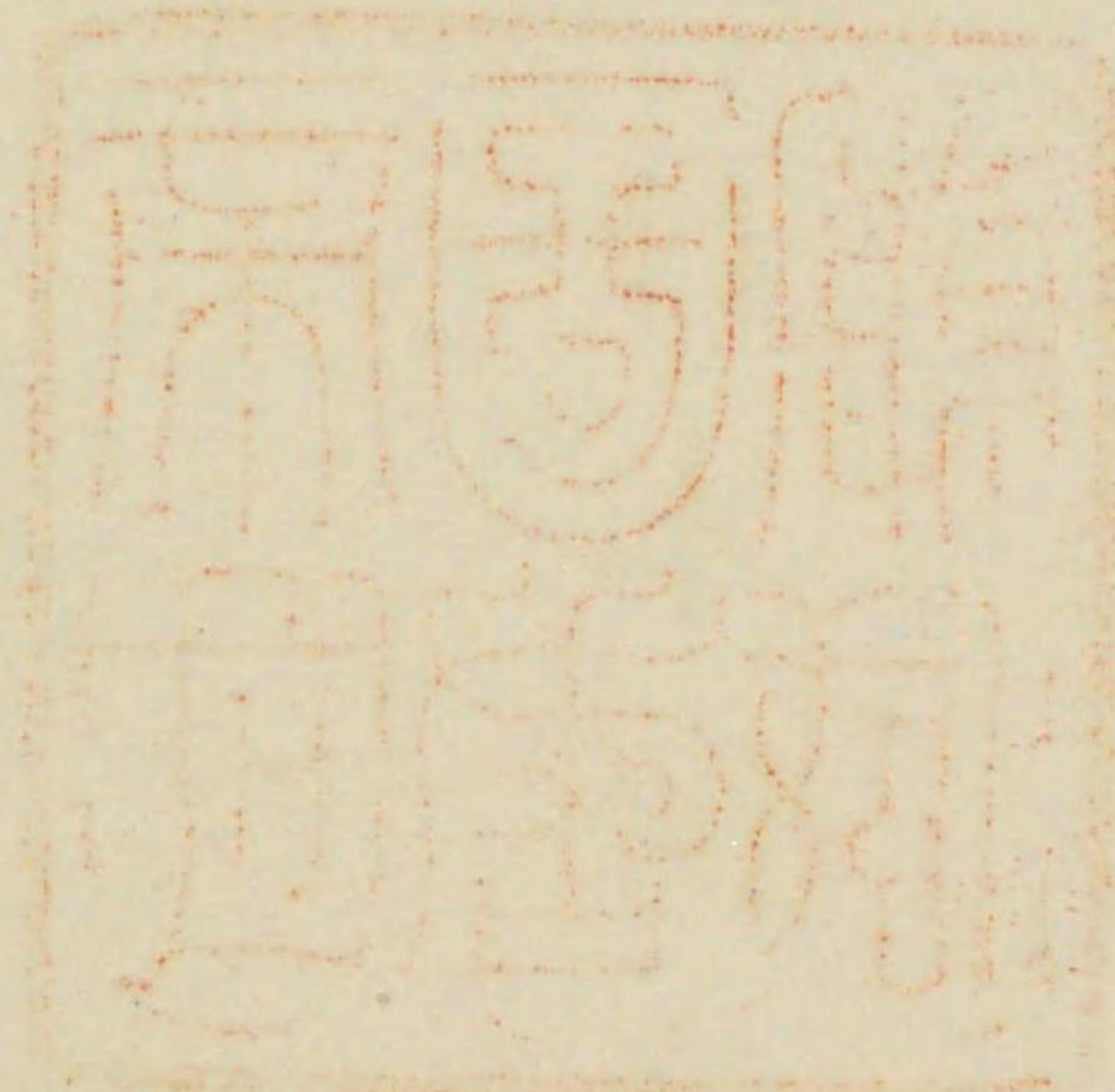




日本海國文化展覽會目錄



發行所寄贈本





## 序

滿洲事變以來我が日本海は舊き運命を一擲して、我が國の表門としての新しいスタートを踏み出すことになつた。我々は今その更生日本海に對して別に新しい問題を提起しようとするものではないが、この機會に古くからの日本海を想起して、それが如何に祖先の生活にとり入れられてきたかを顧みたいと思ふのである。

大まかに概観してみても日本海岸は決して昔から裏日本であつたのではない。遠い古代は暫く措くとしても、徳川三百年の鎖國時代においてすら日本海はなか／＼活潑なる働きを示してきた。所謂黒船渡來以前、たとへ南蠻船や御朱印船などの影は見なかつたとは言へ、日本海岸は太平洋岸に比して、その帆影の賑かさにおいて決して遜色がなかつたと考へられる。我が石川縣のみについても、千石船を操つて華やかに日本海を乗り廻し、我が國海運界に萬丈の氣を吐いてゐたものは決して錢屋五兵衛の一人や二人に制限されてはゐなかつたのである。

然るにでき上つてゐる日本海文化史は餘りにもその内容が貧弱である。石川縣の如きもその歴史を語る刊行物や未刊の記録類には甚だ豊かに恵まれてゐるが、その大部分が陸上の文化に關するものであつて、海を舞臺とする文化史は言ふに足るものがないといふ實情である。日本海の真中に突入し長大なる海岸線を有する石川縣として、この有様では甚だ心もとない次第である。

海上の歴史は未だ暗い。その全貌は尙雲霧の中にある。しかし無内容ではない。必らず相當なものがあるに違ひない。之を明かにすることは、更生日本海の前途を祝福し、新しい活動に入らんとするを援ける意味において何より必要なことであらねばならぬ。

かういつた趣旨を以て、當初我々は「加賀・能登を中心としたる日本海文化展覽會」の計畫を樹てたのであつた。



そして着眼が餘り偏曲しないよう、眼界が狭く局限されぬよう、我々は先づ當時の京都帝國大學教授同圖書館長新村出博士に相談をもちかけ、顧問としてその指導を受けることになつた。固よりその後の計畫實現のことは全部展覽會委員並に石川縣立圖書館員の手になつたものである。當初より我々に許された時間と人手と經費の限界を無視してかゝつた爲、その陳列も出品目録も随分杜撰なものとなつたことを意識してゐる。しかし我々の展覽會は、立派に出来上つたものを廣く展覽するといふよりは、むしろそれを機會に其の問題に關して研究を始め、將來に研究の大成を期することを主目的としてゐる故に、その觀點からは、此度の計畫が可成好成绩を擧げ得たことを自ら満足に思つてゐる次第である。

今茲に出来上つた冊子目録は、展覽會の終了を出發點として、一つにはこの展覽會を観る機會をもたなかつた人々のために、二つには後日の研究資料として役立つしむべく、出品目録を改編し、内容の若干を除去し、重要なものに略解を施し、多數の文書を原文の儘登載などしたものである。

次に少しくこの目録編纂にあつて意を用いた具體的事項について記して置く。

- 一、「一般地誌の部に」に屬するものは、世界全體又は東洋方面に關する一般のものであるが、主としては古き、新しき各種の地圖類を蒐め、そこに現はれた海岸線と航路との交錯の裡に、世人の日本海に對する認識の時代的變化とその海上文化の概貌を窺ひ、文化的に日本海の位置づけをしようと考へたのである。
- 二、「日本海沿岸各地資料の部」に屬するものは、之によつて地方的に日本海文化の内容を見ると共に、加能越三州の位置づけのため、言はゞその周邊としたものである。日本海の周圍を加能越三國を除いて四つに分けたことなど一般には是認されないことであるかも知れぬが、茲には多少の意味があると考へた。
- 三、「加能越資料の部」としては前半に加能越三州の國・郡等に關するものを、後半には海岸線に沿うて點在する

町村が日本海に向つて如何に働きかけてきたか、その活動史を物語る資料を纏めてみた。未だ主要なる湊浦を盡してゐない憾みはあるが、今後の研究のために多少役立つかと思ふ。

四、「海運交通資料の部」は海の文化の最も重要な内容をなすもので航海資料・海運資料の二部に分つた。その分量は少いが町村資料中の關係の分を合せて見れば實質的には最も充實した部分と考へられる。

五、「特殊資料の部」は漂流・難船・異國船渡來・海防・測量等日本海文化の最も興味の深い特殊資料を、それ等の間には多少の關聯をつけて纏めたものである。最後に展覽會には參考資料として扱はれてゐたものゝ中、船舶摸型・船關係品等に關する部分をこの後に添加しておいた。

萬事に不自由勝の仕事の中に、ともかくもこれだけのものを残し得たことについては、何よりも先に、深い同情を以て援助を加へられた出品者各位に對し、この紙上において衷心より感謝の意を表しておきたいと思ふ。

昭和十一年十二月

石川縣立圖書館館長  
石川縣圖書館協會長

中 田 邦 造



## 凡例

四

- 一、此の目録は昭和十一年十月二十三日より二十七日まで五日間、石川縣立圖書館と石川縣圖書館協會との共同主催で、同館並に元石川縣商品陳列所において催したる加賀・能登を中心としたる日本海文化展覽會の出品目録に會後若干の手を加へ數十點の寫眞版を添へたものである。
- 二、目録の編纂は石川縣立圖書館員の手によつて成し就げたのであるが、主としてその任に當つたのは館員松本三都正君であつた。
- 三、文書の主なるものは、原文をその儘挿入したが、長文のもので除いたものも少くない。それらは後日一纏めにして刊行するつもりである。文書類の筆寫には主として館員太田敬太郎・松本三都正の兩君があつた。
- 四、末尾の年表は當初館員野口正喜君が一應調製したものを、後を承けて松本三都正君が現状までに仕上げたのである。
- 五、寫眞は館員繩村彌三男君の手になつたものである。
- 六、表紙意匠に用いた圖は館所藏の珠洲三崎港の木版畫によつた。

## 目次

### 圖版の部

	所藏者名	頁
一 萬國全圖	八田兵次郎	二
二 東洋航海圖	長崎縣立圖書館	三
三 海陸地圖	淺田榮吉	四
四 日本島圖	帝室博物館	四
五 日本國古圖	同	四
六 日本國大繪圖	杉浦丘園	四
七 皇國總海岸圖	函館市立圖書館	六
八 舟持中口上書	山本元	九
九 舟持中證文	同	一〇
一〇 大野丸米船救助之圖	士井利章	一一
一一 新潟湊之眞景	栗田元次	一三
一二 長東正家過書	本間光正	一三
一三 蝦夷嶋奇觀	松本彦次郎	一八



一四	續蝦夷島奇觀	.....	静岡縣立葵文庫	一九
一五	蝦夷國志附錄	.....	同	一九
一六	加越能三州圖	.....	京都帝國大學圖書館	二五
一七	濱坂ヨリ木場方沿海古圖	.....	京都帝大地理學教室	二六
一八	繪馬	.....	八幡神社	三二
一九	前田利長定書	.....	吳竹文庫	三六
二〇	村上頼勝下知狀	.....	同	三六
二一	船鑑	札	明翫彌之助	三八
二二	船鑑	札	美川尋常小學校	三八
二三	船往來手形	.....	梅本彰平	三八
二四	津出	手形	小泉八重	六〇
二五	安部屋港之圖	.....	平維新	五七
二六	政徳丸帆船之圖	.....	中谷藤作	六四
二七	富田内藏允・石川忠左衛門連署狀	.....	番匠彌右衛門	六八
二八	富山領西岩瀬濱網場之圖	.....	富山市立圖書館	七三
二九	船法	度	番匠彌右衛門	七六
三〇	密輸禁制札	.....	廣海仁三郎	七九
三一	漂流朝鮮人之上書及圖	.....	鳥取縣立圖書館	八三

三二	異國船年代記	.....	酒井達郎	八八
三三	蘭譯遭厄日本紀事	.....	静岡縣立葵文庫	九二
三四	御臺場所圍之圖	.....	金森久一	九七
三五	御臺場作り方ノ圖	.....	同	九七
三六	帆船摸型	.....	藤塚神社	九九
三七	船玉神鈴	.....	觀田次郎吉	一〇〇
三八	船箆	.....	山守博	一〇一
三九	船内扇額	.....	小泉八重	一〇一
四〇	船幟	.....	鹽屋村	一〇二
四一	船幟	.....	野崎俵一	一〇二
四二	標識	旗	作宮七太郎	一〇三
四三	繪符	.....	木谷吉次郎	一〇三

本文の部

一 一般地誌の部

1	世界・東洋	.....	一
2	日	.....	四



二 日本海沿岸各地方資料の部

- 1 本州 西南部 ..... 八
- 2 本州 東北部 ..... 一一
- 3 北海道・樺太 ..... 一四
- 4 對岸地方 ..... 二一

三 加能越資料の部

- 1 三州一般・國郡 ..... 二五
- 2 町 ..... 二八
- 加賀の部 ..... 二八
- 能登の部 ..... 五二
- 越中の部 ..... 七一

四 海運交通資料の部

- 1 航海資料 ..... 七五
- 2 海運資料 ..... 七九

五 特殊資料の部

- 1 漂流・難船等 ..... 八三
- 2 異國船渡來 ..... 八八

- 3 海防 ..... 九三

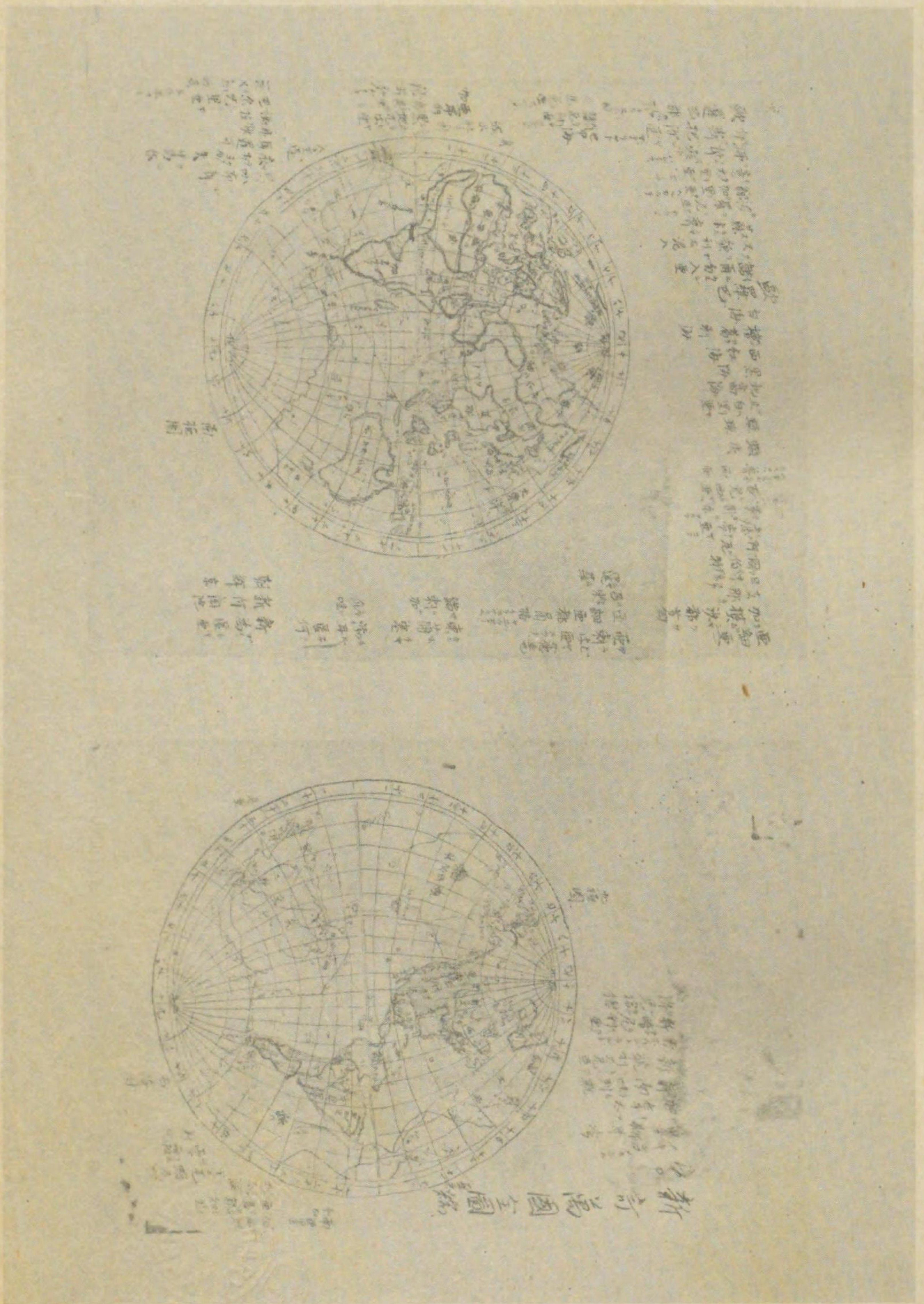
- 4 測量 ..... 九七

- 5 船舶摸型・船關係品類 ..... 九九

六 日本海海事年表

- 出品者名簿 ..... 一〇五



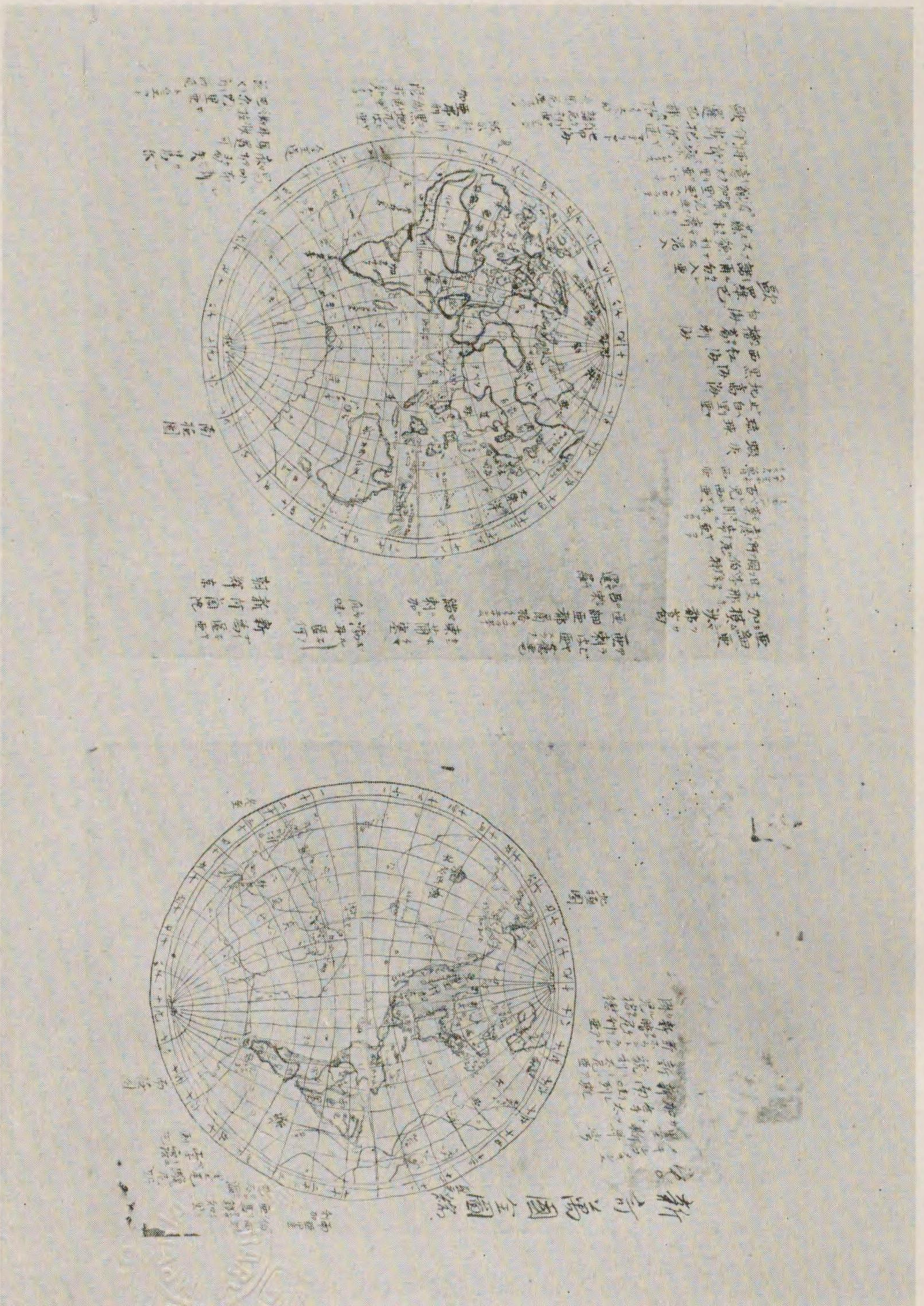


左9.5-7.4寸 右6.5-9.0寸

(七文本)

圖全國萬一

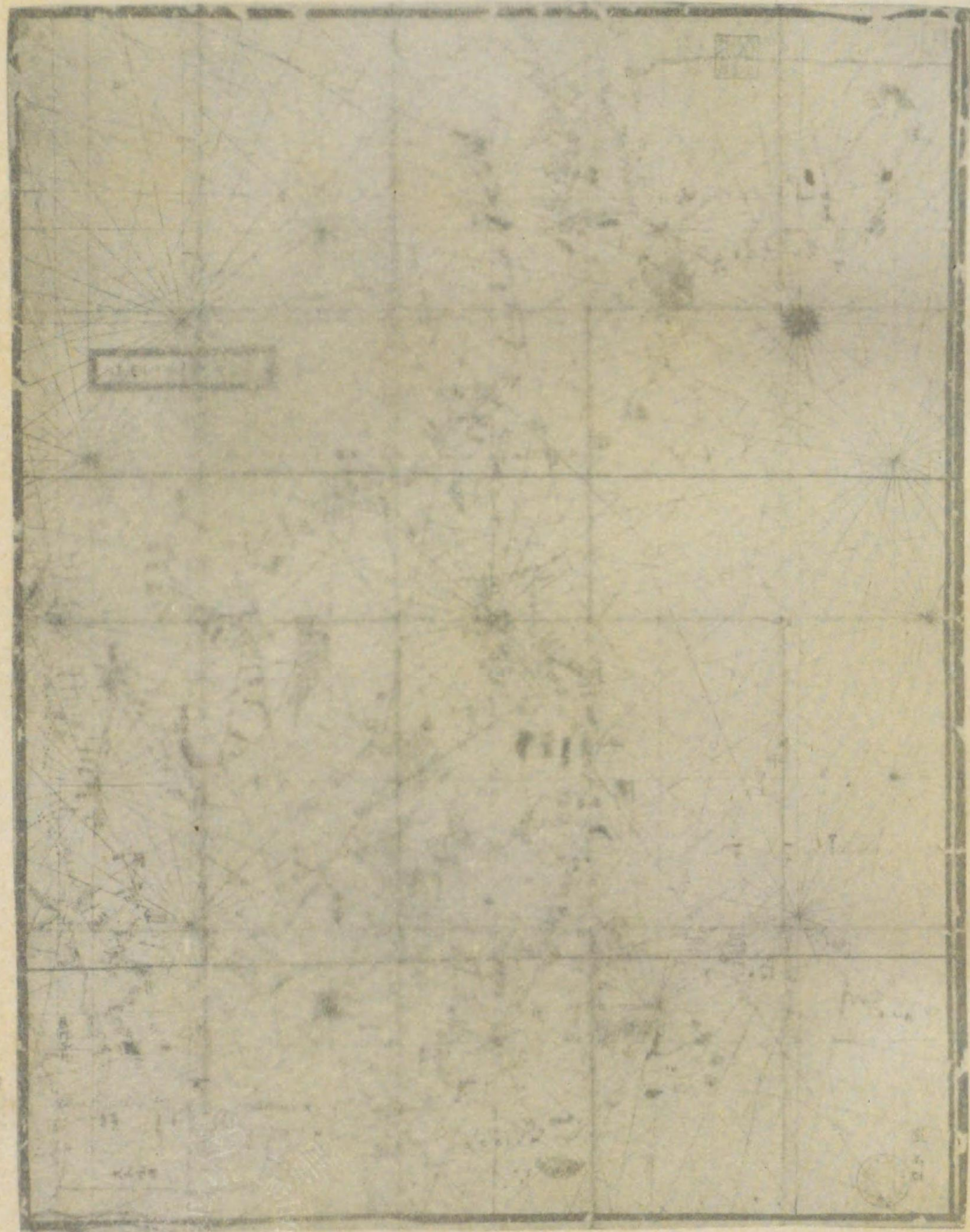




在9.5-7.4寸 在8.5-9.0寸

(七文本) 圖 全 國 萬 一



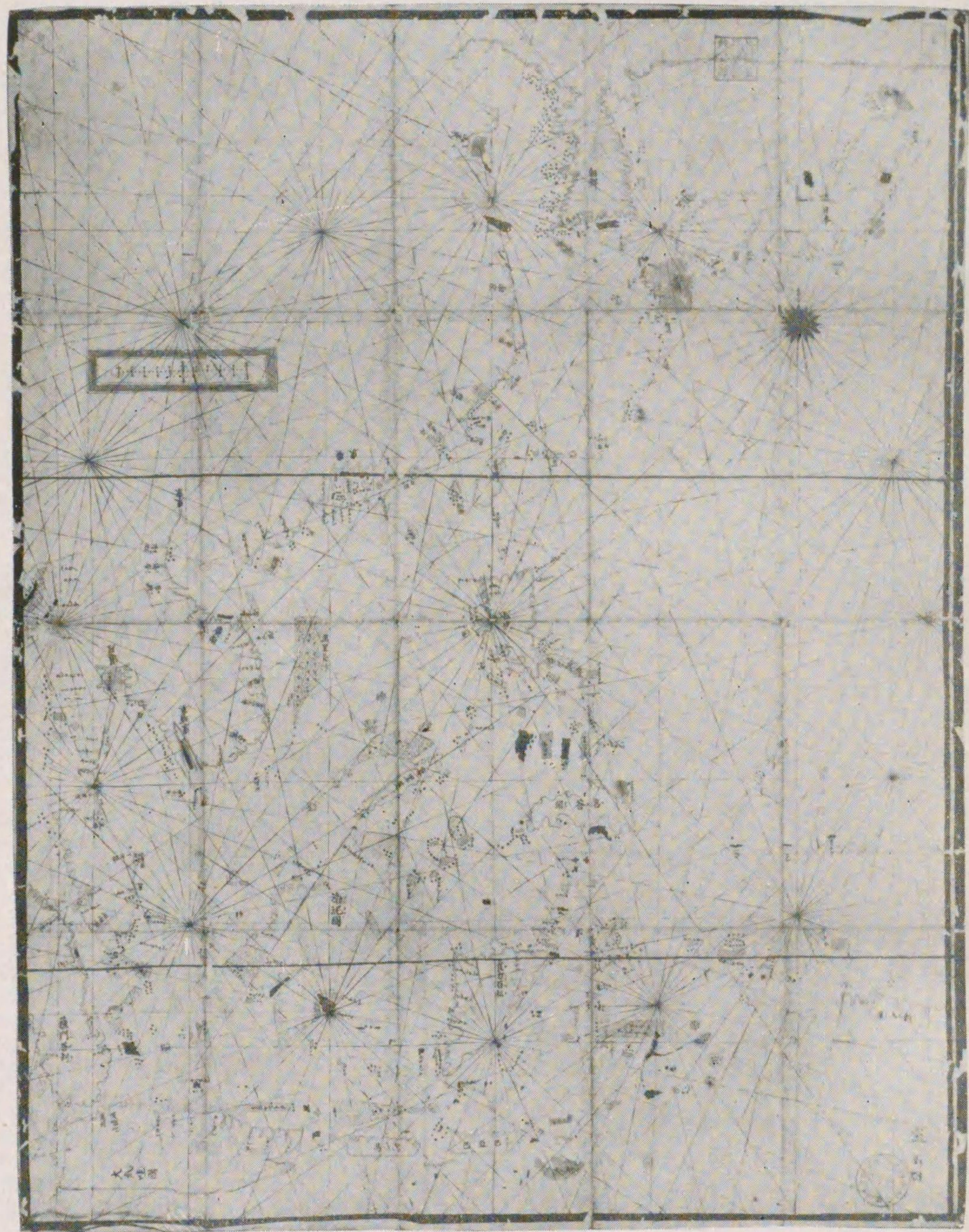


2.25-2.25尺

(五一文本) 圖海航洋東 二







2.25-2.95尺

(五一文本) 圖海航洋東 二









4.3-1.75尺

(六一文本)

圖 地 陸 海 三





1.5-0.7尺

(九一文本)

圖島本日四



2.0-1.75尺

(九一文本)

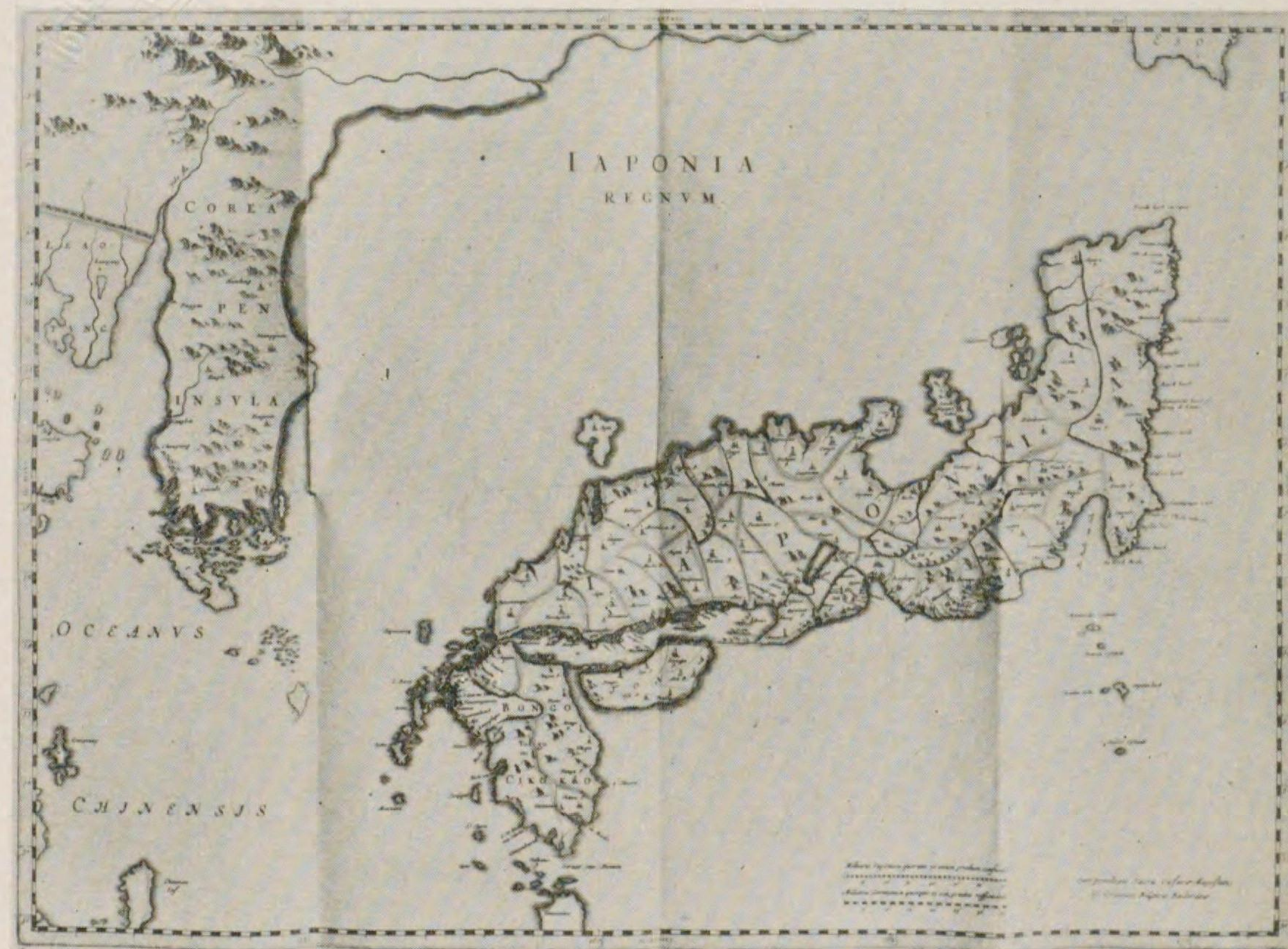
圖古國本日五





1.5-0.7尺

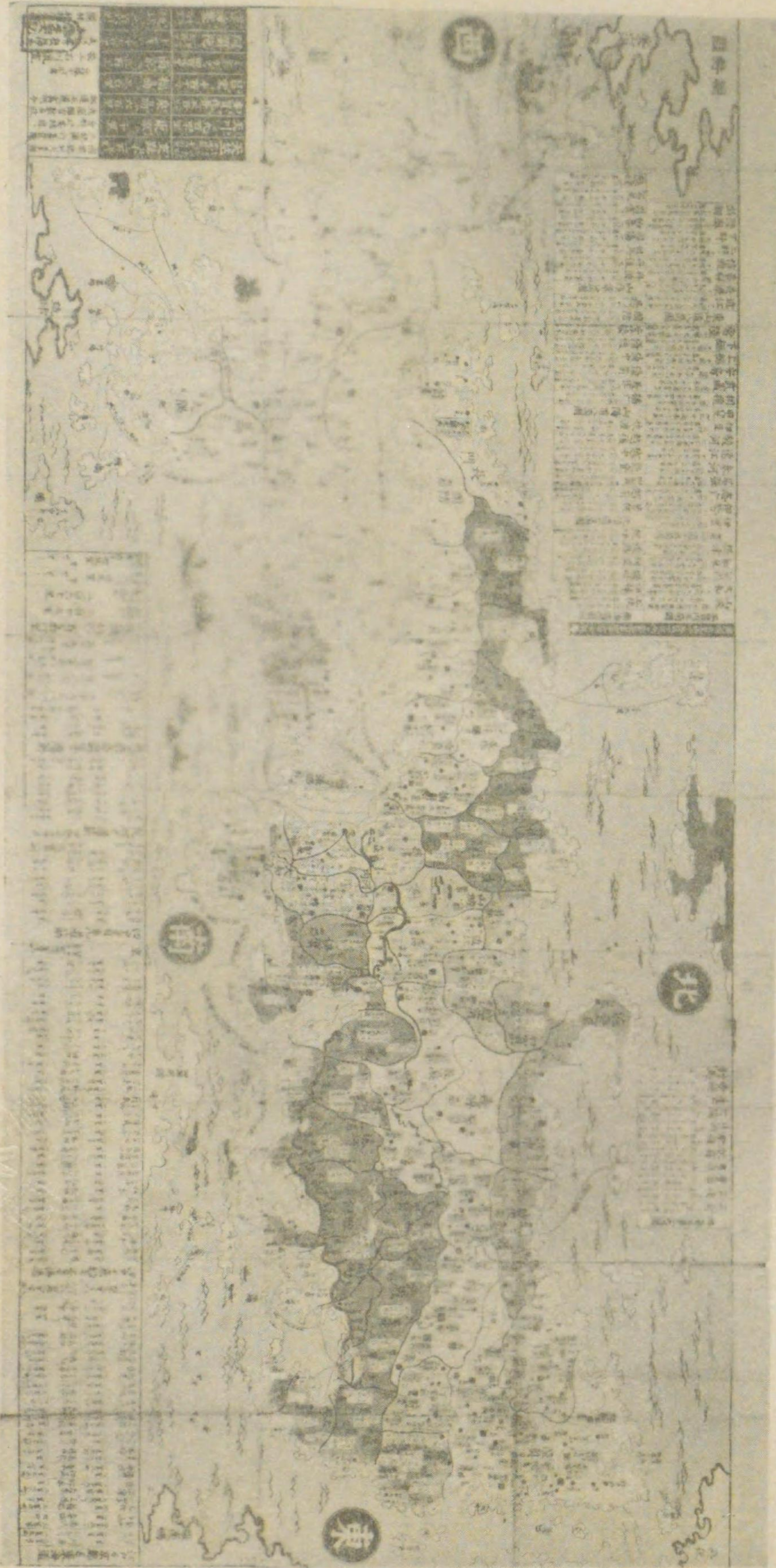
(八一文本) 圖島本日四



2.0-1.75尺

(九一文本) 圖古國本日五





4.3-2.1R

(三二文本)

圖繪大國本日六







4.3-2.1尺

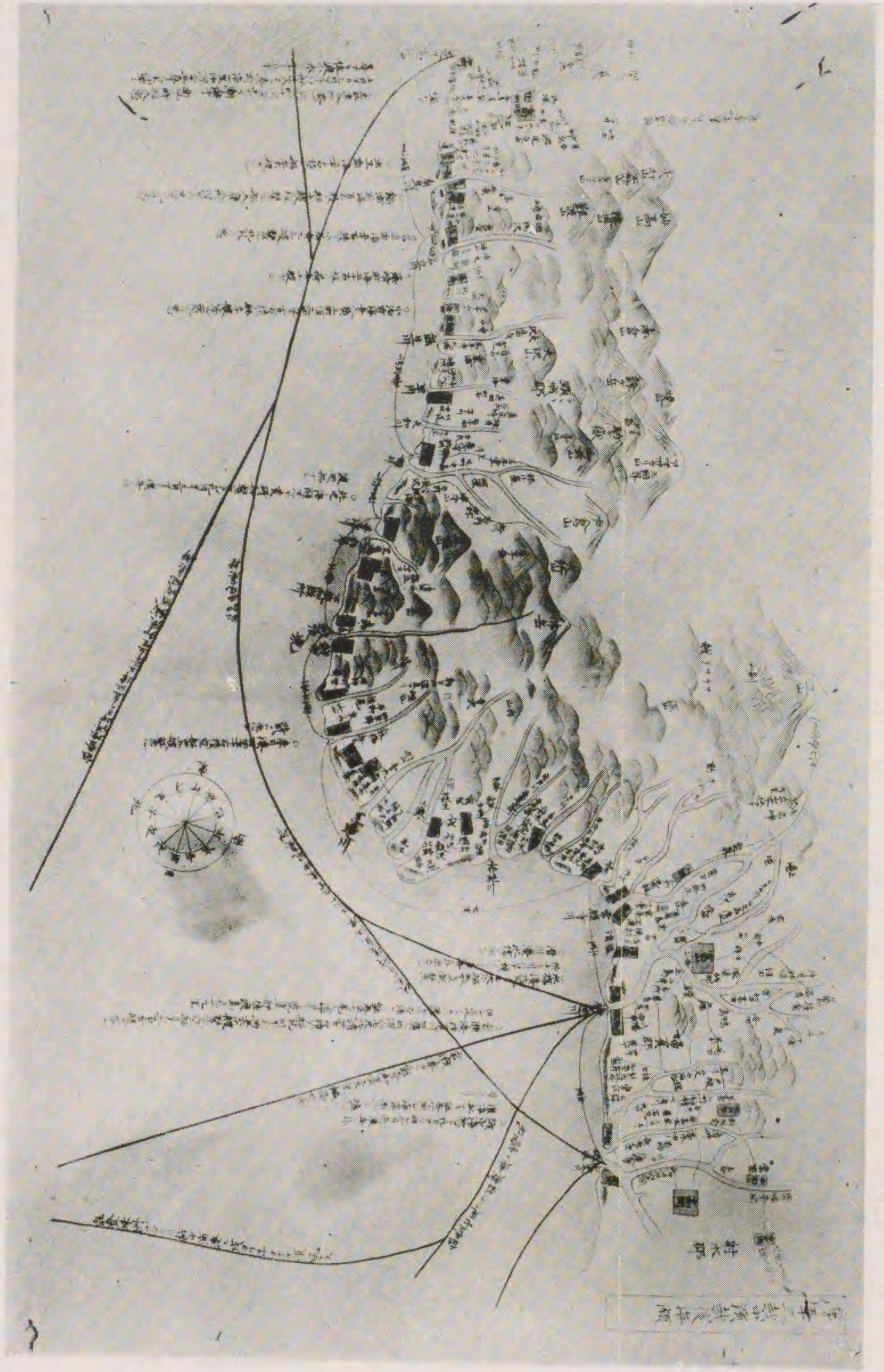
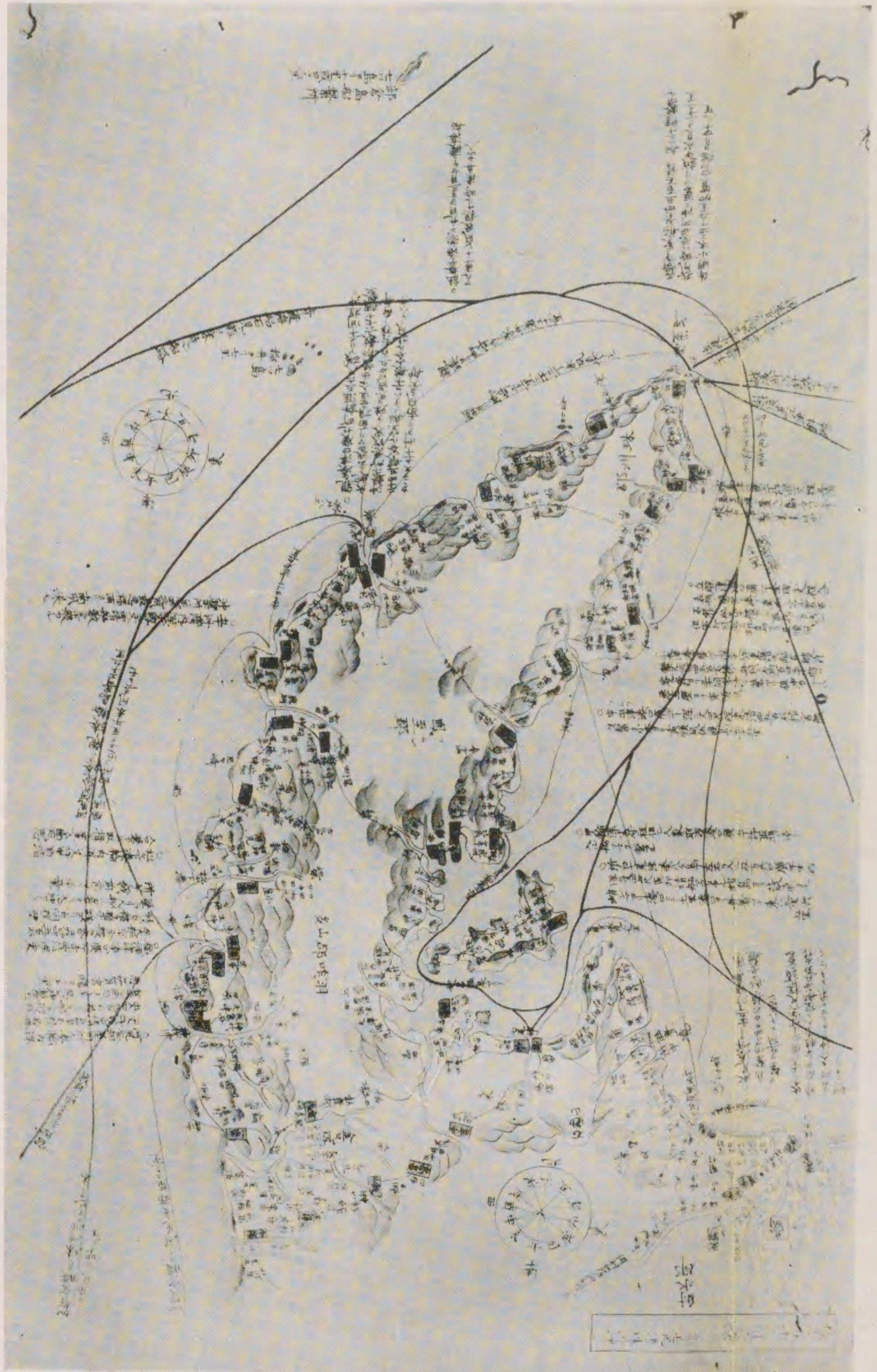
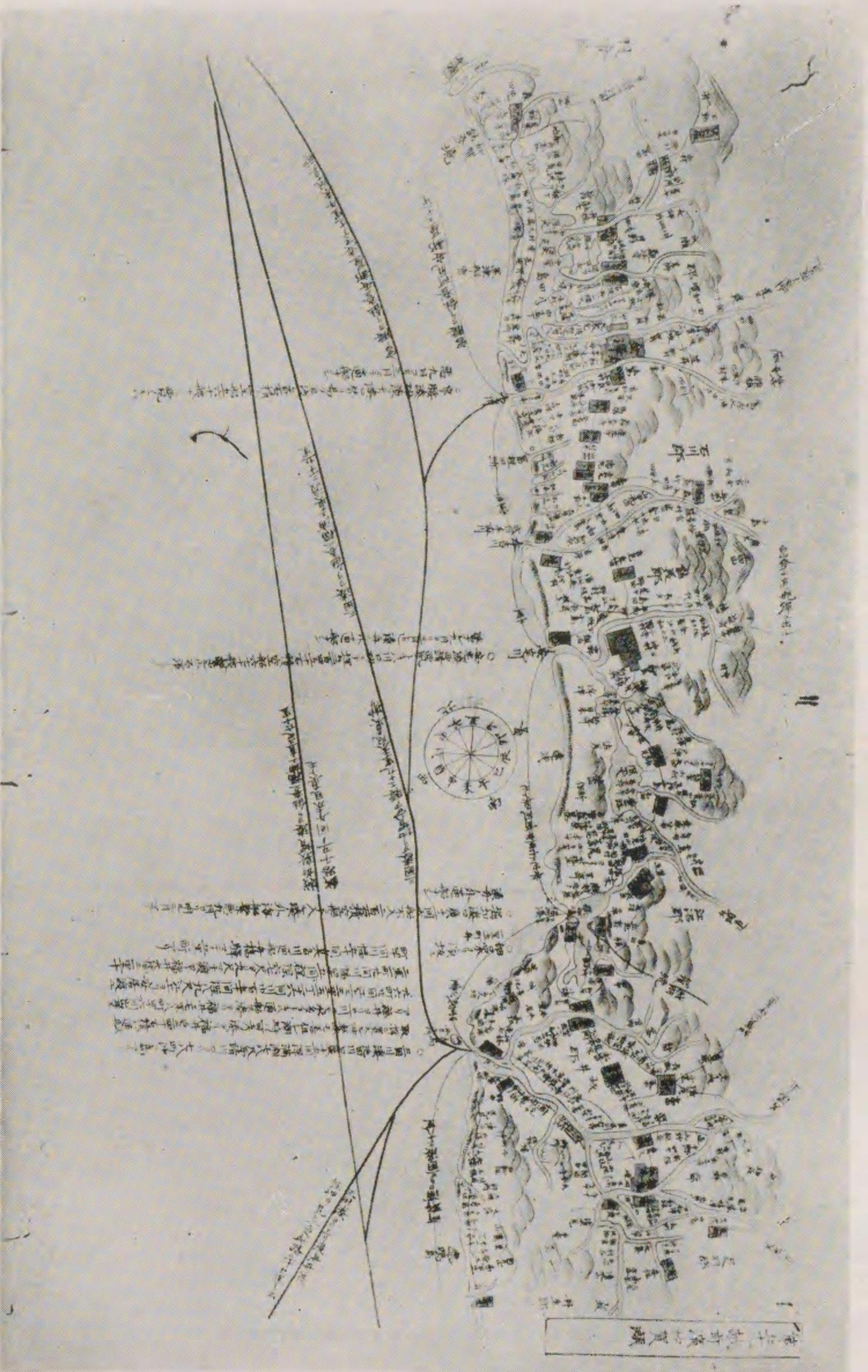
(三三文本)

圖繪大國本日六









皇國總海岸圖 (八三文本) 七 每 1.23-0.88 尺

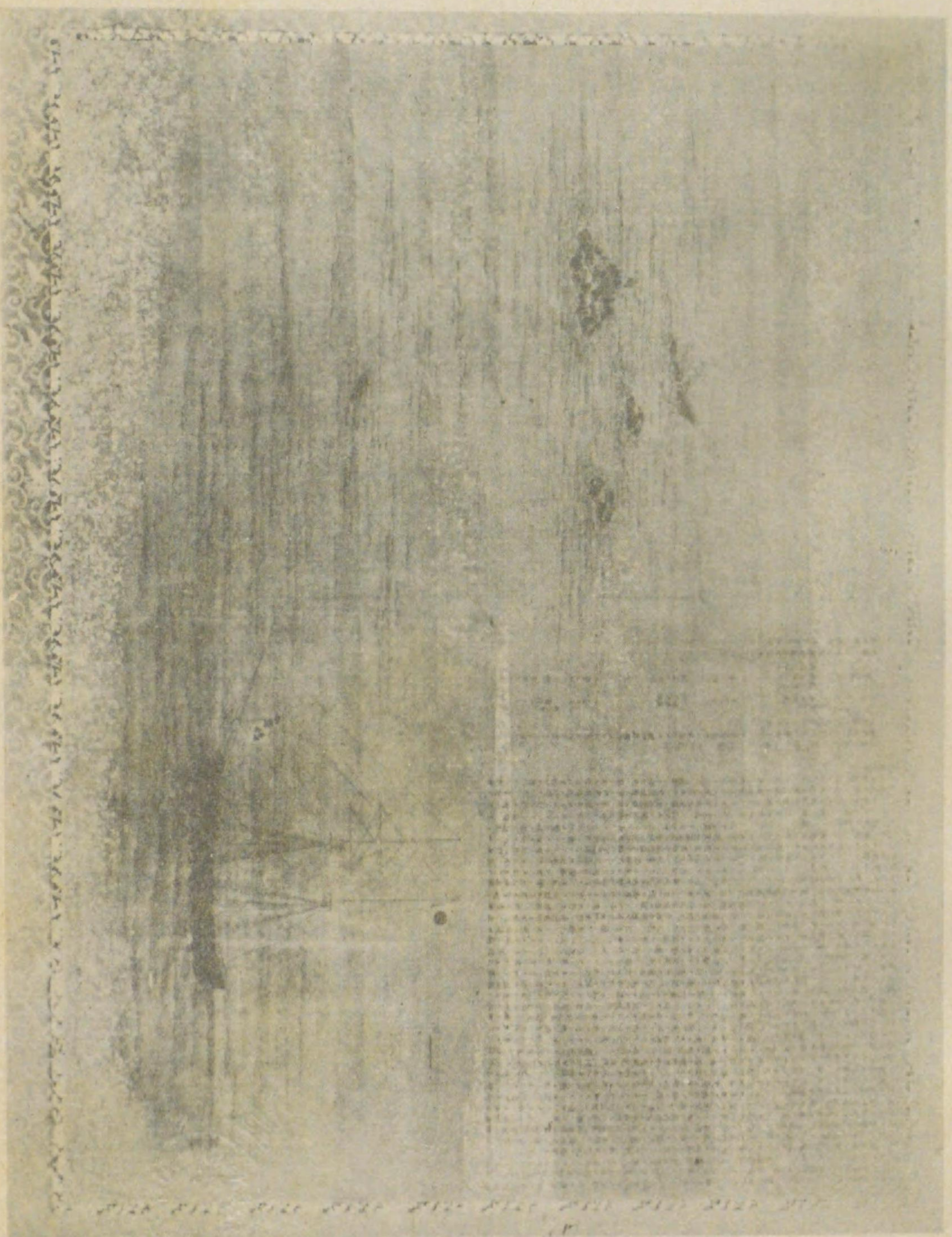












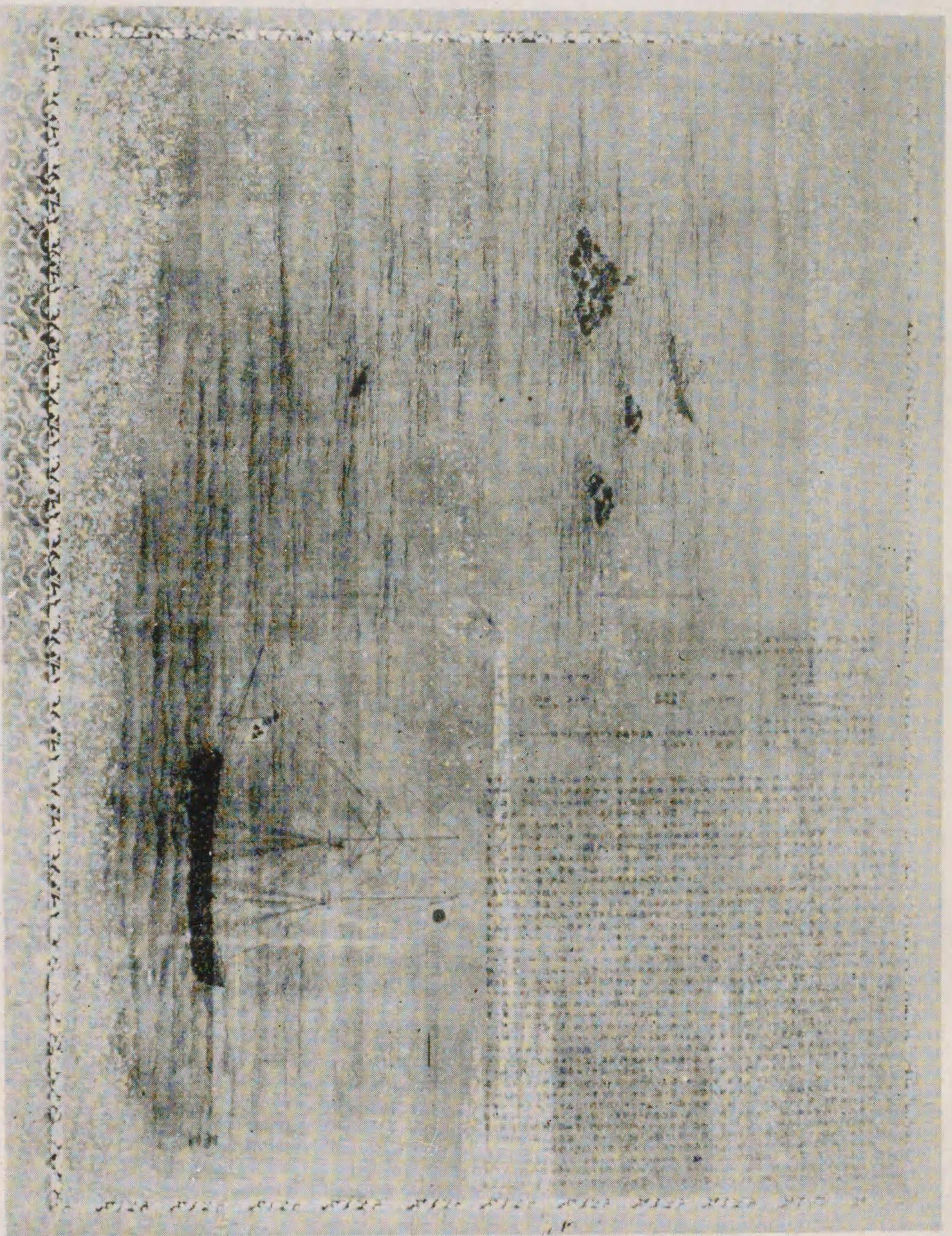
2.35-1.31R

(八五文本)

圖之助救船米丸野大 〇一





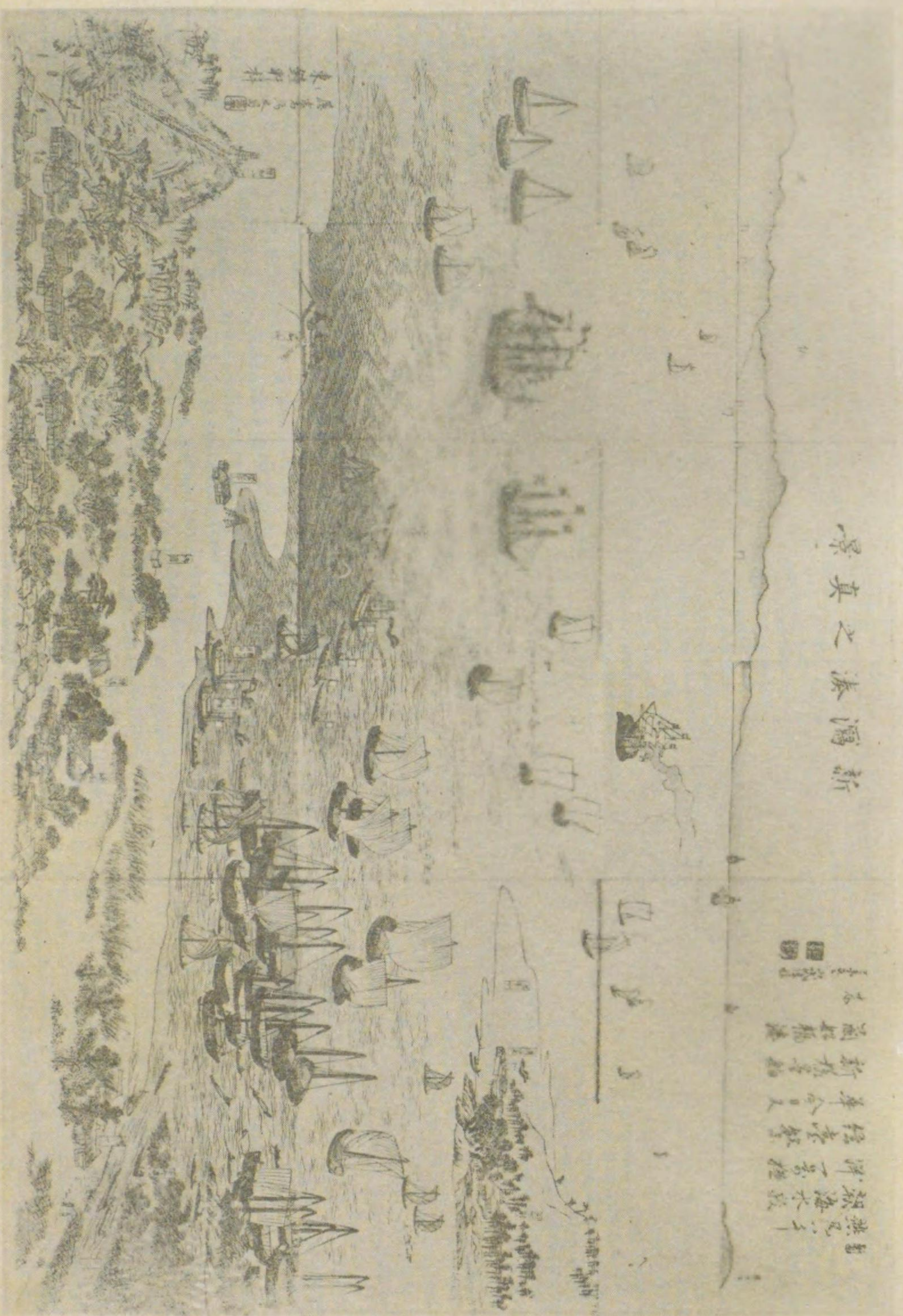


2.35-1.8尺

(八五文本)

圖之助救船米丸野大 〇一





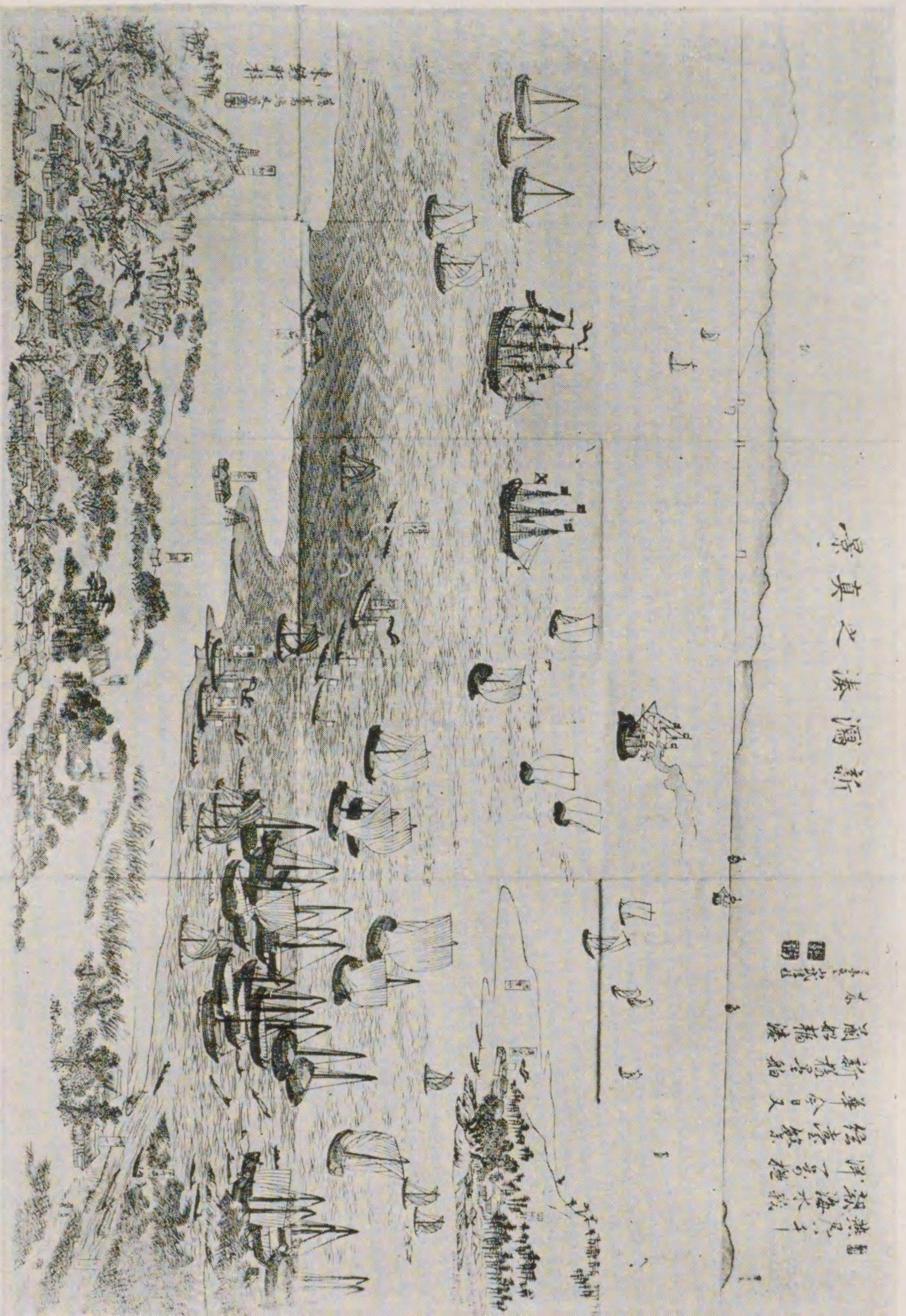
2.45-1.67尺

(三七文本)

景真之濠新

—





2.45-1.67尺

(三七文本)

景真之澳滬新

一一



Handwritten text in cursive script (草書) on a rectangular slip of paper, mounted on the left page. The text is arranged in approximately ten horizontal lines, reading from right to left. The characters are fluid and connected, characteristic of the cursive style. The slip is slightly aged and shows some staining.

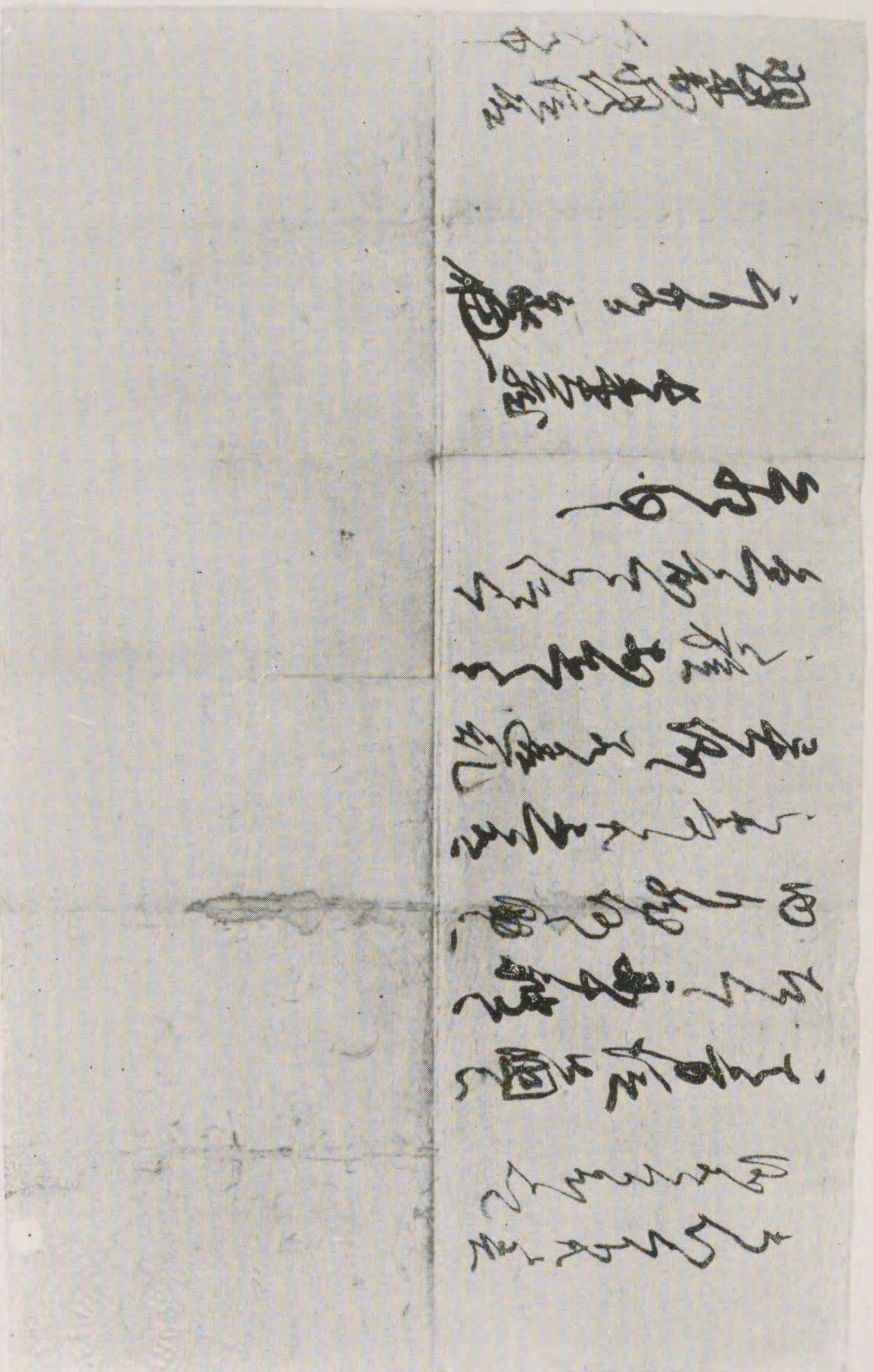
1.85-1.85R

(八七文本)

書過家正東長 二一







一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

1.65-1.05R

(八七文本)

書過家正東長 二一





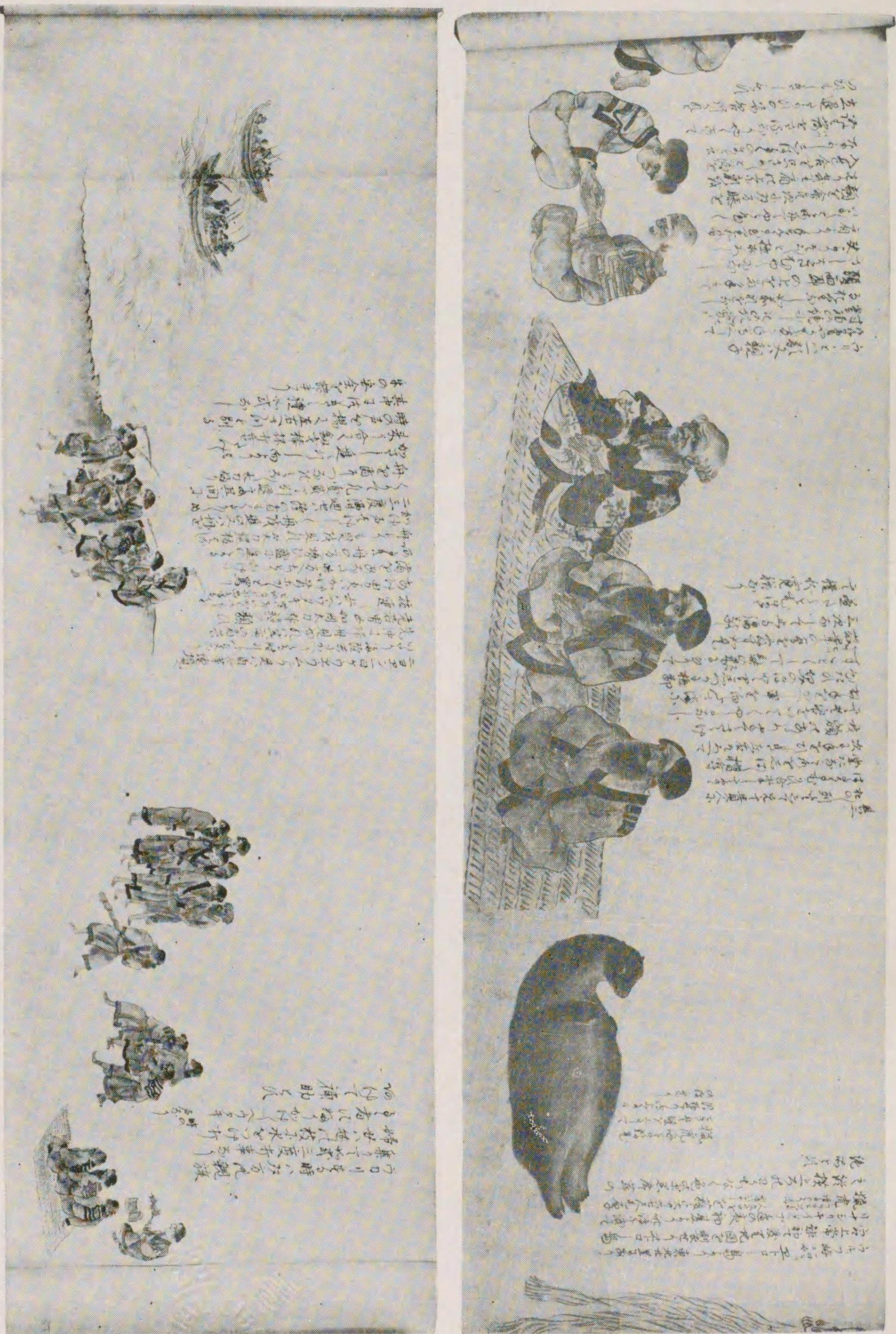
高 9 寸

(七〇一文本)

觀 奇 鳴 夷 蝦 三 一







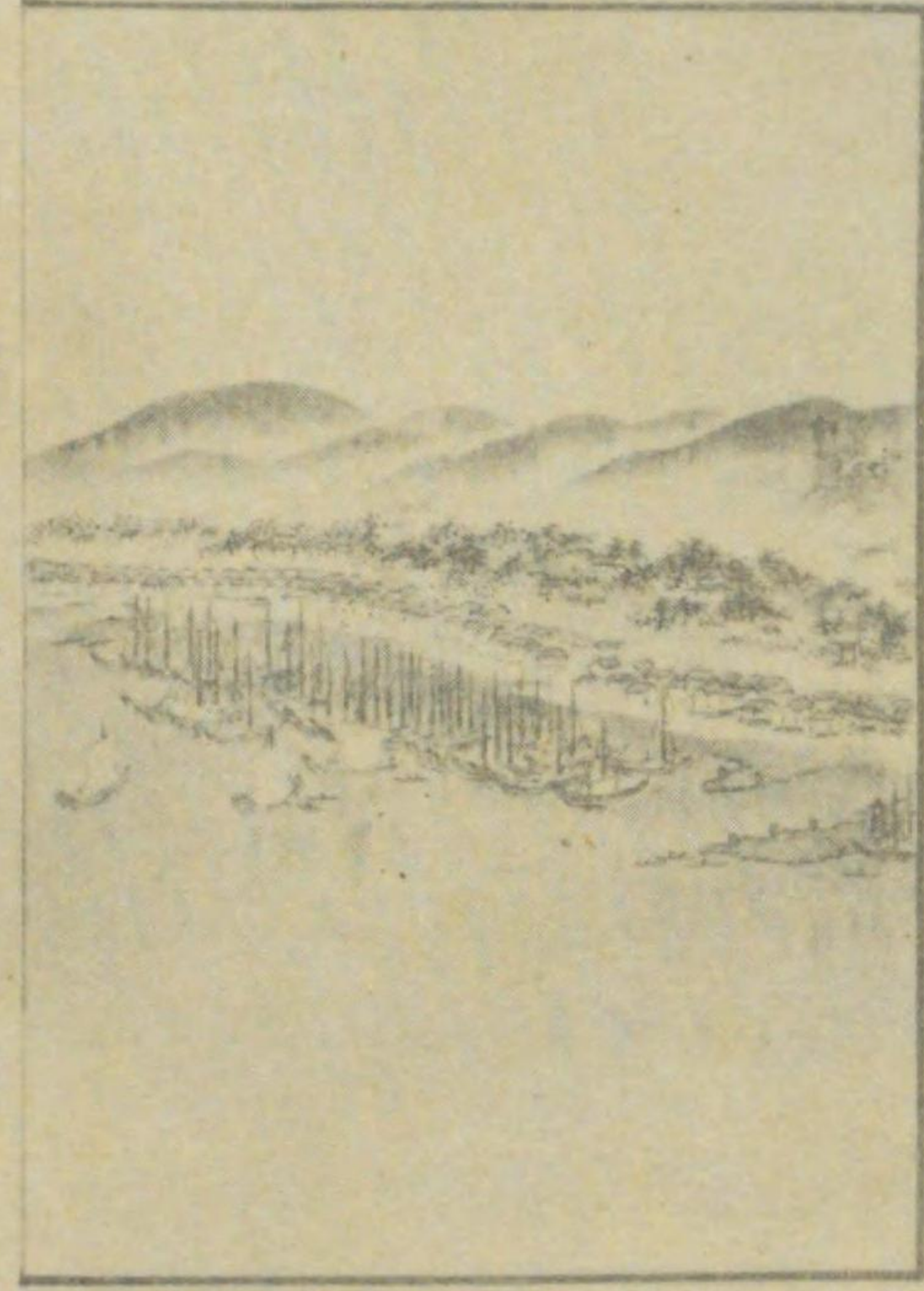
高9寸

(七〇一文本)

觀奇嶋夷蝦三一







8.3-8.4寸

(八〇—文本) 観奇島夷蝦 續 四一

加平小帳夷國志附録也若任之河  
 耳  
 嘉永六と替こみ年せし  
 津之月一先の七日  
 尾野義和志

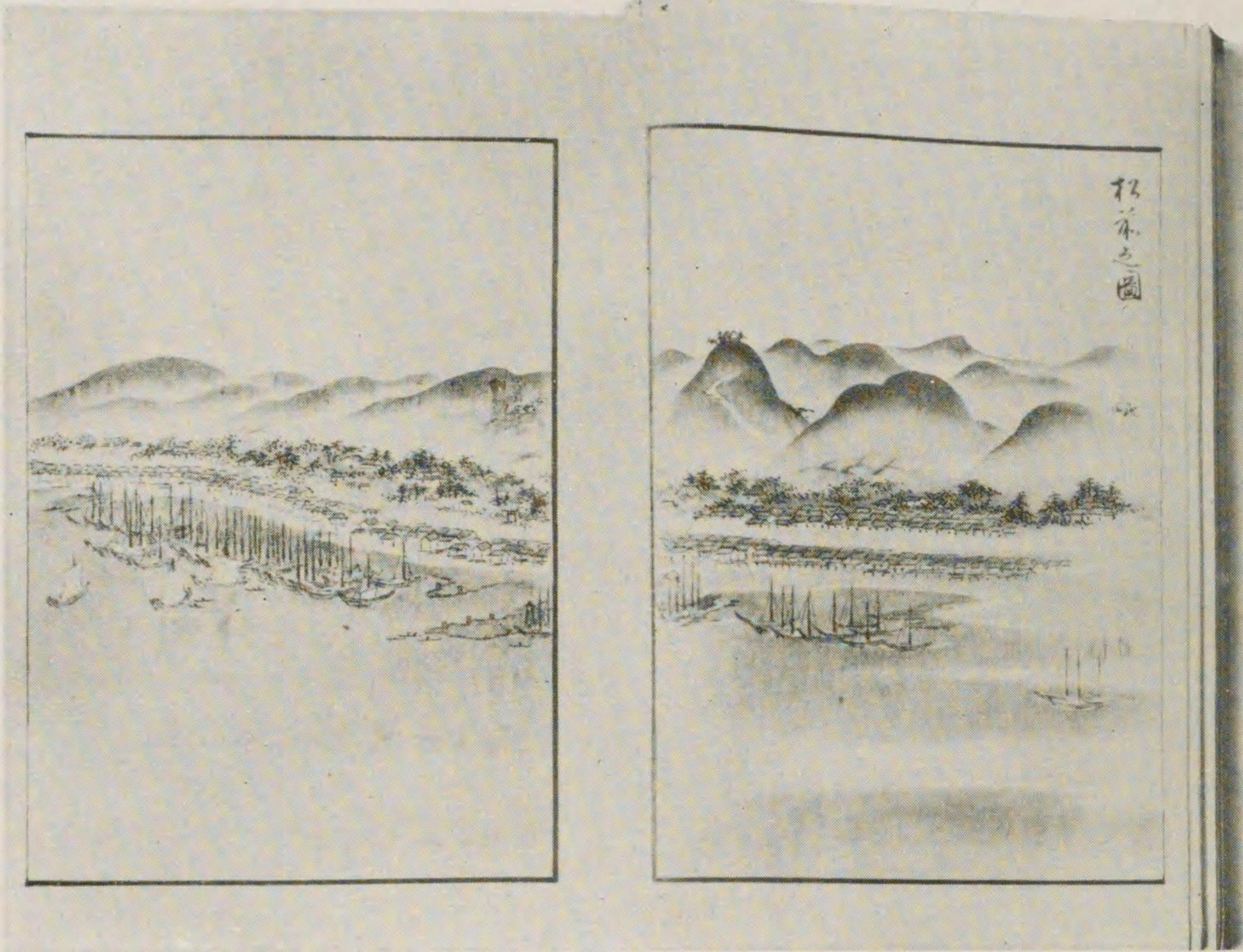
六部の中一云版の製法廻轉機  
 梳を動かす一水は此廻轉機  
 うちをうりて此こは有るこは  
 室にたりの人のまゝ廻轉機梳  
 動をえくはた毎はてぬこは  
 別巻と外

8.3-8.4寸

(〇—文本) 録附志國夷蝦 五一

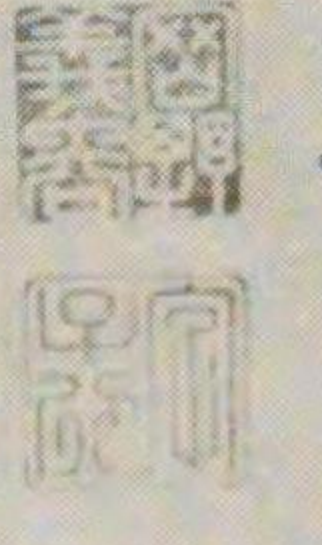






8.8-6.4寸

(八〇一文本) 観奇島夷蝦續 四一

六部の内一、衣服の製法、腰纏、袴、  
 袴、羽織、袴、小笠、腰纏、腰纏、  
 うちきり、いね、こ、紙、有、く、り、  
 室、に、り、人、の、ま、て、何、纏、腰、纏、  
 羽、織、え、く、た、た、た、た、た、た、た、  
 別、巻、と、り、  
 加、平、小、帳、夷、國、志、附、録、也、名、臣、之、傳、  
 耳、好、マ、  
 嘉、永、六、と、替、三、の、年、中、一、  
 神、皇、月、一、の、日、  
 尾、野、義、和、三、  


8.8-6.4寸

(〇一一文本) 録附志國夷蝦 五一









12.3-5.6尺

(八三一文本)

圖州三能越加六一





12.3-5.6尺

(八三一文本)

圖州三能越加六一





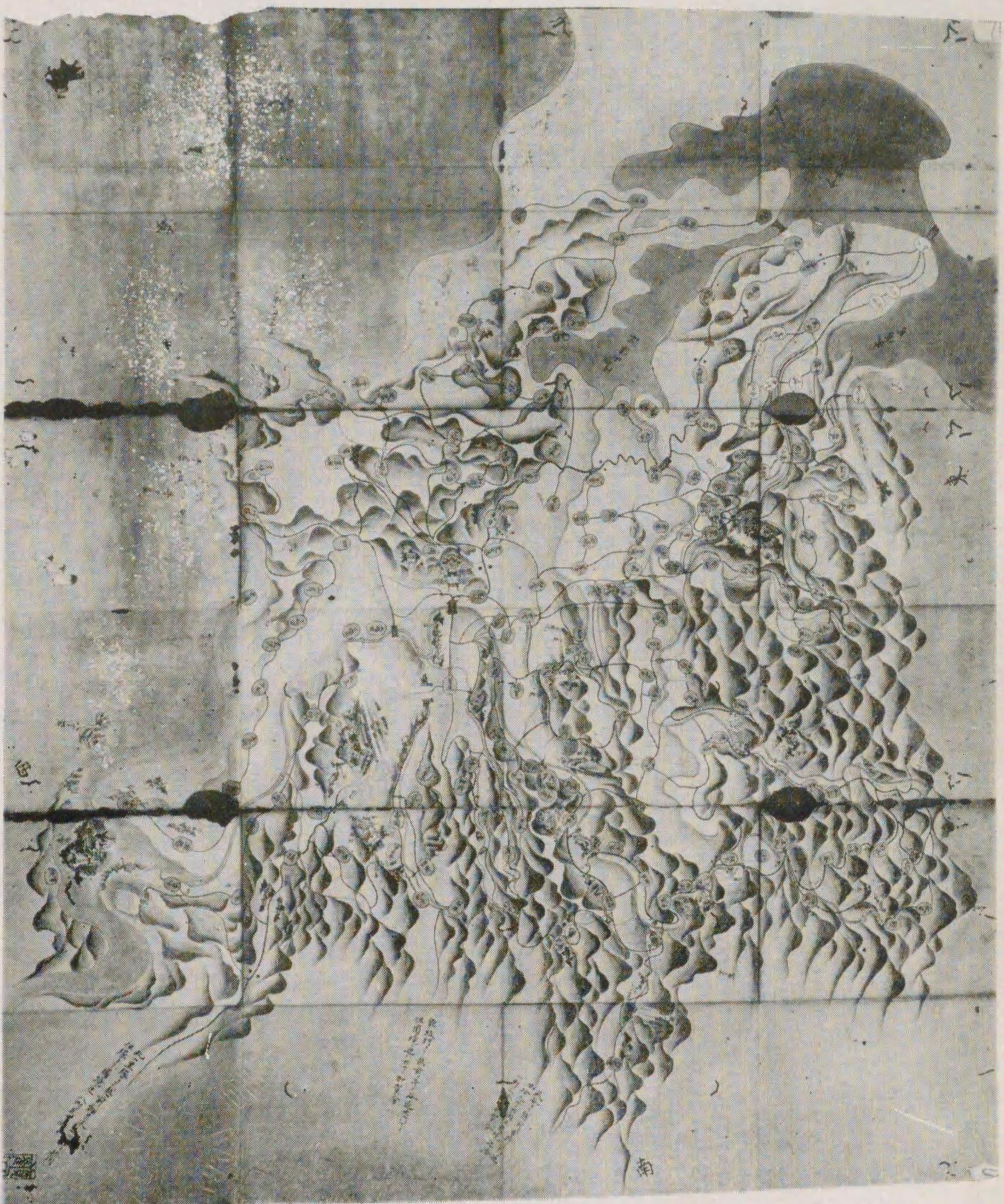
3.38-2.92尺

(二五--文本)

圖古海沿方場木リヨ坂濱

七一





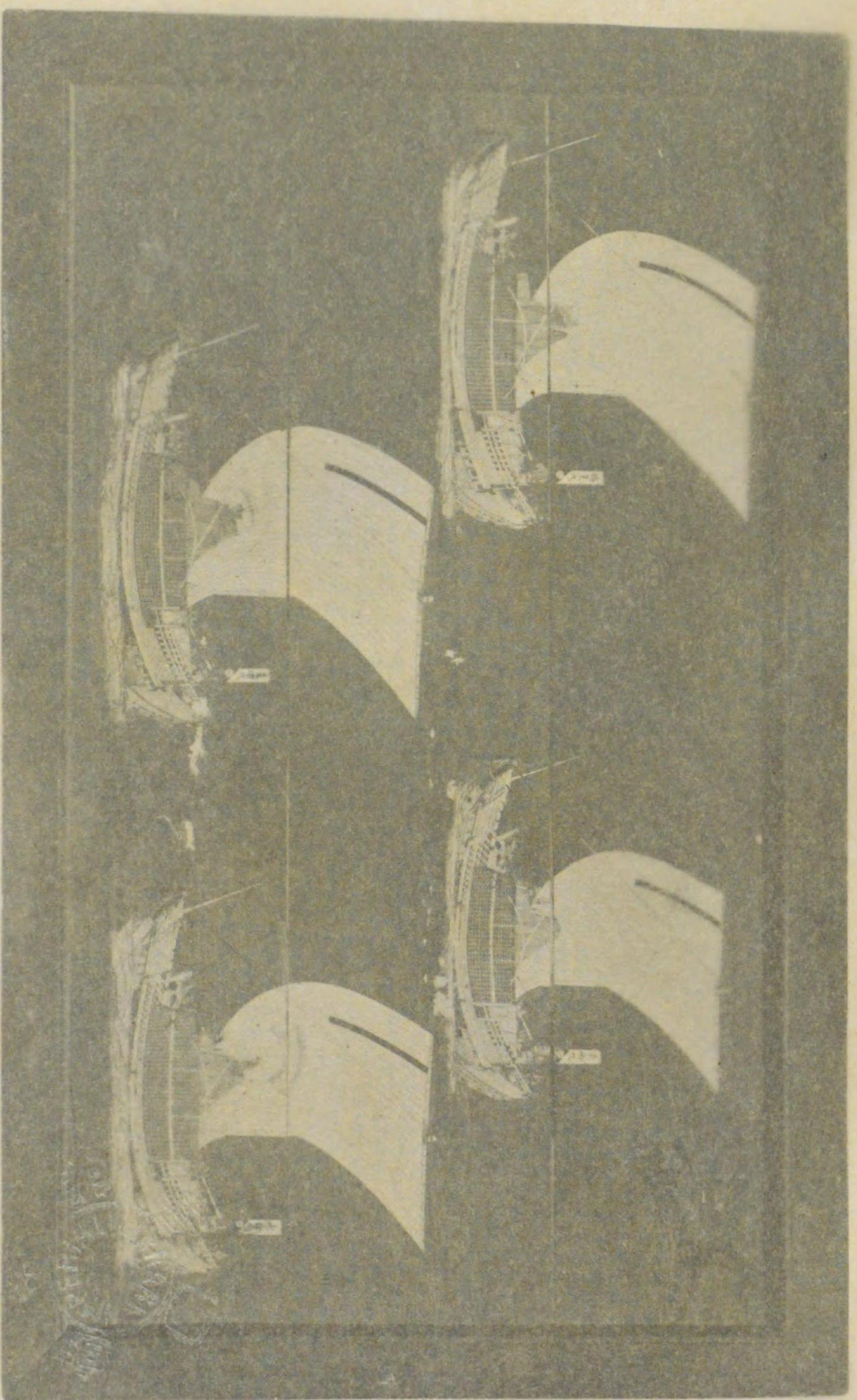
3.38-2.92尺

(二五--文本)

圖古海沿方場木ヨ坂濱

七一





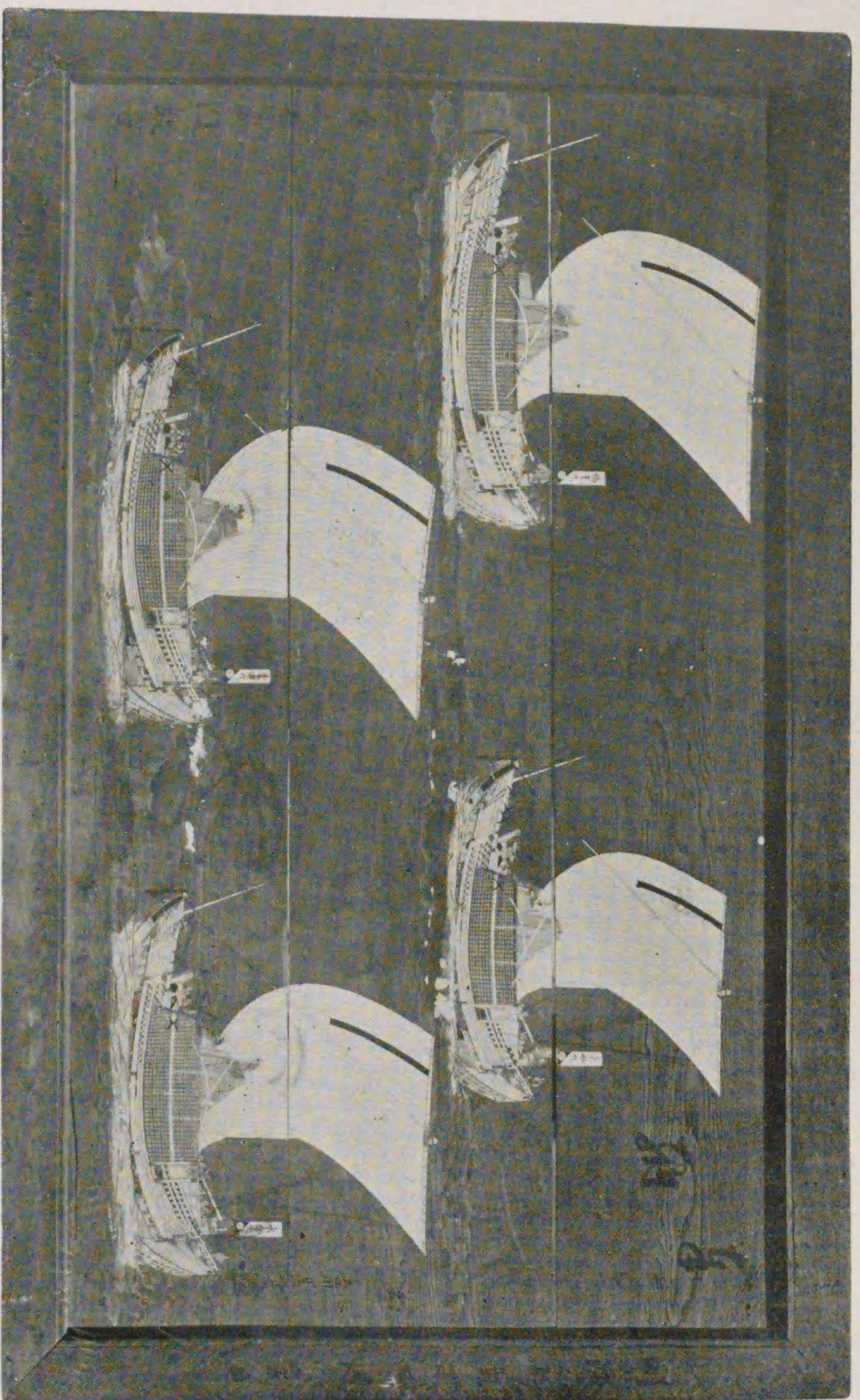
9.4-3.95尺

(四九一文本)

馬 繪 八一







9.4-3.95尺

(四九一文本)

馬

繪

八一







終身記 用字海 林 書  
 之 此 比 不 收 保 物 上  
 立 畫 卷 之  
 一 萬 村 如 柳 書 心 極 之 上 也  
 本 此 之 之 之 之 之 之 之 之  
 好 之 此 之 此 之 之 之 之  
 一 萬 村 流 流 流 流 流 流 流 流  
 海 之 書 一  
 一 萬 村 之 一 冊 平 俗 冊 之 前 之 後  
 一 萬 村 之 書 一  
 右 一 冊 之 書 一  
 萬 村 之 書 一  
 萬 村 之 書 一

1.65-1.11尺

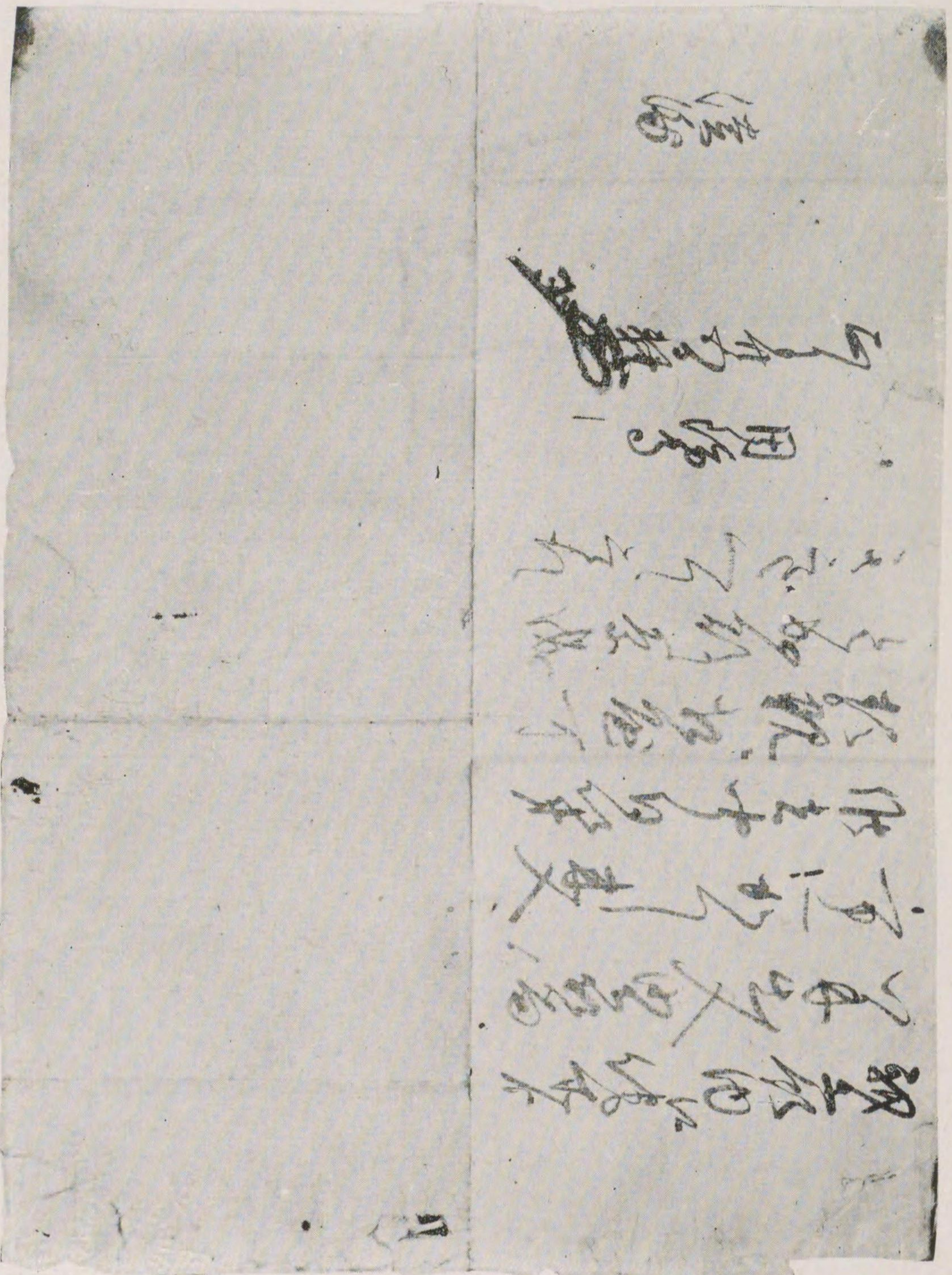
(七一二文本)

書定長利田前 九一









1.34-0.98尺

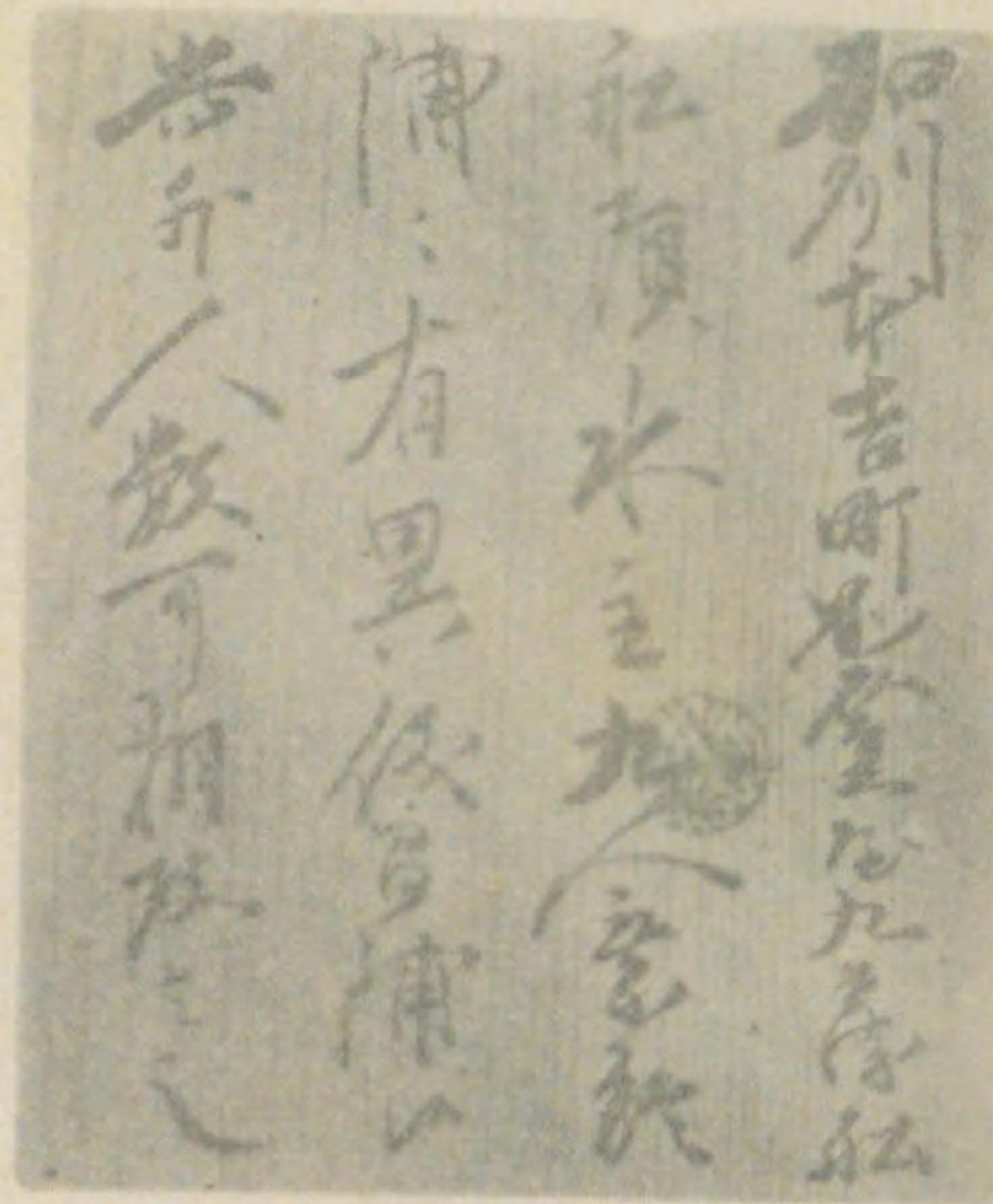
(八一二文本)

狀知下勝頼上村

〇二

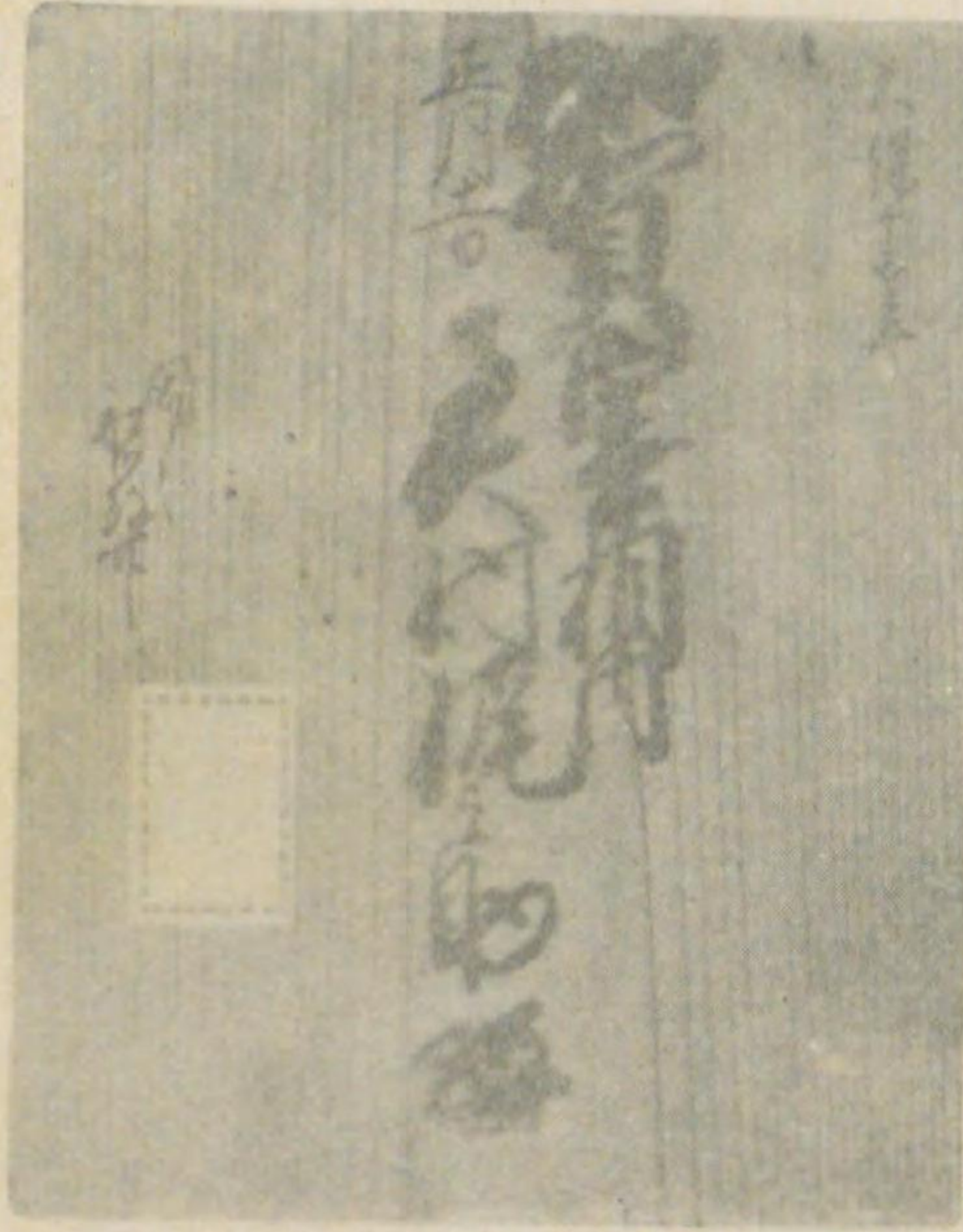


二一 船鑑札 (本文三三四)



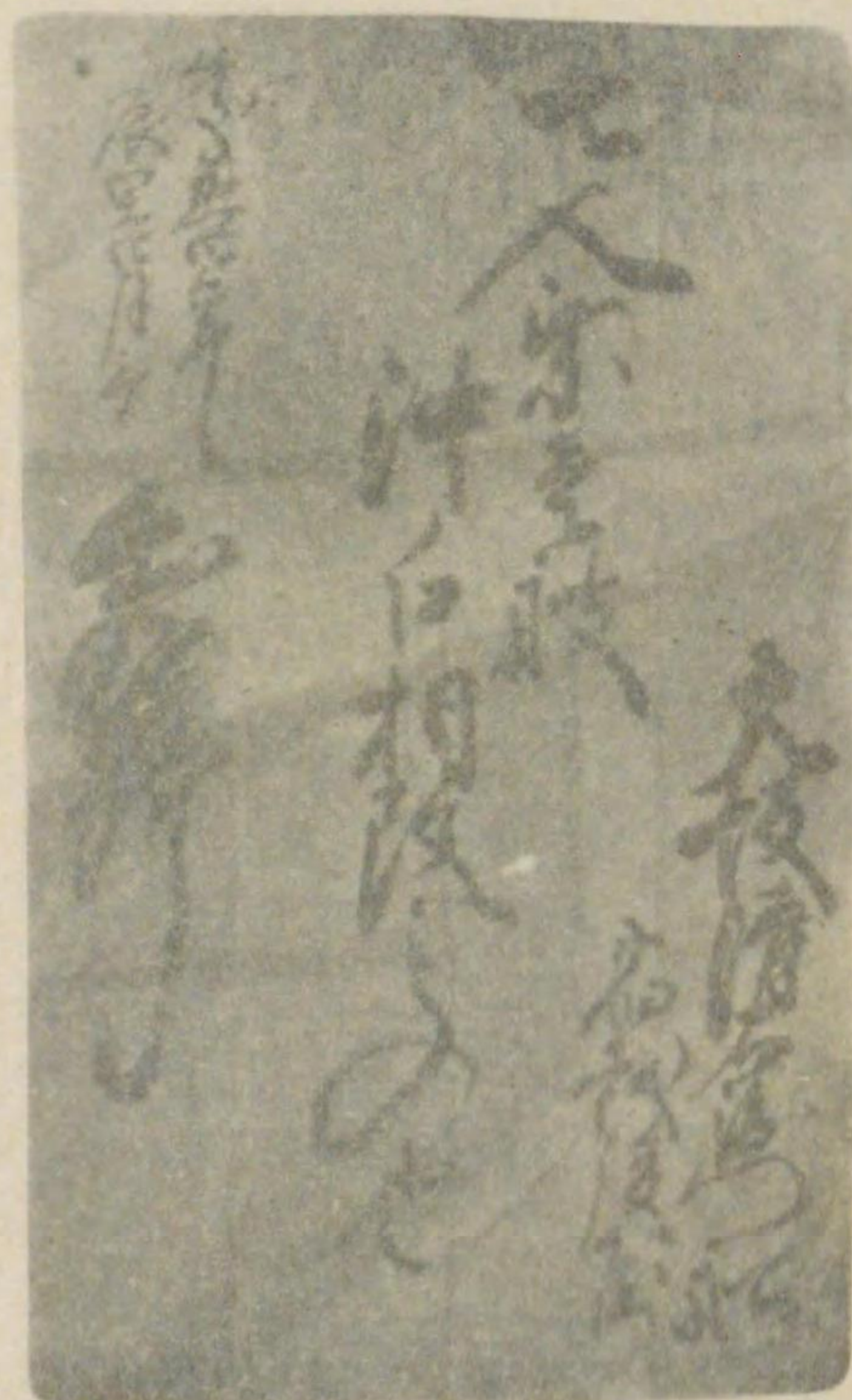
4.4-4.8寸

二三 船鑑札 (本文三三三)



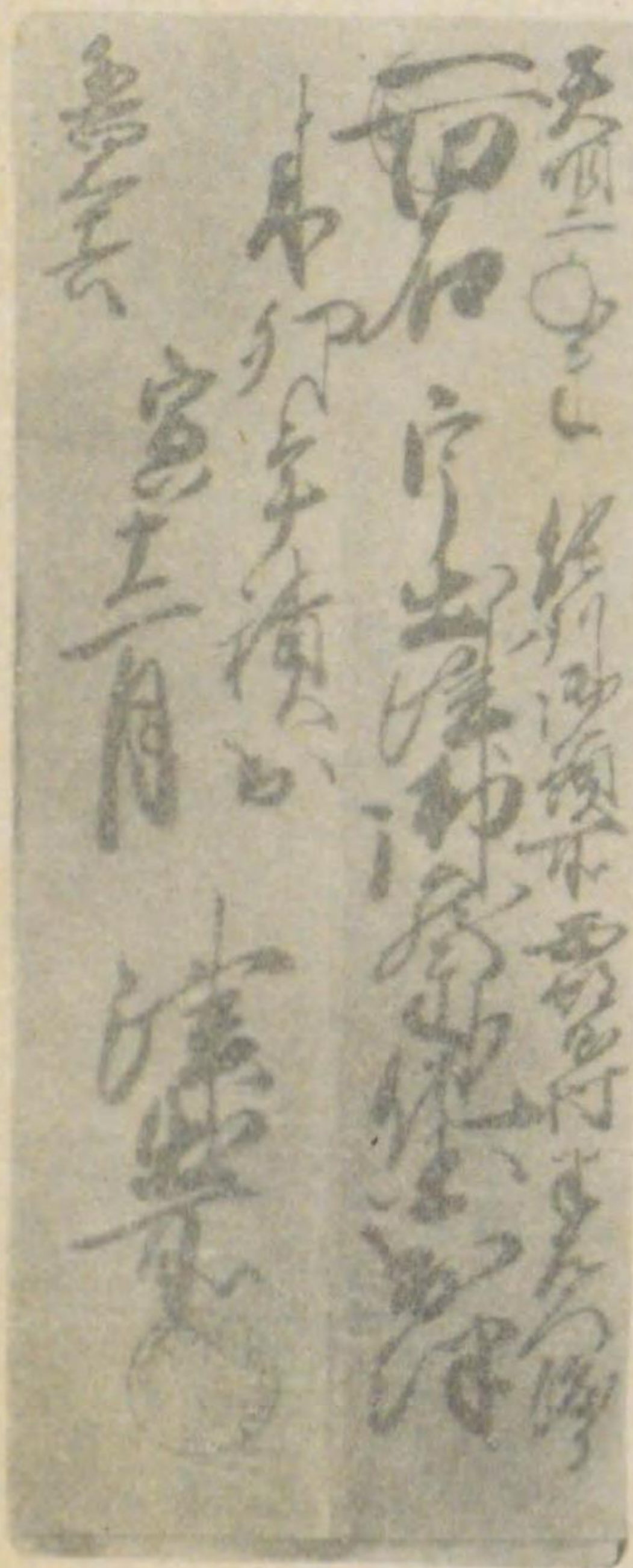
5.5-4.8寸

二三 船往來手形 (本文三三三)



8.0-4.3寸

二四 津出手形 (本文三三六)



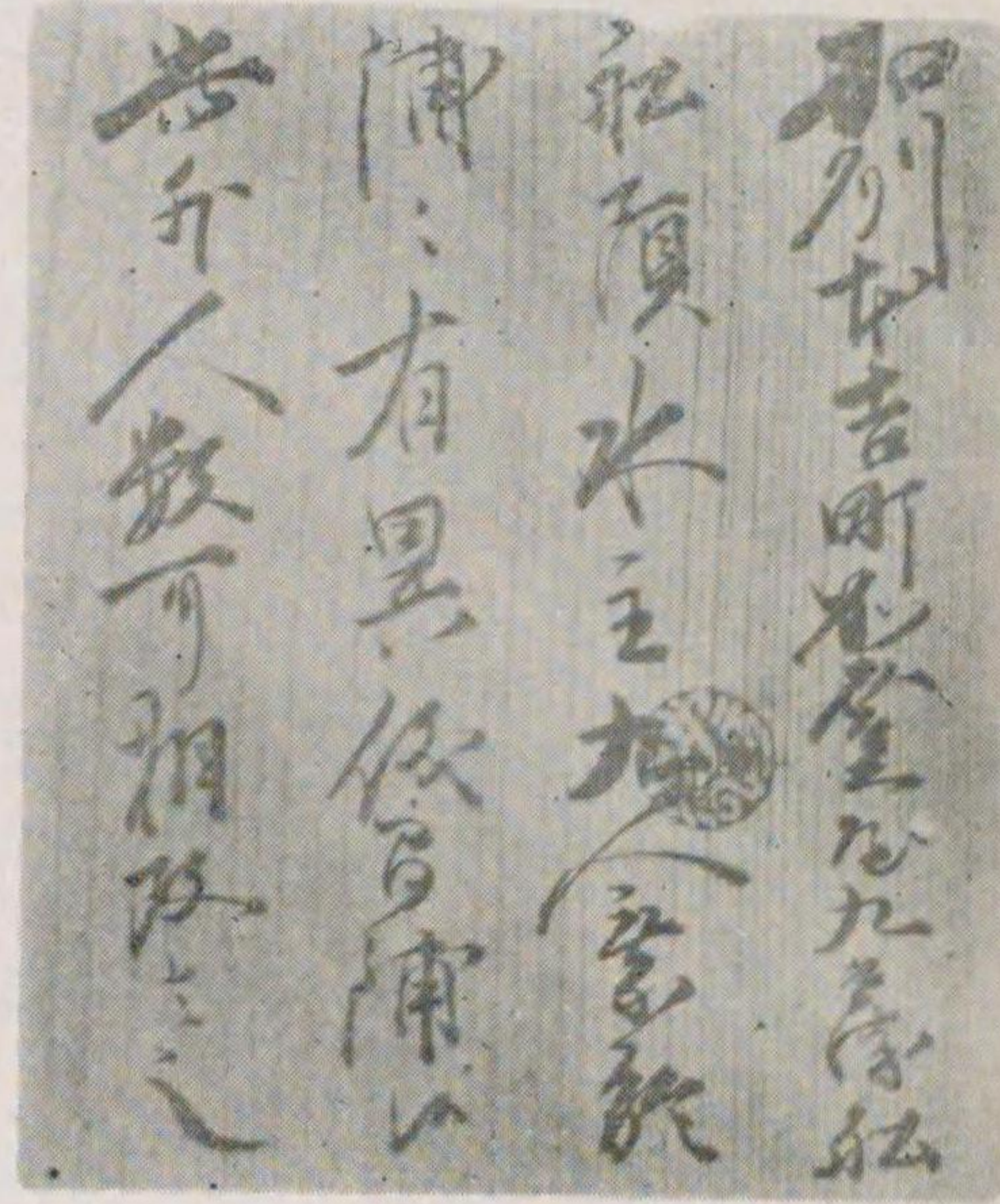
8.9-3.5寸





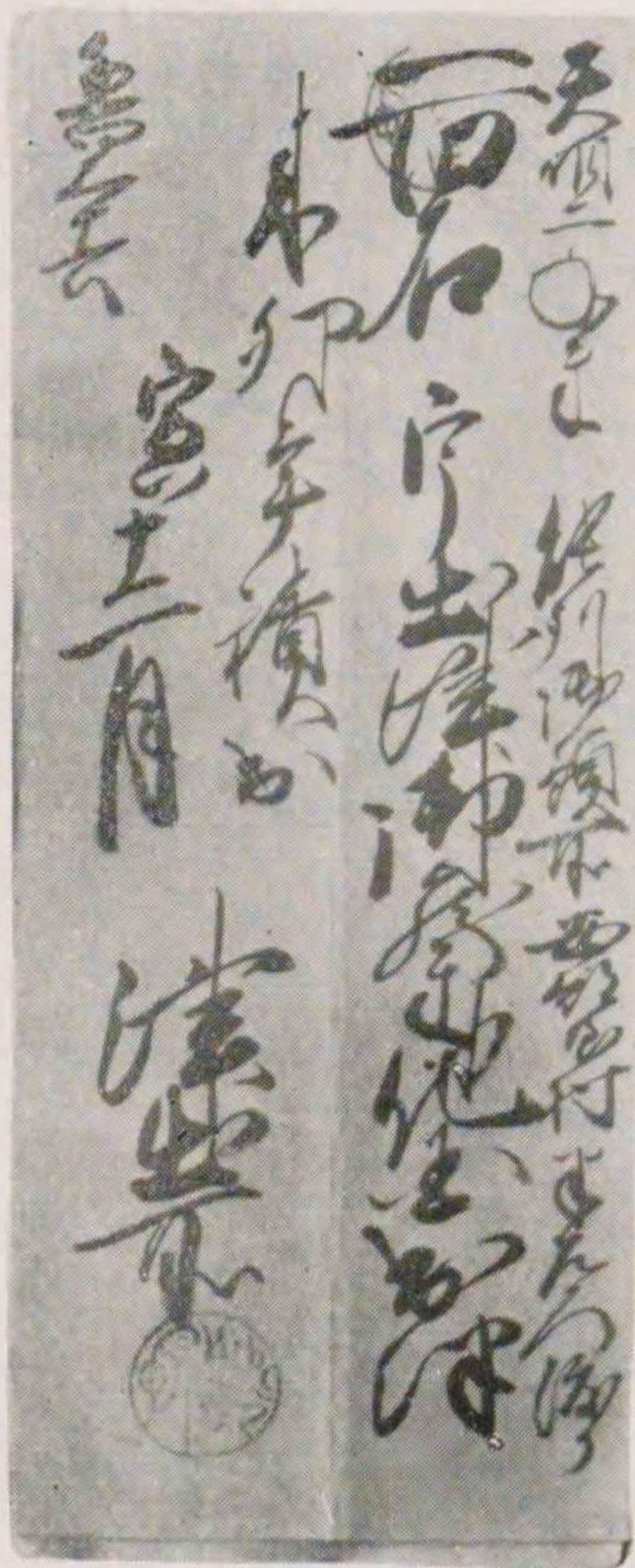
5.5-4.8寸

二三 船鑑札 (本文三三二)



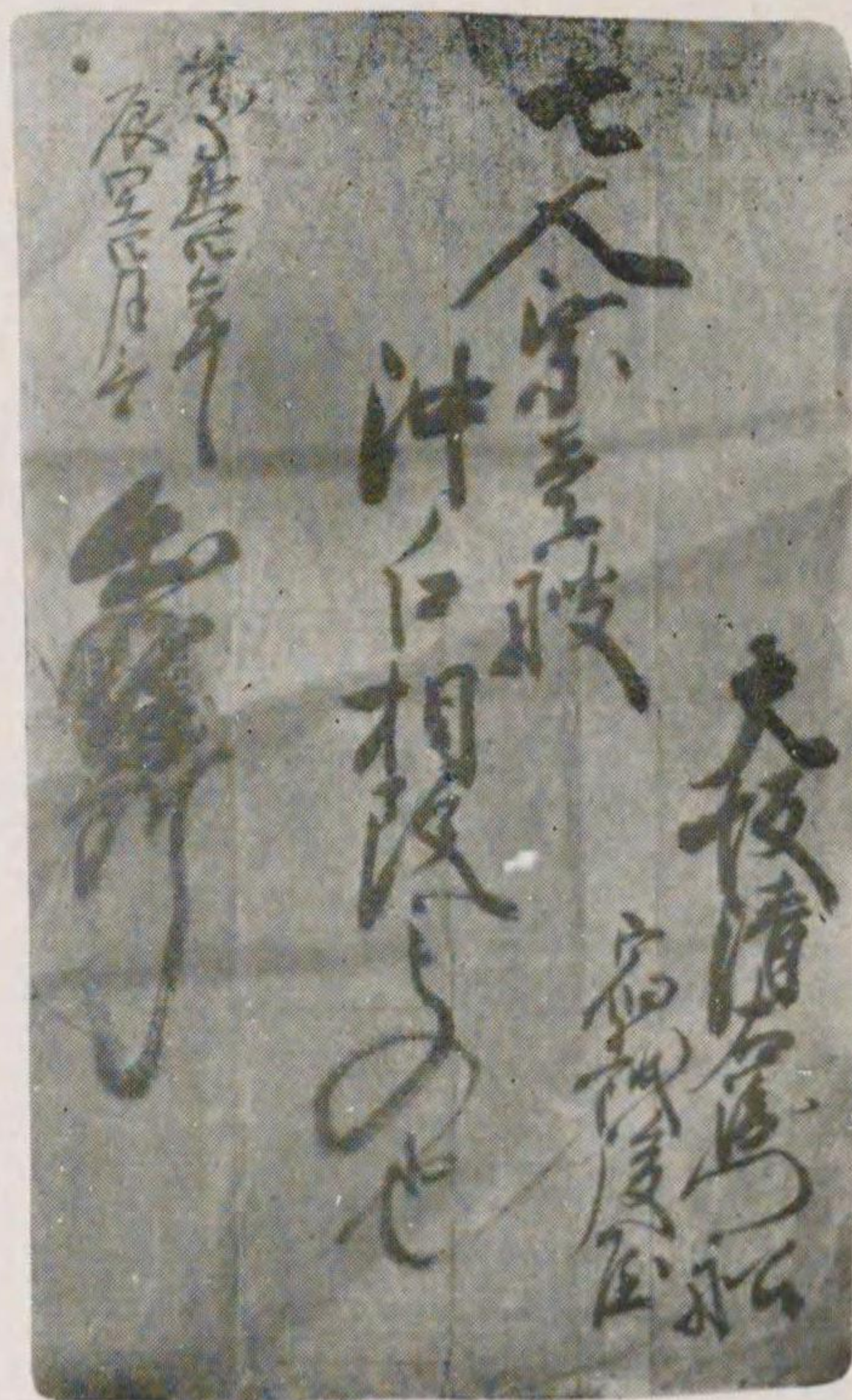
4.4-4.3寸

二一 船鑑札 (本文三三四)



3.6-3.5寸

二四 津出手形 (本文三三六)



3.0-4.8寸

二三 船往來手形 (本文三三三)



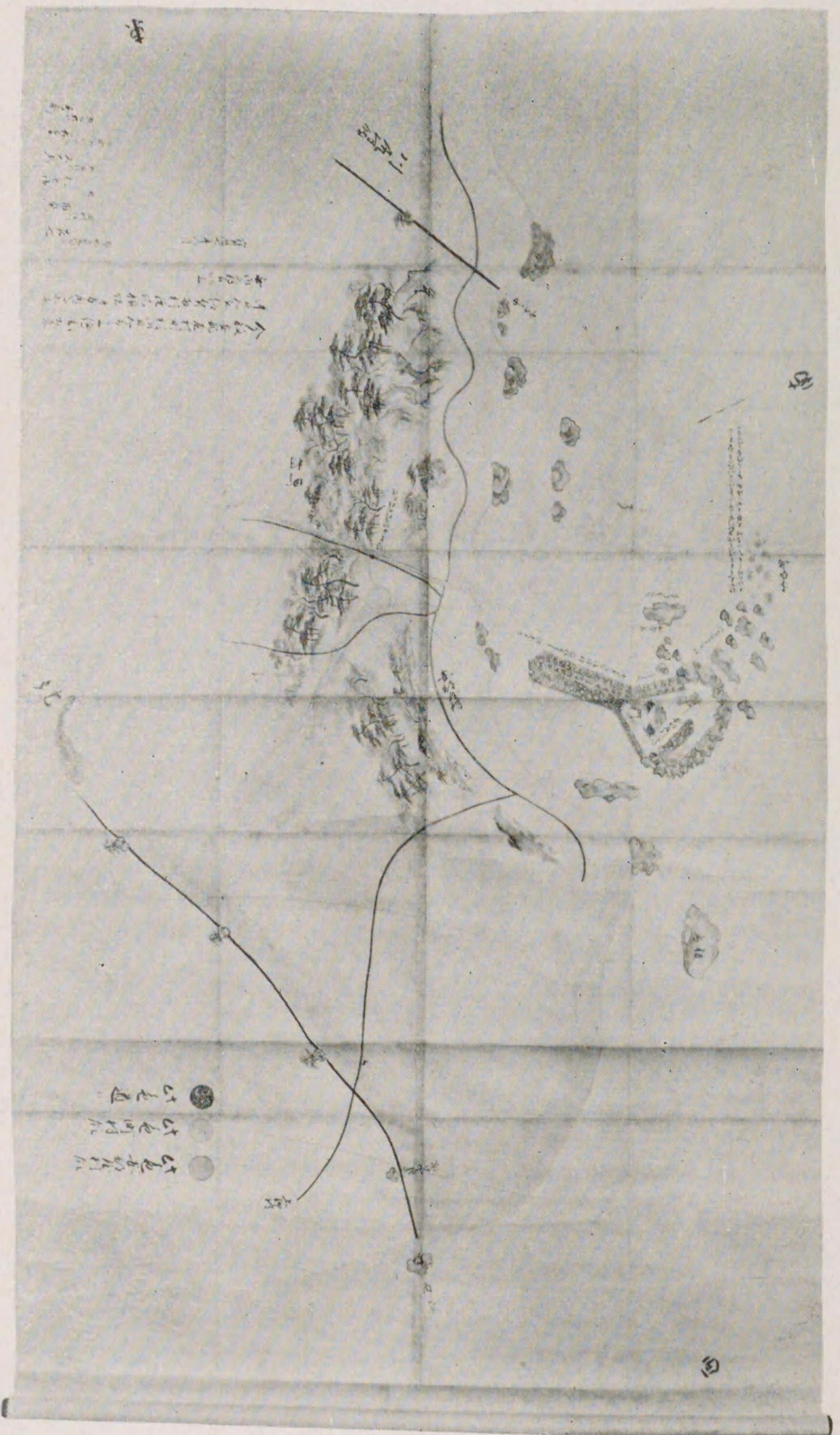


5-31R

(八一三文本)

安屋部港圖



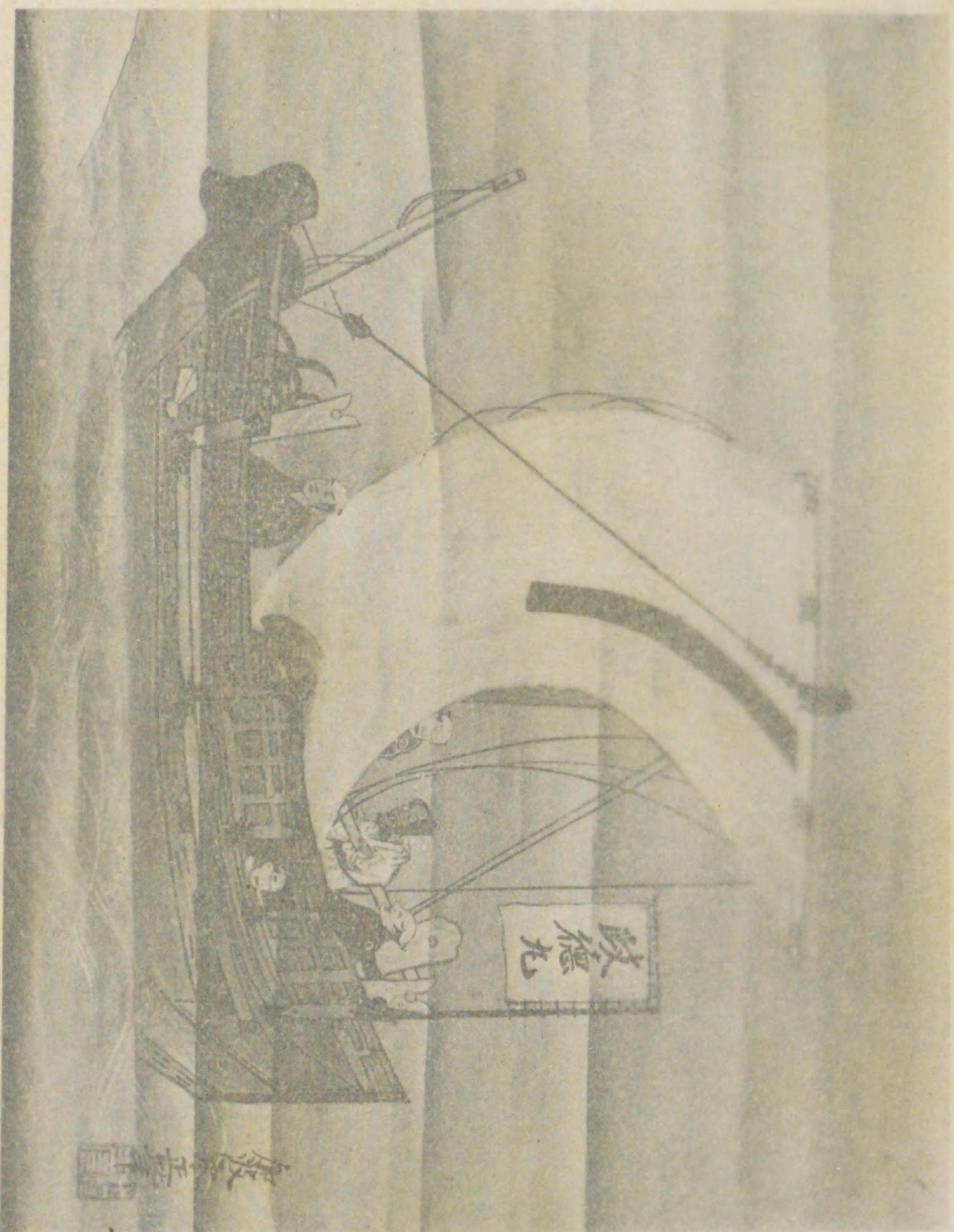


5-317

(八一三文本)

安屋部港圖 五二



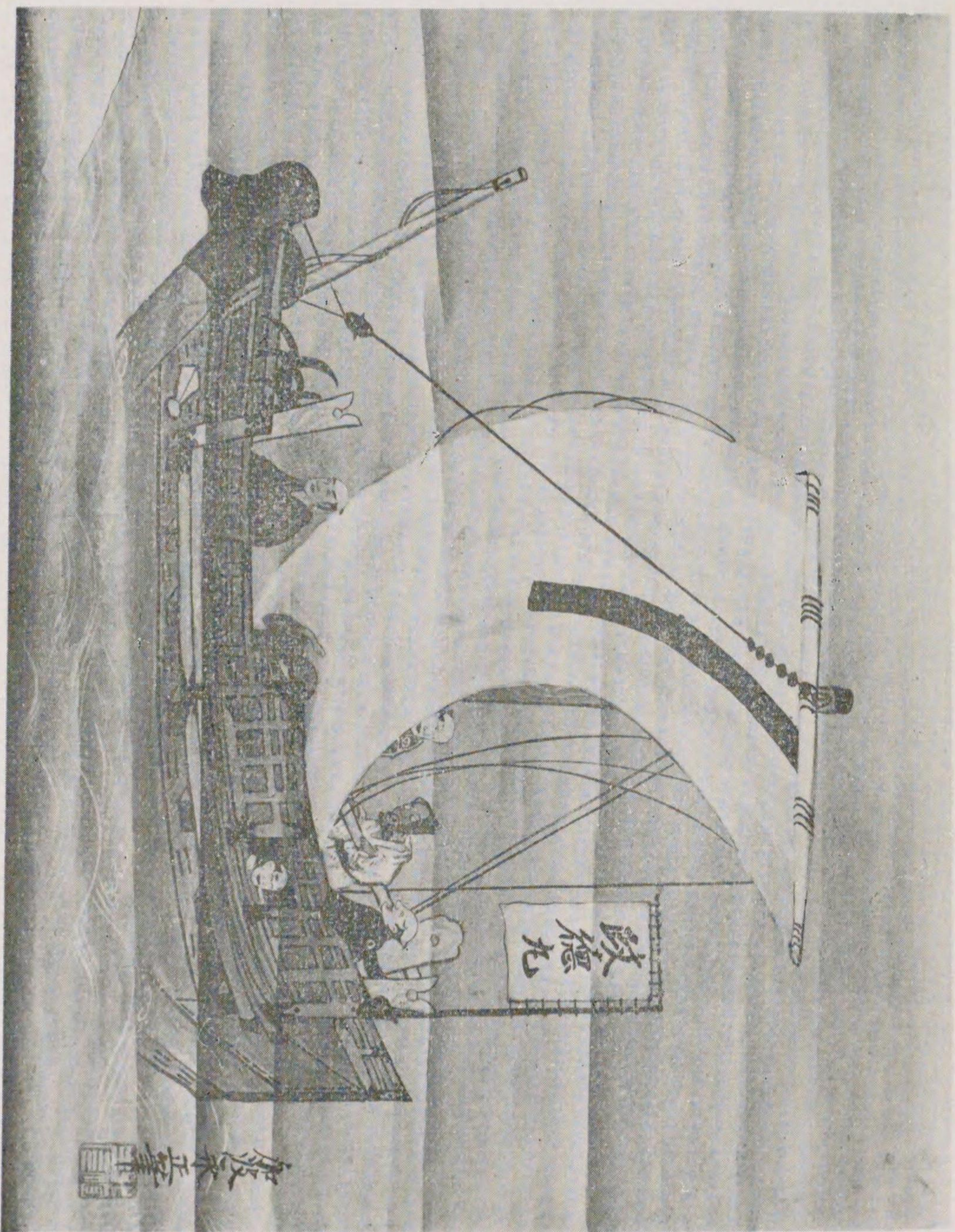


1.5-1.38尺

(三五三文本)

圖之丸德政 六二





1.75-1.98尺

(三五三文本) 圖之丸德政 六二







三十四  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

1.05-0.6尺

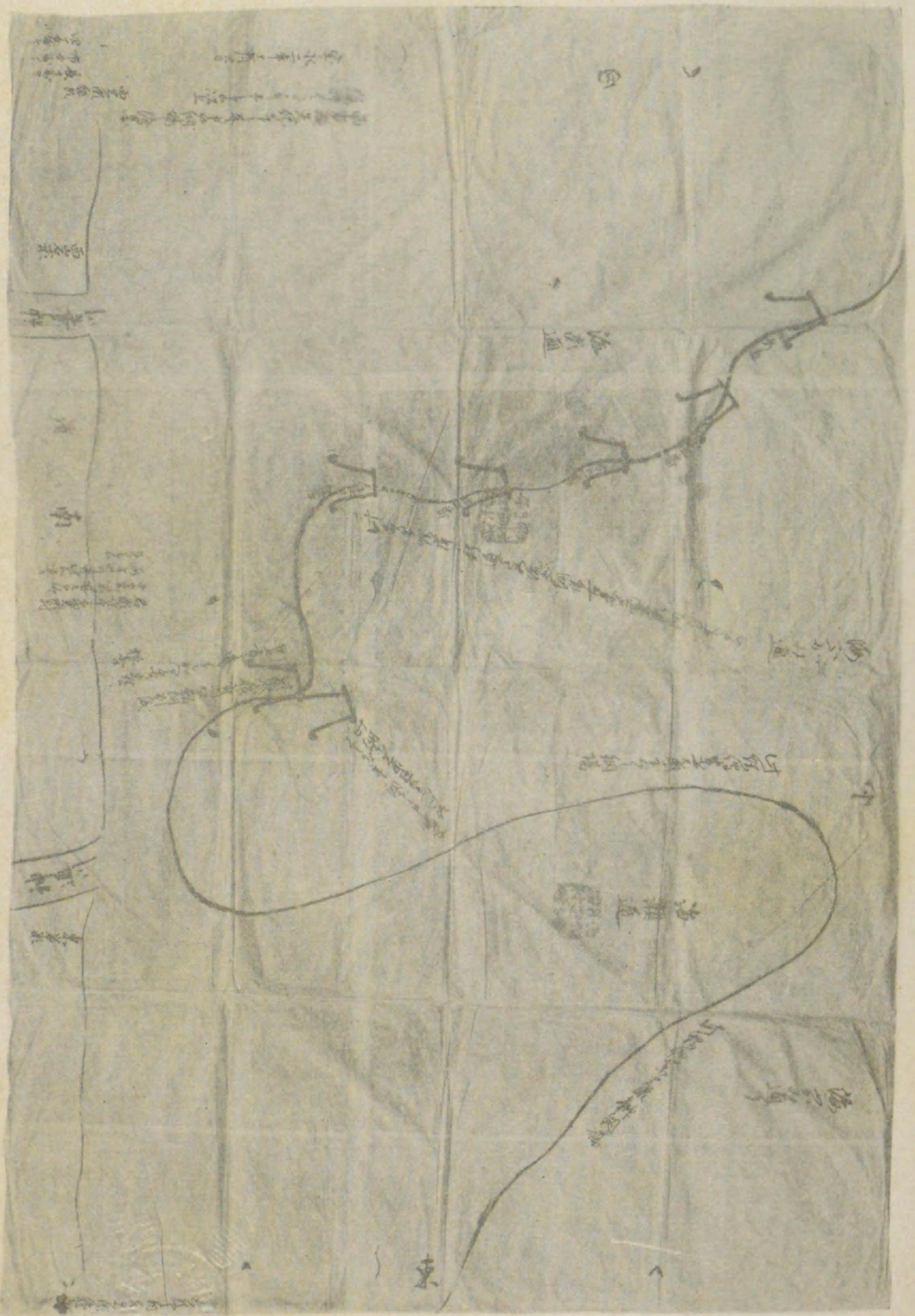
(六六三文本)

狀署連門衛左忠川石·允藏内田富

七二

三十四  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百





3.13-2.15尺

(三八三文本)

富山領西岩潮網場之圖

八二





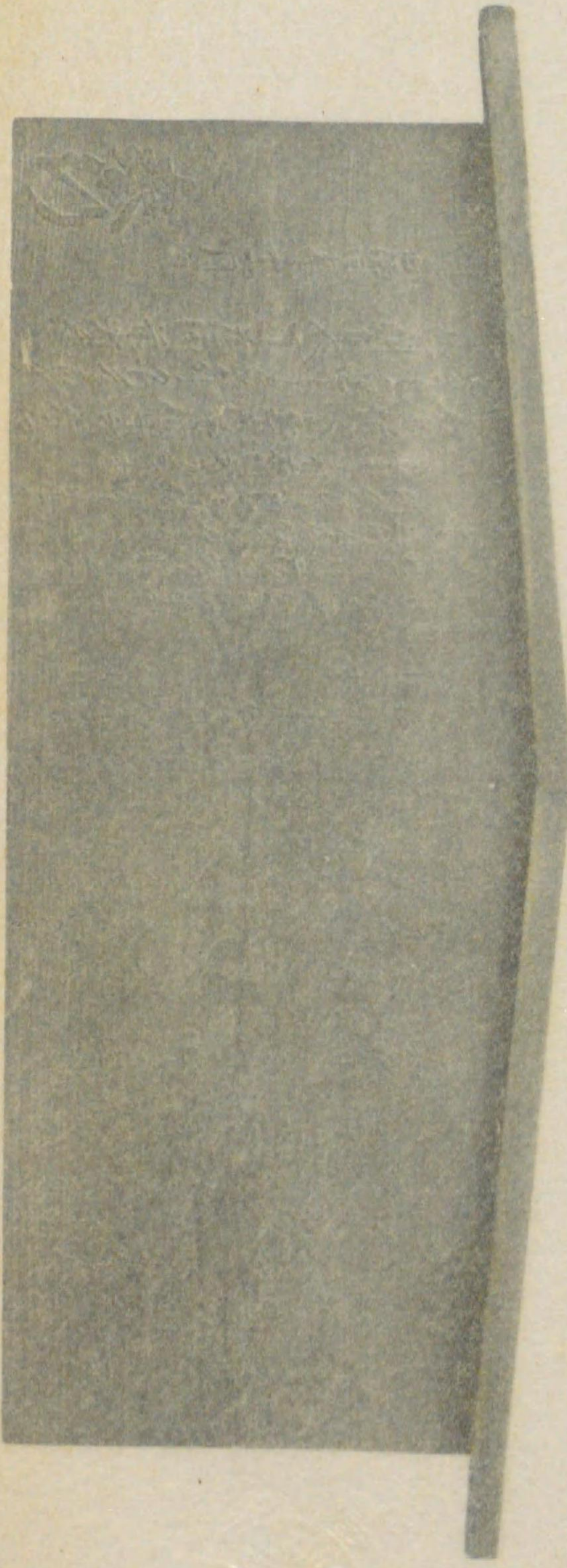






Handwritten Japanese text on a slip of paper, including the characters '或' and '渡法船九二'.

5.45-1.05R (九九三文本) 渡法船九二



4.4-1.05R (二一四文本) 札制制禁輸密 〇三

























4.4-7.06+

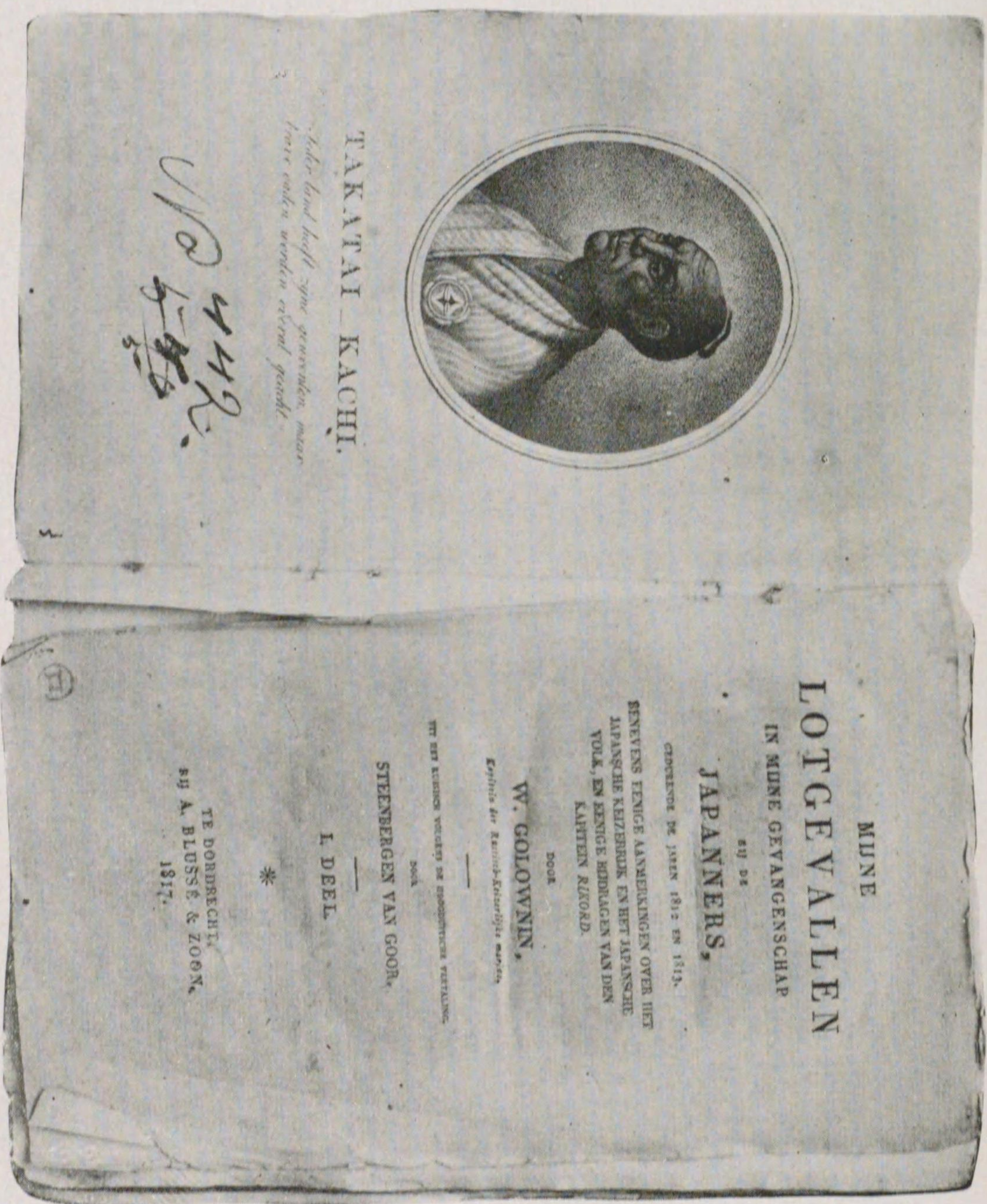
(四〇五文本)

事紀本日厄連譯蘭

三三







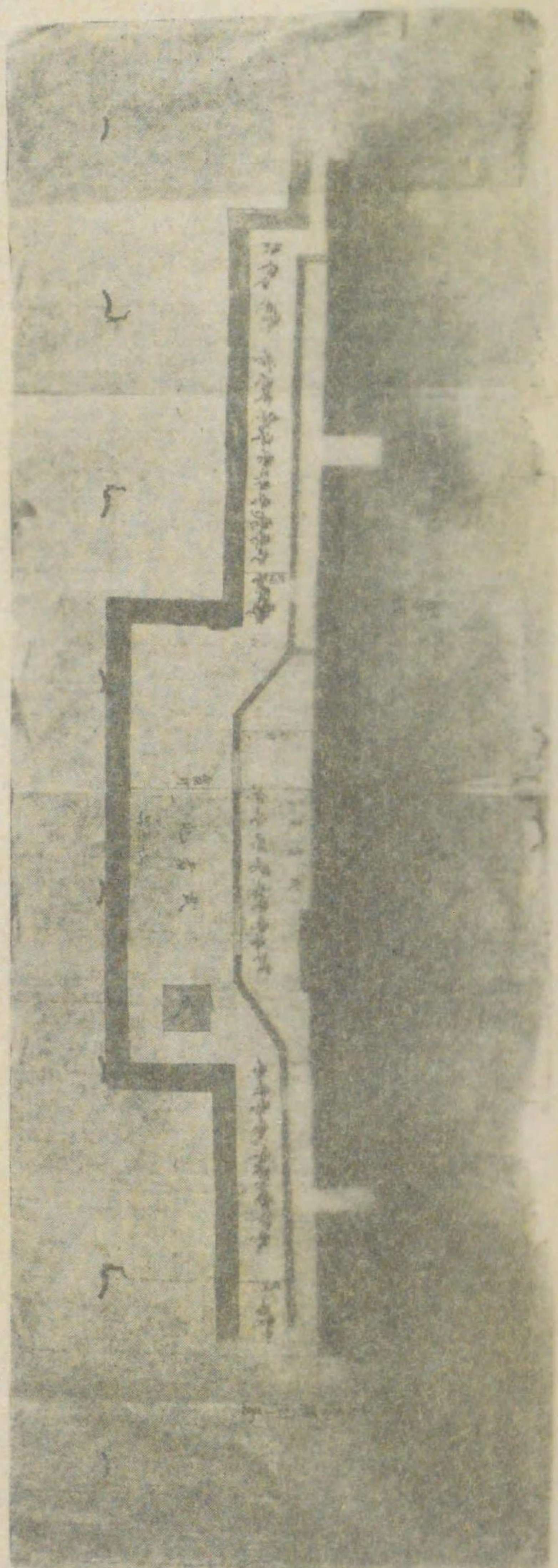
4.4-1.047

(四〇五文本)

事紀本日厄遭譯蘭

三三



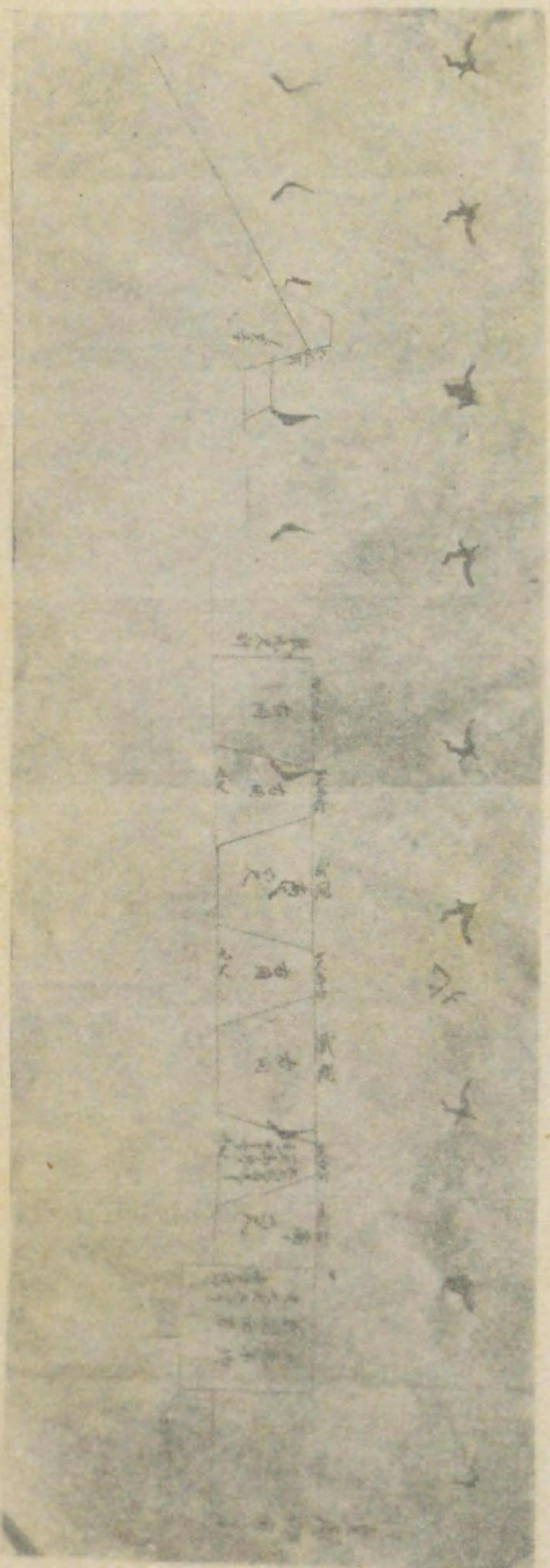


2.6-0.81r

(三四五文本)

圖之園所場台御

四三



2.88-0.81r

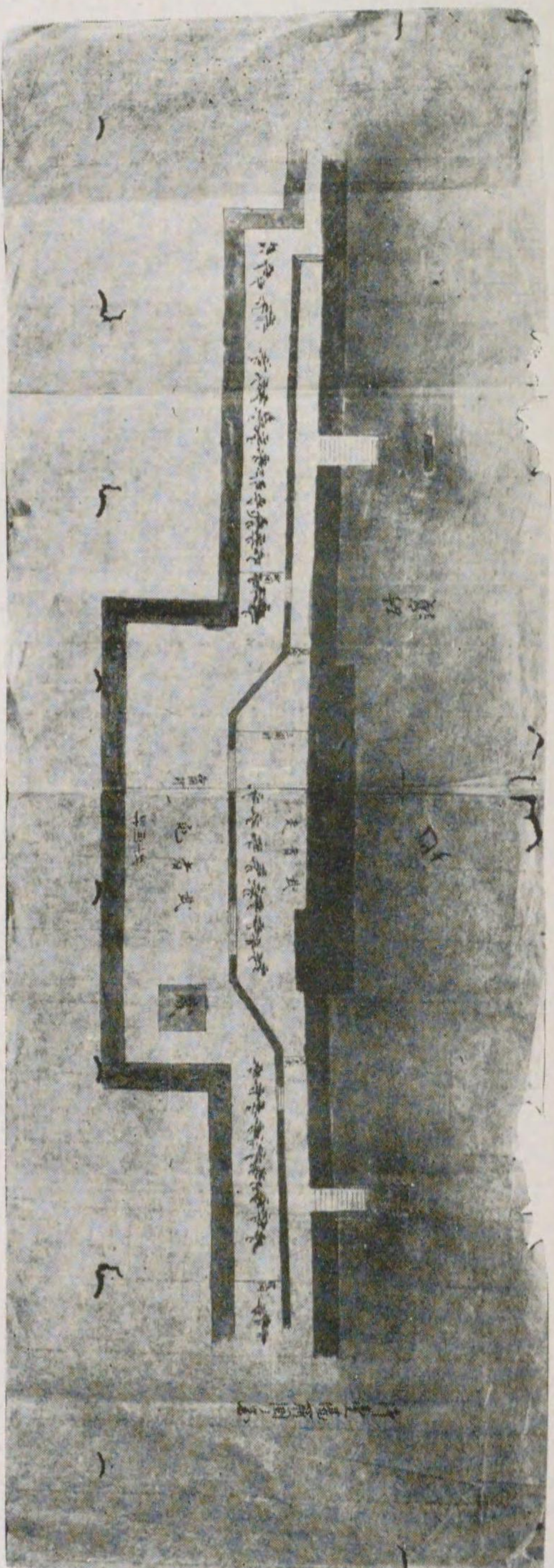
(四四五文本)

圖ノ方リ作所場台御

五三





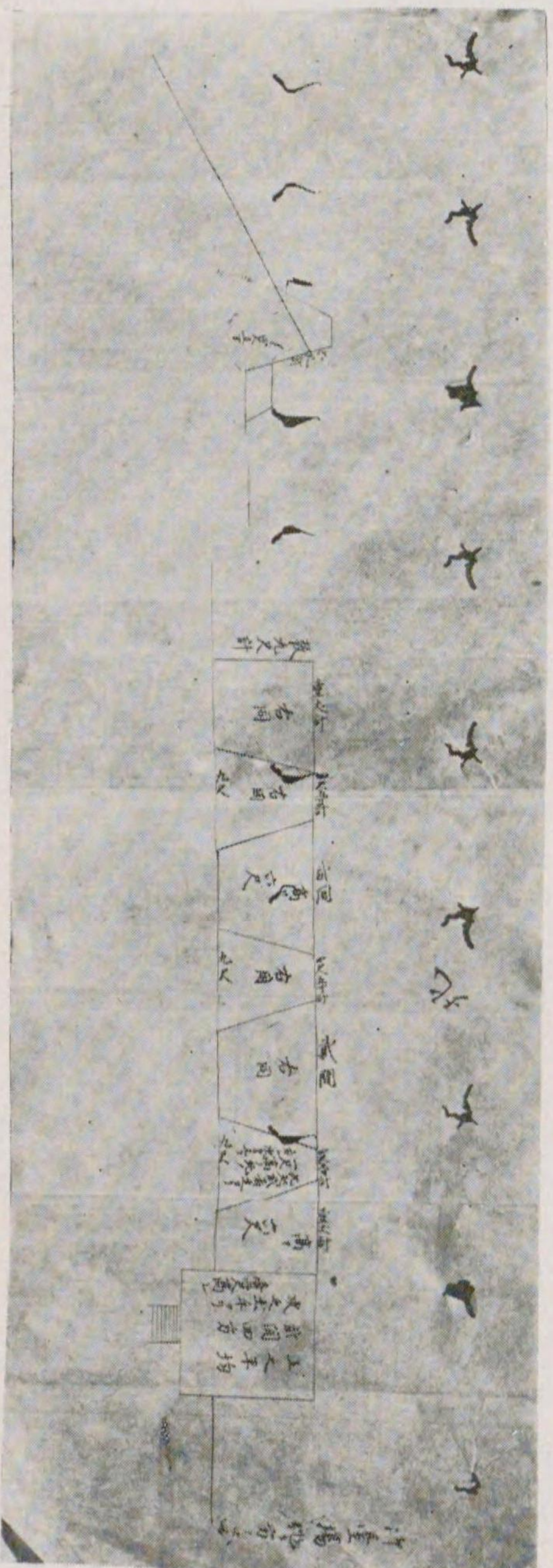


2.8-0.81尺

(三四五文本)

圖之園所場台御

四三



2.86-0.81尺

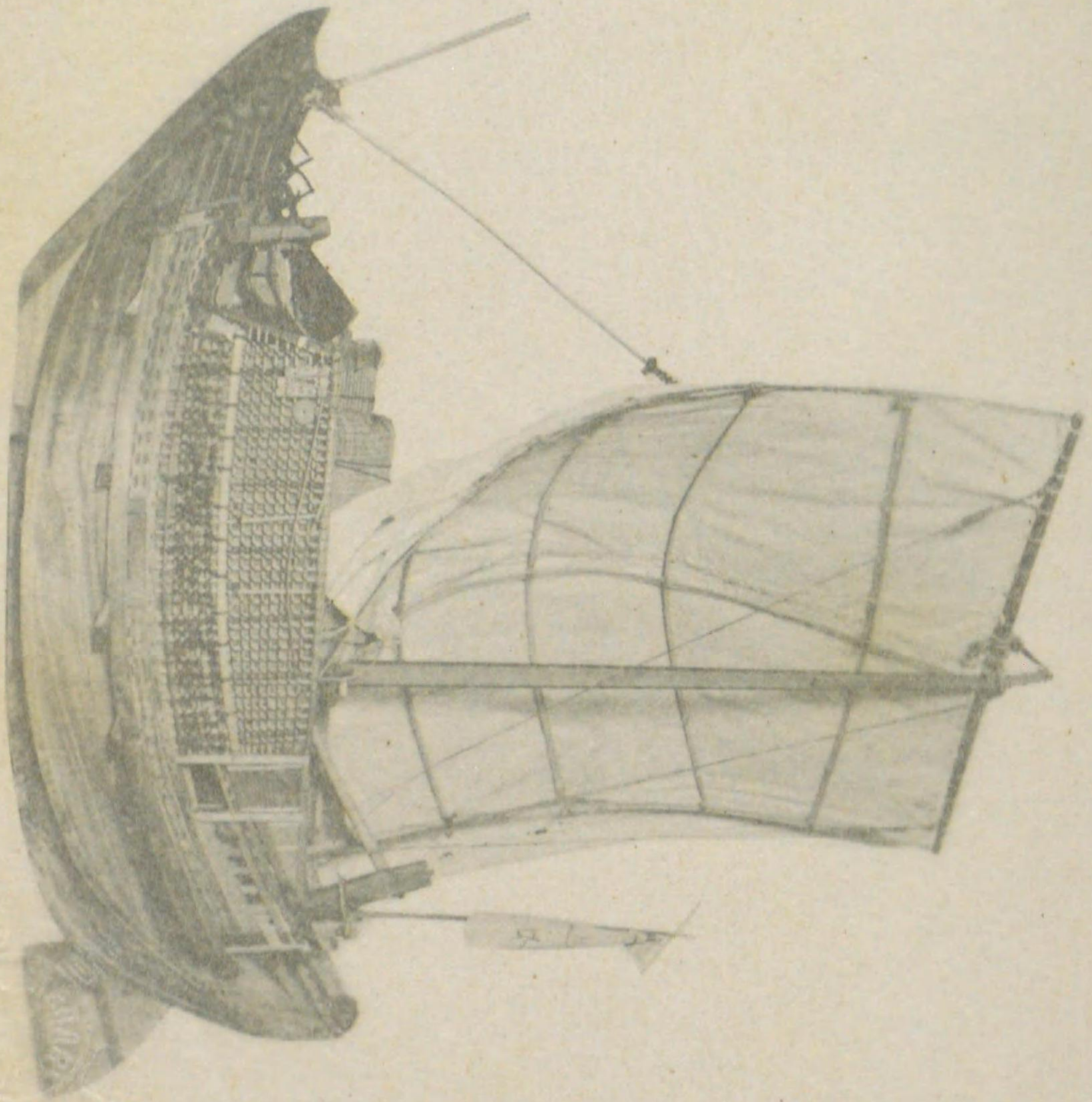
(四四五文本)

圖ノ方リ作所場台御

五三







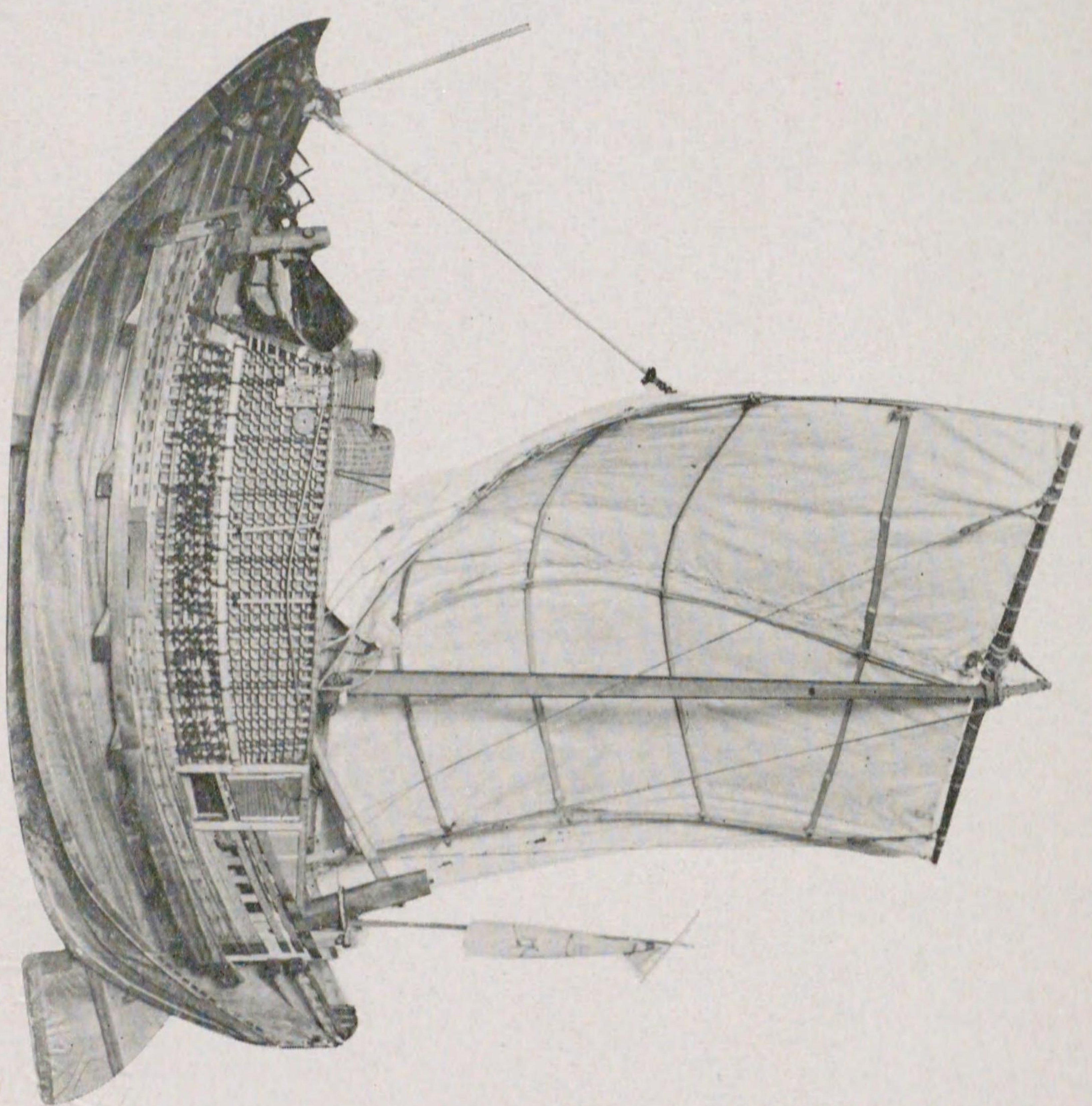
全長8尺 船身1尺 高6尺

(五六五文本)

型 摸 船 帆 六 三







全长8尺 船身尺 高5尺

(五六五文本)

型 摸 船 帆 六三

THE UNIVERSITY OF CHINA PRESS  
1934



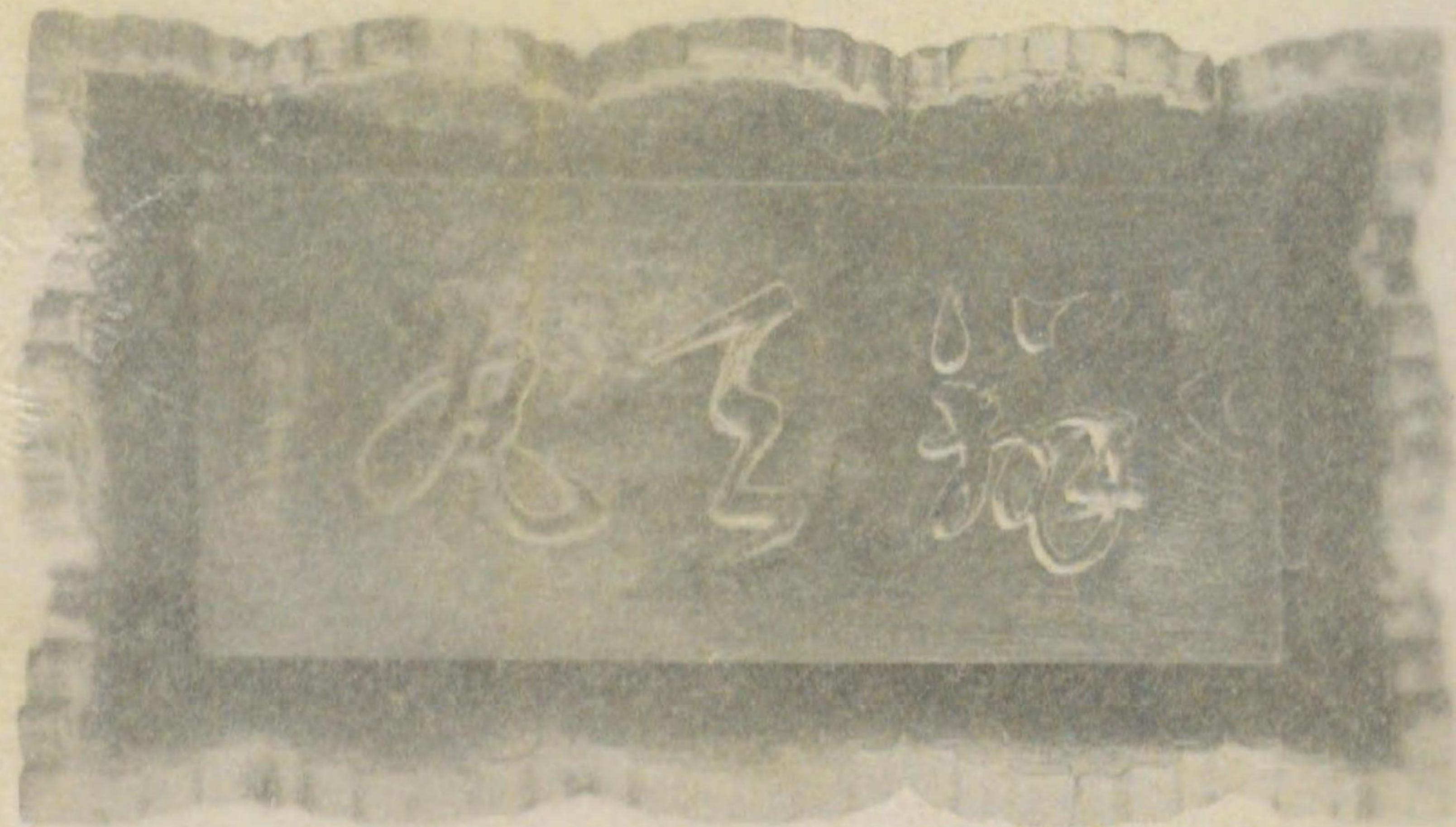


高 1.7 幅 1.0 奥行 1.34 尺

三八 船 箆 筒 (本文五八九)



三七 船 玉 筒 飾 (本文五八九)

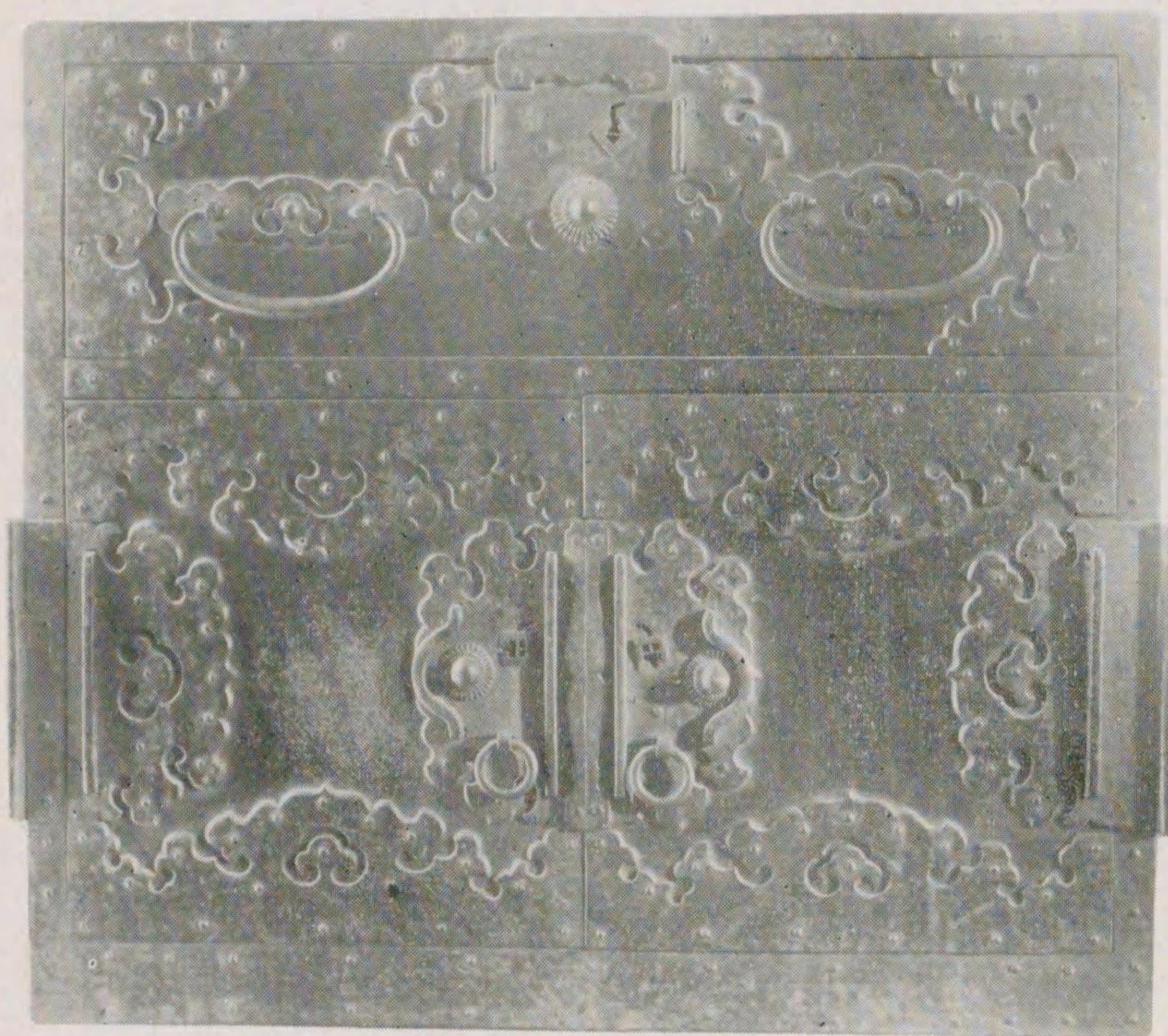


2.5-1.7

(一八五文本) 額 扁 内 船 九 三







三八 船 簞 笥  
(本文五八九)

高 1.7 幅 1.9 奥行 1.84 尺



三七 船 玉 神 鈴

(本文五七〇)

全長一、六五尺



3.5-1.7 尺

(一八五文本) 額 扁 内 船 九三





四一 船 幟

(本文六〇〇)



四〇 船 幟

(本文五九四)







四一  
船  
幟

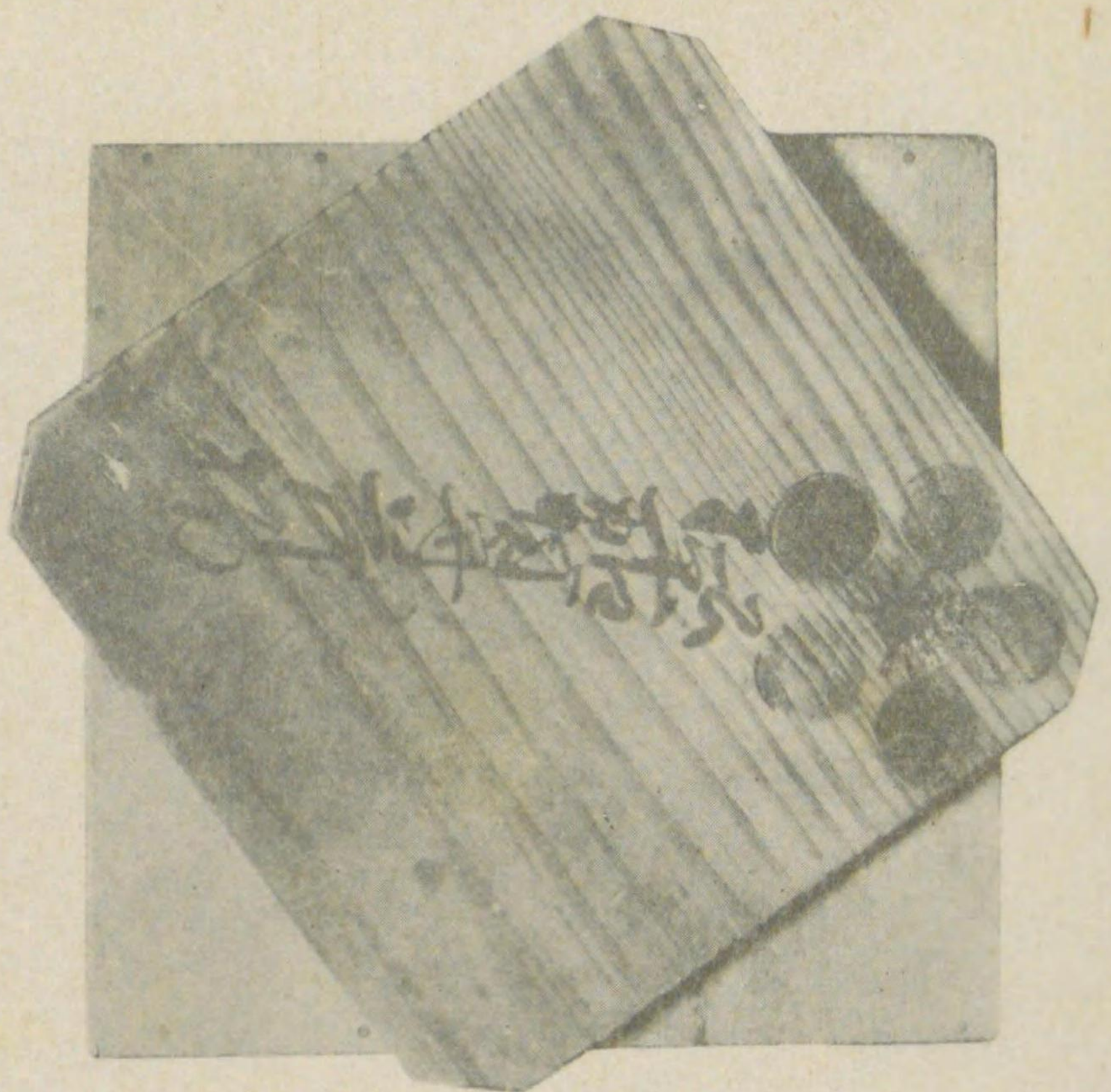
(本文六〇〇)



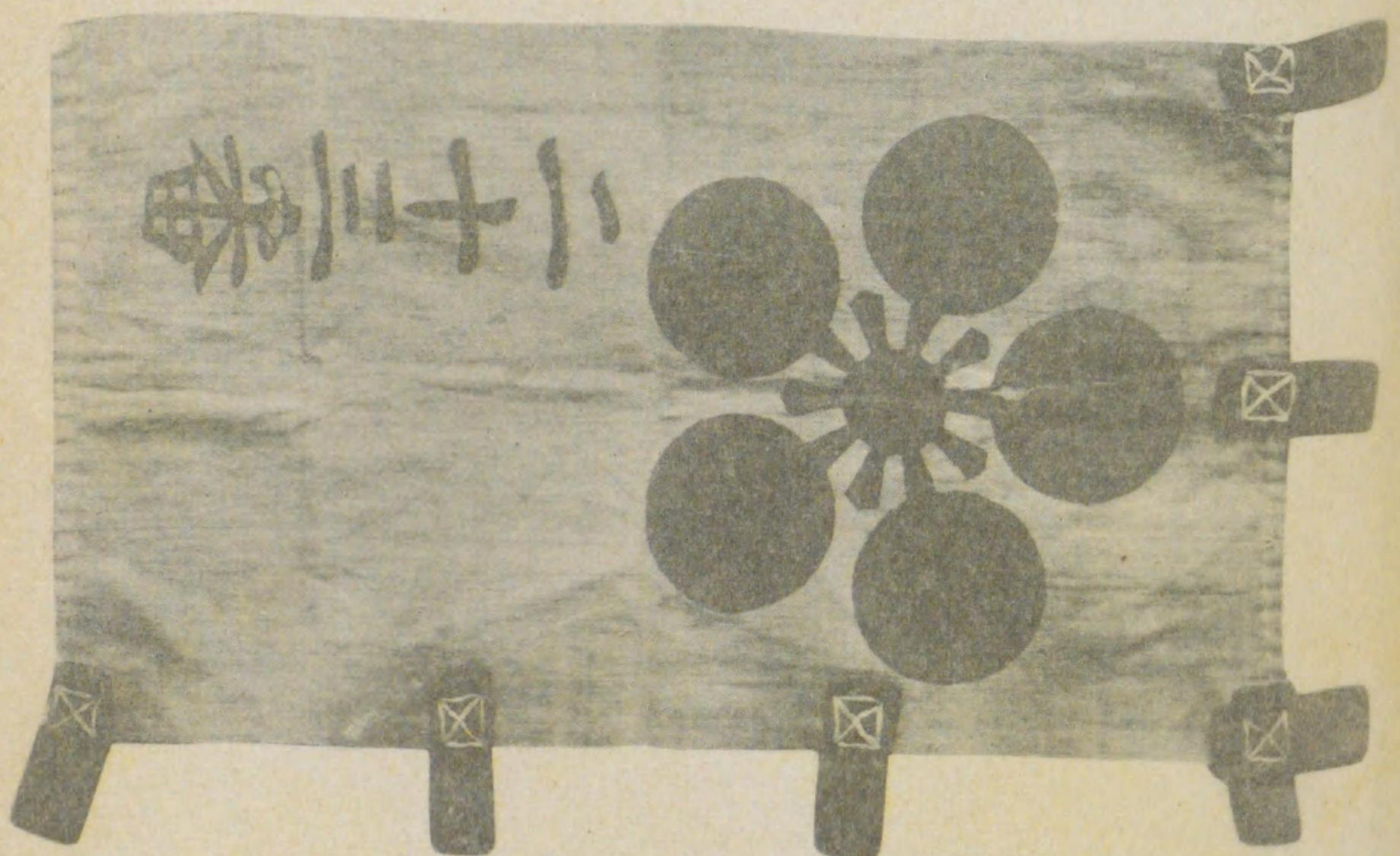
四〇  
船  
幟

(本文五九四)





四三繪符 (本文六三) 八寸四分



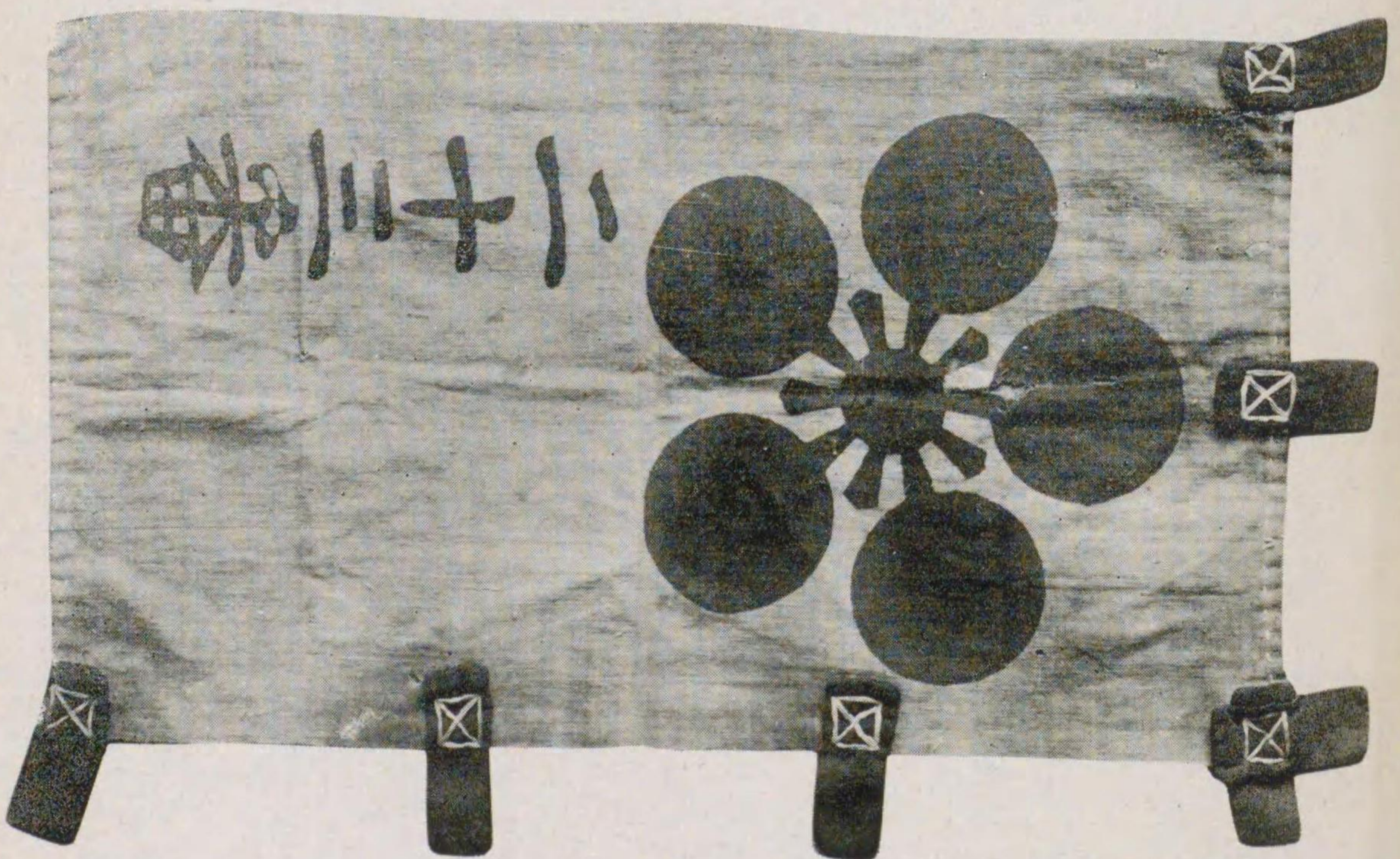
四二標識旗 (本文六〇三) 一尺二寸







四三繪 符 (本文六二三) 八十四分



四二標 識 旗 (本文六〇三) 八十二分





一 一般地誌の部

1 世界・東洋

一新世界地圖

一六九二年・パリ版 縦二尺一寸三分 横一尺七寸五分 厚五分

一冊 石川縣立圖書館藏

安永・天明の交長崎に在りて、贈りたるもの。加賀藩舊藏。

日本の研究をなしたる甲比丹アイザック・チチングより、福知山侯朽木昌綱に

二南瞻部州萬國掌菓之圖

浪華子著 寶永七年刊 縦三尺七寸五分 横四尺七寸

一軸 東京外國語學校藏

刊記「寶永歲次庚寅抄春月穀旦、大日本國京兆頭陀浪華子製圖並撰、書肆文臺軒宇平藏版」東半球の圖なり。著者は、鳳譚と稱せる僧にして、學博く、詩書に秀で、元文三年八十五歳を以て寂す。

一鋪 彦根町立圖書館藏

三萬國一覽圖

天明三年刊

一鋪 彦根町立圖書館藏

四地球萬國圖說

長久保赤水著

二枚 彦根町立圖書館藏

著者赤水は、常陸赤濱村の人にして、名を玄珠、字は子玉、通稱を源五兵衛といひ、地理學に長じ、水戸侯に召されて文公の侍讀をも勤む。地理書・地圖・詩文等の著頗る多し。享和元年八十五歳を以て歿す。

五 嗎蘭新譯地球全圖

橋本伯敏著 寛政八年刊

一軸 東京外國語學校藏



伯敏最初の出版圖にして、司馬江漢の地球圖に遅るゝこと四年、銅版を木版とせるもの、圖説を附せり。  
著者伯敏は宗吾と稱し、大槻玄澤門下の逸材にして、大阪に於ける蘭學の創始者なり。

六 地球全圖

司馬江漢著 寛政四年銅版 二枚 彦根町立圖書館藏  
我國に於ける西洋式銅版の創始者たる司馬江漢が、西洋渡來の圖によりて刊行せるもの。

七 萬國全圖

附屬書一卷 渡邊華山自筆 一軸 八田兵次郎氏藏  
加茂季鷹の息に贈りたるものにして、縦九寸、横六寸の紙二枚に直径五寸の兩半球を描き「新訂萬國全圖繪」とせり。別に添書一卷ありて、右は幕府の天文方高橋作左衛門景保が文化四年十二月臺命を蒙り調製せる世界圖を華山の畫けるよしを記し、最後に「華山翁眞跡、華石渡邊雄鑿圖」とあり。景保は、父東岡の職を繼ぎ、天文方となり、書物奉行を兼ね、翻譯に於て功績顯著なりしが、シーボルト事件に連座し、文政十二年四十六歳を以て獄死す。(圖版参照)

八 地球萬國方圖

嘉永六年刊 一鋪 彦根町立圖書館藏  
一鋪 東京外國語學校藏

九 萬國航海圖

英、庸普爾地原圖 安政五年刊 縱二尺九寸 一鋪 彦根町立圖書館藏  
駿河の武田簡吾の翻譯刊行せるもの。 横五尺二寸

同

一〇 環海志略

徐繼畬著 文久元年刊 一〇册 石川縣立圖書館藏

一一 地球說略

米、禮理哲著 箕作阮甫訓點 萬延元年刊 三册 酒井達郎氏藏

一二 華夷通商考

西川求林齋編 寶永五年刊 五册 住田正一氏藏  
海外の地理風俗等を記述紹介したる日本最初の地理書。

一三 三國通覽圖說

林子平著 寫 一册 宮城縣立圖書館藏  
天明六年刊行本の影寫にして、朝鮮・琉球・蝦夷等につき圖説す。附屬圖に、三國通覽輿地程全圖・蝦夷國全圖・琉球國全圖・朝鮮國全圖・無人島全圖あり。「甘柿舎圖書信」の印記あり。著者は江戸の人、友直と言ひ、六無齋主人と號す。幼より書史を好み、又地誌を暗記し、常に四方を遊歴して天下の士氣を鼓舞し、海國の防備策を説けり。海國兵談及び本書を著はして朝鮮・琉球・蝦夷等の地誌を明にし他日の變に應ぜしめんとせるに、幕府之を妄説となし、仙臺に禁錮す。寛政五年六十二歳を以て獄死せり。

一四 三國通覽圖說附圖

林子平著 天明五年刊 一枚 禰氏祐祥氏藏  
三國通覽輿地程全圖・朝鮮國全圖・琉球國全圖・蝦夷國全圖・無人島全圖 五枚ノ内

同

同

一五 東洋航海圖

古寫 二鋪 静岡縣立葵文庫藏  
寛永鎖國以前の航海圖にして、「盧高朗」の三字を墨記す。(圖版参照) 一枚 長崎縣立圖書館藏



2 日本

一六 海陸地古寫

笠原定頼の筆にして、極彩色、南を上部として描けり。(圖版参照)

一枚 淺田榮吉氏藏

一七 日本圖鑑綱目

一鋪 杉浦丘園氏藏

一八 日本地地圖

一鋪 杉浦丘園氏藏

京都市北野神社所藏にかゝる、大鏡背面の拓本。慶長頃の鑄造にして加藤清正の奉納せるものといふ。

一九 日本島圖

一枚 帝室博物館藏

元祿三年佛國版か。明治三十二年ドイツ、ミュンヘン府ルドウイヒ・ロセンシャルより購入したるもの。

(圖版参照)

二〇 日本國古圖

一枚 帝室博物館藏

明治三十二年ドイツ、ミュンヘン府ルドウイヒ・ロセンシャルより購入したるもの。(圖版参照)

二一 日本地圖寫

三鋪 住田正一氏藏

極彩色。航路を示し、且各地の城廓を描出せり。

二二 日本全圖

一鋪 南榮藏氏藏

二三 日本國大繪圖

一鋪 杉浦丘園氏藏

(圖版参照)

二四 日本全圖刊

一鋪 禿氏祐祥氏藏

二五 扶桑國都水陸圖

一軸 太田敬太郎氏藏

有澤武貞は、加賀藩の兵學家永貞の長子にして、字は伯赴、桃水軒と號し、通稱を森右衛門といふ。

二六 大日本航海繪圖寫

四四枚 住田正一氏藏

二七 北程七ヶ國獨案内圖繪刊

一枚 杉浦丘園氏藏

二八 日本海路一覽

一鋪 住田正一氏藏

内題「大日本海上大繪圖並湊附道法針當之大圖」

同

一鋪 東京帝國大學史料編纂所藏

二九 大日本海陸道中圖繪

一折 桂井健之助氏藏

三〇 日本輿地路程全圖

一鋪 禿氏祐祥氏藏

安永八年の初版に、改正増補したるもの。

三一 改正日本輿地路程全圖

一鋪 石川縣立圖書館藏

三二 大日本細見指掌全圖

一鋪 石川縣立圖書館藏

三三 大日本接壤三國之全圖

一鋪 石川縣立圖書館藏



三四 大日本輿地全國 逸見豊次郎著 嘉永二年刊 一冊 梅本 彰平氏藏

三五 大日本國郡輿地全圖 高柴英三雄製 嘉永二年刊 一冊 石川縣立圖書館藏

三六 北海船路圖 從下關至松前 鳥瞰圖 彩色寫 一帖 函館市立圖書館藏

三七 沿海地圖 伊能忠敬著 三幅 宮城縣立圖書館藏

四國・青森・蝦夷の三軸にして、圖中高橋景保及び吉田秀賢文化元年の跋あり。

伊能忠敬寛政十二年蝦夷地に渡り、海邊を基點として三角測量をなし、文化元年之が製圖を完了せり。仙臺藩儒官小野寺鳳谷此原圖により、宮城郡寒風澤造船廠にて寫せるもの。

三八 皇國總海岸圖 酒井喜淵編 寫 一帖 函館市立圖書館藏

内閣文庫藏原本により編成せられたるもの。安政二年卯二月の序あり。(圖版参照)

三九 大日本海路圖 鳥瞰圖 天保十三年刊 一帖 住田正一氏藏

四〇 大日本海岸全圖 長久保赤水著 嘉永六年刊 一冊 石川縣立圖書館藏

海岸船路の方位を極め、里數を記入し、海上の助となせるもの。

四一 大日本海陸全圖 整軒立魚著 文久四年刊 一冊 石川縣立圖書館藏

四二 大日本沿海略圖 勝海舟著 慶應三年刊 一冊 禿氏祐祥氏藏

四三 大日本沿海全圖 鳥瞰圖 明治元年銅版 五冊 石川縣立圖書館藏

「籌海全圖者、蓋徳川氏秘府中之物、而人或竊寫、以傳者也、或曰、水戸烈公之撰、烈公於此圖、討究二十年而成焉、其爲圖也云々」と、藤淵臣の序あり。折本にして、山本伊三郎銅鑄。

四四 日本本地圖 一冊 工樂長三郎氏藏

蝦夷地開拓渡航用の地圖なり。寛永二年二月幕府は播州高砂町の一世工樂松右衛門に命じ、蝦夷地に埠頭を築造せしむ、即ち吏二十名と共に八幡丸に乘じ、築港要具を載せ、五月蝦夷に出航し、拮据經營千難萬苦を排して之を竣成せり。

四五 日本船路細見記 嘉永四年刊 一冊 秋山平次氏藏

四六 大日本諸國細見繪圖 刊 一冊 秋山平次氏藏

四七 北海湊方角之圖 明和四年刊 一帖 栗田元次氏藏



## 二 日本海沿岸各地方資料の部

### 1 本州西南部

- 四八 自長州赤間關至能州鹽津崎海岸圖 鳥瞰圖 寫  
海陸の里程を記入す。 一帖 京都帝國大學地理學教室藏
- 四九 長門國周防國海岸繪圖 寫「坂田文庫」印あり。  
一鋪 東京帝國大學圖書館藏
- 五〇 伯耆因幡國海岸繪圖 附屬書類一冊 鳥瞰圖  
二枚 鳥取縣立圖書館藏  
海岸の深淺を記入し、陸路をも示す。嘉永二・三年幕令により製せるもの。「増田作右衛門殿御代官所」の附紙あり。
- 五一 越前國敦賀海陸圖 鳥瞰圖 明治十四年刊  
一鋪 住田正一氏藏  
敦賀港は小濱港と相並び、北海の主要なる貿易港として繁榮を極めたり。即ち松前・出羽・越後・越中・能登・加賀等の大坂登米が多くこゝに入津せる爲にして、各藩は此地に藏宿を依託して之が取扱をなさしめたり。加賀藩に於ては、寛永十七年十一月高島屋に依託す。
- 五二 御藏米領收證  
請取申富山御藏米まよい米之事  
一通 山本元氏藏

一拾石七斗五升九合 先達テ請取  
一參拾壹石貳斗七合 唯今請取  
二口ノ 四拾壹石九斗六升六合  
右者、越中富山松平大藏様御藏米積上り、壹俵に貳百目宛免し目引、外ニまよい米右之通慥ニ請取申所實正也、爲後日之請取如件。

元祿七年六月卅日

黒川三郎衛門

敦賀川船惣衆中

### 五三 舟切手添證

一通 山本元氏藏  
切手ニ、船頭水主共に六人乗と在之候得共、三月より七月迄右五ヶ月は、兼而相極之通五人宛爲乗申候間、無相違御通可被下候、仍而如件。

元祿十一年寅二月

敦賀船道 ○(黒印)

加能州 越能州 浦々御役所衆中

### 五四 舟持中口上書

乍恐口上書ヲ以申上候  
一通 山本元氏藏  
一御當地之舟与申ハ先規々往來之御切手毎年正月廿日頃々二月中旬迄ニ申請、勝手次第出船仕候、即右之御切手ヲ以、加賀・能登・越中三ヶ國御間役御赦免被爲成被下候御事。



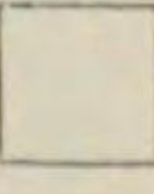
一 當正月中旬の毎年之通、船道頭兩人方迄、御切手度々願申候所ニ、于今御出不被下惣舟持中迷惑至極ニ奉存候御事。

一 舟々ニ越前・加賀・能登・越中・越後・佐州・出羽・酒田・秋田・津輕江參候下り荷物積請居申所ニ、右御切手不被下候故出船不罷成、急キ荷物留リ諸商人舟持共難儀千萬ニ奉存候御事。

右之趣被爲 聞召分御慈悲ヲ以、古法之通 御切手早速御出シ被下候者、難有恭可奉存候、以上。

元祿十六癸未年三月二日

御奉行所様

舟持中  (黒印)

(圖版参照)

五五 舟持中證文

定書之覺

一通 山本 元氏藏


一 越前・加賀・能登・越中四ヶ國へ之荷物積下り申候、隨分川湊念ヲ入出入可仕候、其上中間舟參候者、何國ニ而も有合申舟々罷出手傳可仕候事。

一 荷物積申節問屋中致吟味請取積可申候、然者舟頭・水主共ニ荷物ニ付少ニ而も不調法成儀仕候者、其舟之沖舟頭・水主共ニ取上ヶ當地之舟中へハ乗セ申間敷候、尤自分之舟頭之儀ハ、舟ヲ取上ヶ遣シ申間敷候事。


一 舟并舟道具念ヲ入、不足無之様ニ可仕候事。


右之趣當地舟持中寄合相談之上相極申候、少ニ而茂相背申儀協方聞へ候者、此定之通急度可申付候、其時一言之子細申間敷候、爲後日之證文如件。

元祿十七甲申年正月十七日

茶屋九兵衛  (黒印(以下同ジ))

舟中間中

立石屋彌兵衛 

壺屋甚右衛衛門  (外廿九名連署)

(圖版参照)

五六 大野丸之圖

安政四年内山隆佐筆

一軸 岡不崩氏藏

大野丸は、越前大野藩新造の二桅洋形船なり。内山隆佐専らその工を主理し、安政五年六月竣工したるものにして、約五百屯積なり。

五七 御用船大野丸糶瀉記

寫 附圖十六枚 安政四年 木村屋治三郎製圖

一冊 土井利章氏藏

五八 大野丸米船救助之圖

絹布

一面 土井利章氏藏

安政六年八月、北海道函館近海奥尻島附近にて、米國船の難破せるを、大野丸命を受けて救助せり。本圖は平泉養徳の畫けるもの。鈴木準次その概略を記す。(圖版参照)

五九 大野丸米船救助之記

安政六年米船救助一件を記せるもの。

一帖 土井利章氏藏

2 本州東北部

六〇 東北十二ヶ國海邊之繪圖

鳥瞰圖 寫

一帖 京都帝國大學地理教室藏

六一 東北六ヶ國海濱之繪圖

鳥瞰圖 寫

一帖 京都帝國大學地理教室藏



六二 東北海舟行圖

鳥瞰圖 寛文七年影寫

一卷 東北帝國大學藏

青森縣廳の所藏に係る津輕藩舊藏本の摸寫にして、寛文七年幕府が浦々巡見使を派遣せし時の作製なり。

六三 風土記

北陸道外四道 慶安四年刊 「林崎文庫」印あり

一冊 神宮文庫藏

六四 越後全圖

鳥瞰圖 文化十四年

一冊 栗田元次氏藏

六五 越後一圓誌

鳥瞰圖 刊

一冊 國本彌作氏藏

六六 越後海岸繪圖

鳥瞰圖 文化元年頃刊

一冊 栗田元次氏藏

六七 越後土產

初・二編 紀興之編 元治元年

二冊 新潟縣立圖書館藏

越後一國の風土・物産を列載せり。山川古蹟等は間々略圖を加へ、物産は相撲番附に摸して列記す。著者は會津の人。

六八 佐渡一國山水圖

鳥瞰圖 明治六年刊

一枚 栗田元次氏藏

六九 佐渡海岸通測量野帳

鳥瞰圖 天保十三年石井彩助寫

三冊 新潟縣立圖書館藏

七〇 佐渡並近國海上方角里數繪圖

鳥瞰圖 寫

二冊 東京帝國大學圖書館藏

七一 佐渡六湊繪圖

鳥瞰圖 寫

一帖 栗田元次氏藏

七二 新潟眞景

嘉永二年刊 翠柳齋圖

一冊 禿氏祐祥氏藏

新潟は信濃河口にある北海路の要港にして、元和年間より著はれ、明曆頃に至りて市街も整へり。天保四年

天領となり、新潟奉行が置かれ、安政五年の條約にて貿易場となり、明治元年十一月開港せらる。

七三 新潟湊之眞景

鳥瞰圖 安政六年刊 (圖版参照)

一枚 栗田元次氏藏

七四 新潟沼垂論所一枚繪圖

寛政五年寫

一冊 栗田元次氏藏

論所の圖にして、訴訟附屬のものなり。

七五 新潟税關之圖

鳥瞰圖 勝川九齋畫 刊

一冊 新潟縣立圖書館藏

七六 沼垂と湊出入證文寫

附屬書狀共

七通 新潟市役所藏

沼垂と新潟兩湊の出入に關し、享保十二年十二月二日附のものなり。溝口信濃守知行・越後國蒲原郡沼垂町年寄新次郎・訴訟方市右衛門外三名と、牧野駿河守知行・同國同郡新津町の相手方、年寄幸右衛門外五名連判にて、評定所宛出したる證文類なり。

七七 鹽一件ニ付沼垂ヨリ爲替證文

一通 新潟市役所藏

寶曆四年九月、沼垂と新潟湊との間に、取交したる鹽積廻船につき、内談規定したる證文。

七八 長東正家過書

一通 本間光正氏藏

尙以上下共ニ異議有間數候、以上。

其方從御國被召上候舟十艘之内、自然何之浦々へ被寄候共、不可有異儀候、若違亂之族於在之者、急度可被仰上候、恐惶謹言。

三月廿九日

長東大藏  
正家(花押)



羽柴出羽待從殿  
人々御中

長束正家より、最上義光にあてたるものにして、朝鮮征伐の時或は小田原征伐の時のものならん。(圖版参照)

### 3 北海道・樺太

七九 松前繪圖刊 一鋪 栗田元次氏藏

松前は松前氏の管する所。慶長九年徳川家康、松前慶廣に蝦夷交易の制三章を授け、諸國の商船皆松前氏の允許を受けて貿易せり。

八〇 松前全圖寫 一鋪 彦根町立圖書館藏

八一 拾遺日本北地全圖 文化年間・文續堂刊 一鋪 杉浦丘園氏藏

八二 北海道詳細圖 鳥瞰圖 一枚 石川縣立圖書館藏

森田栲園の筆寫にして、安政二年三月同氏の記あり。

八三 改正蝦夷全圖 豐島毅編 嘉永七年寫 一鋪 石川縣立圖書館藏

蝦夷・樺太・千島の圖にして、上方に蝦夷方言を載せり。編者は加州金澤の人。

八四 蝦夷地分割略圖寫 一枚 石川縣立圖書館藏

「明治二年九月以狩谷氏藏圖摸寫紀良見」の墨記あり、森田栲園の自筆。

八五 蝦夷圖寫 二枚 住田正一氏藏

八六 蝦夷闔境輿地全圖 嘉永七年刊 一鋪 宮本祐二氏藏

八七 北蝦夷・蝦夷諸島圖 (實測日本地圖の内) 刊 二鋪 梅本彰平氏藏

八八 蝦夷地湊々測量之圖 文化年間寫 二卷 函館市立圖書館藏

「此蝦夷地測量之圖者、江戸某と申御方十七ヶ年之間、蝦夷地を測量致し、書き得たる處眞形之圖也、是迄秘藏して世に廣まらざる處、幸にして手に入候故寫取置者也、世之地理を心懸る人に一覽に備る而已、誠に天下絶品之品にて何方えも無之品にて御座候」の附紙あり。

八九 蝦夷松前一圓圖 鳥瞰圖 安政六年刊 一鋪 石川縣立圖書館藏

九〇 箱館全圖 安政二年刊 一鋪 栗田元次氏藏

函館は松前氏時代より蝦夷の要港なり。北門の警傳はるに及びて幕府の天領となり、函館奉行を置く。更に安政元年和親條約によりて、外國船の必要品供給場となり、同六年より遂に互市貿易場となれり。

九一 箱館全圖 萬延元年刊 一鋪 栗田元次氏藏

九二 箱館眞景圖 鳥瞰圖 一枚 栗田元次氏藏

九三 根室ノ圖 一枚 住田正一氏藏

九四 蝦夷年代記 松浦竹四郎著 慶應三年刊 一冊 石川縣立圖書館藏



蝦夷地に關する年代表にして、神武紀元より慶應三年に至る。

九五 北 島 志 豊田亮編 明治三年刊 四冊 石川縣立圖書館藏

水戸彰考館編修豊田亮が官命によりて、神代より嘉永七年函館奉行設置までの蝦夷地及び北蝦夷地の沿革及び現状を記せり。編者は字を天功、彦次郎と稱し、松岡と號す。水戸烈公に召されて彰考館總裁となり、元治元年六十歳にて歿す。

九六 邊 要 分 界 圖 考 近藤守重著 寫 八冊 北海道廳藏

著者が幕命により、蝦夷地を巡覽し、歸國後實地踏査と諸著書によりて東方諸島の地理を考證し、邊防資料として上呈したるもの。文化元年十二月の自序あり。

「嘉永元戊申年六月廿五日越知直澄」の墨記、「高麗藏」の印記あり。

著者は、明和八年に生れ、通稱は重藏、正齋と號せり。寛政七年長崎奉行手附となり、同十年中川飛彈守に従ひ蝦夷に行き、擇捉に渡りて魯人の標榜を撤せり。以後北海警備のことに留意し、獻策すること二回。文化中書物奉行に任ぜられ、後罪せられて大溝藩に預けらる、文政十二年六月歿。

九七 近 藤 巡 夷 錄 近藤重藏著 文政五年寫 一冊 北海道廳藏

文政五年、重藏が菩提寺瀧川正受院に自己の甲冑を附けたる像を安置せるを、身分相應なりとの評ある爲、寺社奉行松平伯耆守に具狀して、石像彫刻の由來顛末を報告したる書狀なり。中に擇捉開發のこと等を記す。

九八 北 邊 探 事 大槻茂實著 寫 二冊 京都帝國大學圖書館藏

寛政四年ラクスマン來朝より、文化元年レザーフ來朝までの日魯交渉史を記し、漂流民の口述其他に依りて、魯西亞の國情を詳にしたるもの。黒川眞頼舊藏。

著者は通稱玄澤、字は子煥、磐水と號す。仙臺侯の侍醫にして、蘭學に通ぜり。著書三百餘種。文化十四年七十一歳を以て歿す。

九九 北 夷 考 證 高橋景保著 寫 一冊 北海道廳藏

和漢洋の諸書を参照して、唐太とサハリン島を同一なりとし、南部は間宮林藏の實地調査により、北部は乾隆年間の支那圖によりて補ひ、唐太島の地形を考定したるもの。

著者は、作左衛門と稱し、字は子昌、蠻蕪と號せり。蘭學に通じ、幕府の書物奉行、天文方を兼帶す。

一〇〇 蝦 夷 道 知 邊 本多利明著 寛政十三年寫 一冊 北海道廳藏

(武藤勳藏蝦夷日記・問問宮生書ト合冊)

寛政十三年の序あり。蝦夷開發の急務、及びその方策を論述せり。

著者利明は北夷、魯鈍齋と號し、通稱を三郎左衛門といふ。算數の學に長じ、兼て蘭學に通ぜり。又航海術を研究し、自ら諸國を遍遊して港灣の形勢等を調査し、機に應じて經世策を講じ特に北邊防備及び開拓に留意せり。文化六年加賀前田齊廣に召され、文政三年十二月七十七歳を以て歿す。

一〇一 蝦 夷 行 程 記 阿部喜任著 文政三年刊 二冊 住田正一氏藏

上卷は函館より西方、西蝦夷地及び北蝦夷地、下卷は函館より東方、東蝦夷地及び海岸の行程記なり。著者は、江戸の本草家にして、字は亨、友之進と稱し、巴叔園、櫟齋と號す。



一〇二 北海隨筆 坂倉源次郎著 元文四年寫 一冊 北海道廳藏

松前並に蝦夷地の狀況・風俗・習慣等を詳述せり。

著者は、元文二年金山探檢の爲、蝦夷地に來れる江戸金座後藤庄三郎の手代なり。

一〇三 北洋錄 寫 一冊 京都帝國大學圖書館藏

一〇四 東遊記 立松懷之著 二冊 北海道廳藏

天明三年江戸を發し、奥州の勝地を探りつゝ、遂に舊友を訪ねて松前に來り、江差に滞在中風雪に遇ひ、徒然なるまゝに松前の風土・産物・政治等につき、見聞したるまゝを記したるもの。天明甲辰初夏の自序及び「東遊記二冊舊友稻懷之作也、寛政元巳酉藉杉團子之筆寫以爲藏書焉近藤居」の墨記あり。

著者は、字を子玉、東蒙・嘉穂・東毬等の號あり。初めは儒者にして、後狂歌を學び、平秩東作・稻毛屋金右衛門と戲號す。

一〇五 北海異談 寫 一〇冊 函館市立圖書館藏

寛政以來、異船の北海に出沒せることを記せるもの。

一〇六 北海異談 寫 四冊 京都帝國大學圖書館藏

一〇七 蝦夷嶋奇觀 二卷 松本彦次郎氏藏

蝦夷各地の奇習等を記し、彩色畫を挿みたる繪卷なり。(圖版参照)

一〇八 續蝦夷島奇觀 嘉永七年 岡野義知自筆 一冊 静岡縣立葵文庫藏

蝦夷の地理・風俗・風景・産物等を記したるもの。

一〇九 蝦夷島奇觀拾遺 安政二年 岡野義知自筆 一冊 静岡縣立葵文庫藏

蝦夷の地圖・風景・風俗・産物等を記したるもの。

一一〇 蝦夷國志附錄 嘉永六年 岡野義知自筆 一冊 静岡縣立葵文庫藏

一一一 北門私議 横井豊山著 寫 一冊 北海道廳藏

安政元年堀織部正に従ひて蝦夷地を巡察したる著者が、魯西亞の東方三策に對せし開拓意見にして、蝦夷地の危険並に開拓の急務、及びその方策を詳論せり。豊山の甥、横井忠直の跋を附す。

一二二 蝦夷樺太紀行 三卷 北海道廳藏

秋田藩士松本吉兵衛盛親著の原本により、昭和七年影寫せるもの。各地の風俗・地形等を彩色畫して挿入せり。

一二三 蝦夷地見分書取 寫志賀猪三郎・平元貞治著 寫 一冊 秋田縣立圖書館藏

一二四 夷酋列像附錄 寛政二年寫 松前廣長著 一冊 北海道廳藏

一名、毛夷圖國字附錄といふ。卷頭に蝦夷の沿革を記し、武田氏が各館主の征服及び十三世までの夷叛を叙述し、寛政元年國後及び目梨に於ける蝦夷叛亂の概要、並にその鎮定に功ありし蝦夷酋長等十二人の略傳を記せり。開拓使對紙を用ふ。



二五 蝦夷風俗圖

蝦夷地の風俗及び同島人を描きたる彩色畫なり。

五枚 住田正一氏藏

二六 高田屋嘉兵衛傳

彩畫入 岡田鴨著 寫

一冊 北海道廳藏

二七 高田屋金兵衛書翰寫眞

一 嘉兵衛 四十四歳

一葉 東北帝國大學奥羽史料調査部藏

外ニ水主四人

右八月十四日蝦夷地クナシリニ而異國船ニ出合、右船江乗組同十七日同所出帆仕候、何卒病難無之明年日本江歸國いたし候様、尙又松前表ニ居候ヲロシヤ人異國江引返し之御沙汰ニ相成、明年異國船参り候節、早速引替ニ相成候様心願成就之御祈禱觀音様江二夜三日御祈禱書面之譯ケを以御願可被下候、歸國次第早速参詣爲致可申候間、丹情をぬきんて御祈り被下候様貴公様々厚ク御頼可被下候、以上。

九月廿八日

高田屋金兵衛

越後屋様

現品は青森縣西津輕郡深浦町圓覺寺所藏。

高田屋金兵衛は嘉兵衛の弟、宛名の越後屋は深浦の船問屋なり。

二八 エトロフよりの書狀

一冊 函館市立圖書館藏

エトロフにありし仙臺の陣屋より發したる書翰集にして、文化五年四月より六月に至る。「仙臺文庫」印記あり。

二九 松浦竹四郎外交ニ關スル書狀寫

一冊 住田正一氏藏

松浦竹四郎は、武四郎・多氣志樓とも稱す。尾張の人、幕命を奉じて蝦夷に入る。著書に、北蝦夷日誌・十勝日誌・西海雜誌・日狩日誌等あり。明治中期歿。

三〇 米使來朝其他通商ニ關スル松浦竹四郎書翰眞蹟

一冊 住田正一氏藏

三一 北門急務

岡本文平著 明治四年刊

二冊 北海道廳藏

樺太開發に對する意見を述べたるもの。

三二 千嶋講宿帳刊

一冊 函館市立圖書館藏

卷頭に「千嶋講商人定宿扣」とあり。全國千嶋講指定宿目録にして、傍ら旅行案内をも兼たり。出版年期不詳なるも、越前敦賀帳元長岡屋清左衛門・岩越瀬左衛門の發閱にかゝるものならん。

三三 義經入蝦反證記

一冊 北海道廳藏

北海道札幌の人、永田方正の稿本にして、源義經が衣川に死せずして、蝦夷に入りたりとの説を一々根據を擧げて反證したるもの。

4 對岸地方

三四 東韃沿海圖

原田巽著 嘉永七年刊

一冊 宮内省圖書寮藏



同

二三五 滿洲魯西亞疆界圖 嘉永頃刊

二三六 朝鮮國和館浦之圖 慶應頃刊

二三七 新羅之記録 寫

別名、新羅記又は松前舊記といひ、松前藩の歴史を記す。

松前景廣が寛永廿年家光の命により、家臣齋藤直政に編纂せしめたる松前家系譜を正保元年増訂したるもので、同三年三井寺に詣でし際、寺内新羅神社に納めたるもの。開拓使函館支廳の罫紙を用ふ。景廣は松前慶廣の五男。

二三八 建州女眞始末 荻生觀著 寫

明の清祖が永樂元年(應永十年)女眞を招諭來朝せしめたるより、遂に明の建州を亡ぼして一統したるまでの清朝建國史なり。漢文にして、安永九年庚子春、宇野久恒の奥書あり。兄茂卿の校訂を経て淨書したるを、大塚長幹の嗣子清興より贈られ、孝綽より更に贈られて所藏せる由を誌す。桂川甫周「漂民御覽記」と合冊。

二二九 唐太日記 鈴木重尙著 安政七年刊

嘉永七年、幕吏堀織部正に従ひ唐太に至り、クシユンコタンより、シユシユヤ越を経て東海岸ナイブツに出で、それより奥トツソの嶮を探り、マーヌイより西海岸に出て、シラヌシに歸りたる紀行にして、後松浦竹四郎之に評註を附して出版せるもの。

一三〇 魯西亞聞書 寫

大槻玄澤著の北邊探事附録と同書なり。

一三一 黑龍江記事等 武田斐三郎著 寫

萬延元年の著にして、文久元年著者が黑龍江を遡航視察せる復命書なり。斐三郎は竹塘と號し、五稜廓の設計者として有名なる蘭學者なり。

一三二 北日本及韃靼探檢記 プアシユ編 刊(英文)

ラペルーズ氏の探檢記。氏は一七四一年タールン市アルビ近郊に生れたる佛蘭西の有名なる航海者なり。編者プアシユは、一七四一年ヌーヴィユ・アン・ポントに生れたる佛の地理學者。

一三三 朝鮮國禮曹慶吊狀

朝鮮國禮曹參議姜 奉復

日本國對馬州太守平公 閣下

慶吊

相問禮所當然況我



兩國世篤交誼差譯致憚定出情禮不期

專价回謝副以

珎貺遠挹

盛眷采增銘感不腆土儀

莞領是冀秋序向殘萬望

自玉不宣

發已九月 日

禮曹參議姜

(黒印)

一三四 朝鮮人來朝記 寫

一三五 毛利氏朝鮮使節迎接圖 影寫

一三六 荅魯西亞人之章 文化二年寫

一冊 藏 尙 太 郎 氏 藏

一冊 東京帝國大學史料編纂所藏

一冊 住 田 正 一 氏 藏

### 三 加能越資料の部

#### 1 三州一般・國郡

一三七 加賀能登越中之圖 (日本國圖の内)

一三八 加越能三州圖 古寫 (圖版參照)

一三九 加越能十二郡圖 寫

一四〇 地誌提要 加賀國・能登國 明治七年刊

一四一 御領國海邊略圖 寫

一四二 加能越海邊筋等繪圖 寫

一四三 加能越三州海邊村建等分間繪圖 嘉永三年寫

一四四 加越能海岸村々之圖 鳥瞰圖 寫

一四五 加越能海岸圖 寫

一四六 加州能州海岸立丁間等見取繪圖 文久三年寫

一冊 帝 國 圖 書 館 藏

一枚 京都帝國大學圖書館藏

十二冊 本 多 正 樹 氏 藏

一冊 近 彌 二 郎 氏 藏

四冊 前 田 利 爲 氏 藏

一帖 本 多 正 樹 氏 藏

一帖 本 多 正 樹 氏 藏

一帖 富 山 市 立 圖 書 館 藏

一卷 京 都 帝 國 大 學 地 理 學 教 室 藏

五枚 前 田 利 爲 氏 藏



一四七 北陸奇勝 淵上禎著 寛政十二年刊

一册 石川県立図書館蔵

日本勝地山水奇観十二冊に收めたる北陸の部にして、越前・加賀・能登・越中の越後の港灣、海邊勝地を描き、自作の詩を附す。著者は浪華の畫家にして、字は白龜、旭江・雲院窟と號す。

一四八 加賀吉崎ヨリ越中境マデ海岸之圖 寫

一帖 前田利爲氏藏

一四九 三州海岸圖斷草稿 寫

一册 前田利爲氏藏

一五〇 加賀沿岸圖誌 加賀藩領ノ沿革圖

一册 帝國圖書館藏

一五一 加賀全圖 寫

一鋪 京都帝國大學地理學教室藏

一五二 濱坂ヨリ木場方沿海古圖 寫 (圖版参照)

一鋪 京都帝國大學地理學教室藏

一五三 石川河北兩郡圖 嘉永六年寫

一枚 京都帝國大學地理學教室藏

一五四 石川郡海岸村々村建見取之圖 彩畫 嘉永二年寫

一卷 富山市立圖書館藏

海上の深淺を記入す。

一五五 能州全圖 文政十一年脇田尙方寫

一卷 京都帝國大學地理學教室藏

一五六 能州地圖 文化六年寫

一枚 作宮七太郎氏藏

一五七 能登海岸風景繪圖 寫

二卷 金澤市立圖書館藏

一五八 能州四郡略繪圖 天保十年寫

一枚 京都帝國大學地理學教室藏

一五九 能登沿岸繪圖 寫

二卷 酒井達郎氏藏

一六〇 能州道中圖 寫

二卷 本多正樹氏藏

一六一 能州筋海岸村々丁間海立淺深調理 改作所製 寫

一册 前田利爲氏藏

一六二 口郡略繪圖 嘉永七年寫

一枚 京都帝國大學地理學教室藏

一六三 奥郡繪略圖 嘉永七年寫

一枚 京都帝國大學地理學教室藏

一六四 鳳至珠洲兩郡海邊筋繪圖 寫

一枚 石川縣立圖書館委託

一六五 富山領海岸海底深淺繪圖 寫

一枚 富山市立圖書館藏

一六六 射水郡海岸村々村立見取繪圖 嘉永二年寫

一卷 富山市立圖書館藏

海岸線の里程、海上の深淺を記入す。

一六七 射水郡網場之圖 寫

一鋪 富山市立圖書館藏

一六八 神通古川ヨリ境川迄海岸分間繪圖 嘉永五年寫

一卷 富山市立圖書館藏

海邊村の高免・家數及び海上の深淺を記入す。

一六九 新川郡海岸分間圖 寫

一折 富山市立圖書館藏

神通古川より境川に至る、分間鳥瞰圖。嘉永三年の原圖に安政五年・文久三年の二回改冊補正したるもの。



2 町 村

— 加賀の部 —

瀬越村

領域狭少且地味農に適せざる爲、古來海運業・漁業に従事する者多く、舊藩時代海岸に於ける地先權は約十三町の延長を有せりといふ。

領内海岸は、船舶發着の便少なきため、廻漕用の大船は多く大阪に根據を有し、冬季休業の際は船頭相率ひて歸村し、初春に至るを待てり。之等業者中廣海・大家・角谷・高見家最も顯れ、大船巨船を有して、遠く蝦夷・樺太・朝鮮等諸地と交易せり。

明治三年現在にて村内に於ける所謂千石船の所有數七十二艘に及び、以てその盛時を窺ふを得るなり。

一七〇 帆 船 名 簿

一枚 大家 七 兵 衛 氏 藏

大家家は瀬越村における名家にして、古來海運業を營み、當主を以て四代となす。

之は文政・弘化年間に於ける同家の持船名簿にして、兩德丸・神德丸・吉德丸・廣德丸・廣吉丸・廣長丸・永吉丸・正德丸・永德丸・住德丸・廣榮丸・神力丸・住吉丸の十三艘を記せり。

一七一 繪 馬 正德丸外二船ノ圖 明治二年奉納

一面 白 山 神 社 藏

一七二 同 幸德丸ノ圖 明治二年奉納

一面 白 山 神 社 藏

一七三 同 嘉德丸ノ圖 明治四年奉納

一面 白 山 神 社 藏

一七四 賣 仕 切 帳

一冊 大家 七 兵 衛 氏 藏

大家家持船兩德丸船頭七三郎天保十四年の仕切帳にして、鹽・庄内米・昆布・棒鱈等に關するもの。

一七五 仕 切 帳

一冊 大家 七 兵 衛 氏 藏

安政二年大家家持船兩德丸船頭七兵衛の仕切帳にして、大阪北風莊右衛門宛賣仕切、播磨屋辰吉・新保屋吉次郎宛買仕切等の控なり。

一七六 買 仕 切 控 帳

一冊 大家 七 兵 衛 氏 藏

大家家持船吉德丸孫右衛門の控帳にして安政四・五年頃のもの。

津輕藏米二千百四十三俵、山本庄五郎宛。ノ粕百八十五本宮崎布右衛門宛等。

七七七 雜 用 帳

一冊 大家 七 兵 衛 氏 藏

前記吉德丸孫右衛門の安政五年に使用せしもの。

一七八 仕 切 帳 ・ 勤 定 帳

四冊 大家 七 兵 衛 氏 藏

安政・慶應年間に大家七兵衛の使用せるもの。



一七九 兩徳丸新造勘定帳

文政元年大家家持船兩徳丸新造に要せし費用の明細帳なり。

一冊 大家 七兵衛氏藏

一八〇 借用證文

弘化五年八万丸喜兵衛(十兩)・弘化三年函館魚屋源三郎(十四兩)・同年加賀吉崎村清次郎(五兩二朱)・安政二年久吉丸吉藏(二十兩)・文久三年山中綿屋安右衛門(五十兩)・慶應四年熱田清水屋又左衛門(十九兩三朱)・明治二年攝州廉間魚屋榮次郎(五百八十八兩二步)の年賦證文・明治四年敦賀藥屋伊左衛門(二百五十六兩)等の大家七兵衛宛借用金證文なり。

十五通 大家 七兵衛氏藏

一八一 賣券

文久元年攝州大阪大和屋重兵衛より大家宛、廿八反帆用古檣一本の賣渡證にして、その代金百兩。

大屋 七兵衛氏藏

一八二 船積付目録

慶應四年松前宮嶋布右衛門より、大家吉太郎宛のもの。

一通 大家 七兵衛氏藏

一八三 仕切書

敦賀角野喜助長莖二百束・文久三年西讃粟嶋油屋武右衛門朱呂皮百二十五丸等買仕切・文久三年松前宮嶋布左衛門中間繩五十丸・同鹽三百俵・津輕鱒ヶ澤山本庄五郎鹽三百俵等の賣仕切書なり。

廿六通 大家 七兵衛氏藏

一八四 年賦帳

慶應元年大家家持船明徳丸に使用のもの。

一冊 大家 七兵衛氏藏

一八五 取替帳

明治二年大家家持船神徳丸源作の使用せしもの。

一冊 大家 七兵衛氏藏

一八六 道具帳

明治二年春日丸又次郎の用ひしもの。

一冊 大家 七兵衛氏藏

一八七 預り書控

明治三年大家七三郎より敦賀中へ宛たる預り證の控。

一冊 大家 七兵衛氏藏

一八八 下り物積入覺書

明治四年 泰平丸

一冊 大家 七兵衛氏藏

一八九 諸國廻船問屋發行曆

明治二十九年

十八枚 大家 七兵衛氏藏

鹽屋村

本村は縣の最西南端に位し、西北は日本海に臨み、東は瀬越村に續き、南は大聖寺川及び堀切灣を距て、三木村字吉崎に相對す。

耕地少き浦方なるため、住民の多數は漁を以て生業とし、漁場は西方福井縣坂井郡より、東は安宅地先に至る間、二十ヶ所を獨占し、延長五里餘に及びたることあり。

堀切港は、大聖寺川の河口に在り、東西五町三十間・南北一町六間・最深一丈四尺、古來船舶の出入多く、良港なりしも、激浪の爲灣口次第に狹められたり。



一九〇 賣 仕 切 書

一通 龜田 政 二氏藏  
天保十年噸館魚屋源三郎より、能登屋伊三郎宛、上方米八十四俵の仕切。

一九一 爲 替 手 形 等

三十通 龜田 政 二氏藏  
元治元年加州堀切濱野屋・酒屋・魚屋より龜田吉次郎に、兵庫中屋源治郎より長徳丸甚四郎に、庄内酒田越後屋長次郎より濱野甚四郎に宛てたるもの等々。

一九二 繪 馬 濤靜丸ノ圖

一面 菅生石部神社社藏  
大聖寺藩船千七百石積、元治元年敦賀にて出來のもの、後鹽屋村新後家の手に譲渡せられ、當主長三郎より奉納せられたるもの。

一九三 同 榮長丸ノ圖 慶應三年奉納

一面 八 幡 神 社藏

一九四 同 帆船ノ圖 吉川青舟畫 明治三年奉納 (圖版参照)

一面 八 幡 神 社藏

一九五 扁 額

一面 八 幡 神 社藏

漁業者の奉納したるもの。

一九六 入荷物掛り物目錄

一冊 龜田 政 二氏藏  
松前福山、岩田金藏より龜田吉次郎に宛たる運漕料目錄。

一九七 目 録 帳

一冊 龜田 政 二氏藏  
文久二年津輕小濱屋太兵衛より榮喜丸初治郎宛仕切帳。

一九八 目 録 帳

一冊 龜田 政 二氏藏  
文久二年津輕鰻澤油屋清兵衛より龜田初治郎宛仕切帳。

一九九 用 留

一冊 龜田 政 二氏藏  
慶應三年越前敦賀澤本與八郎と龜田家との間に行はれたる、弘化二年以後の金錢貸借控。

二〇〇 船 鑑 札 明治四年 木製

二枚 鹽 屋 村藏  
俗に往來と稱す。一年間有効。

橋 立 村

西北は日本海に面し、南は瀬越・鹽屋に續き、海岸線の延長二十町餘あり。

村民は往時より進取の氣象に富み、且商事に巧なるを以て、夙に蝦夷地との交易に着眼し、毎歲

遠く彼地に渡航せり。故に廻漕業著しく發展し、千石・二千石積の帆船は常に日本海を蹴破し、

蝦夷地の諸浦到る處にその勇姿を現せり。是に於て寛政八年船主の組合を組織し、船道會と稱し、

會員三十四名を有したり。

二〇一 航 海 日 記

十冊 宮 本 祐 二氏藏

橋立浦廻漕業宮本家持舟の天保十三年より明治年間に亘り全国各地に航海せる日記にして、當時の航海状況を



知る上に極めて貴重なる資料なり。

二〇二 手船儀定帳 嘉永三年 一册 宮本 祐二氏藏

請書之事・御手船間尺並積石・諸國問屋付船雜用・荷物用捨定等を記す。

二〇三 橋立御觸書寫 嘉永六年 一册 宮本 祐二氏藏

二〇四 航路針筋書 一册 宮本 祐二氏藏

瀬戸内針筋・フルヒラ潤入之事・東蝦夷地下り・江戸行東廻り・江戸より大阪登り等に分ち、航海上の目標物・海流等諸注意を記す。

二〇五 手船勘定帳 一册 宮本 祐二氏藏

安政三年より明治廿一年に至る橋立浦宮本家の持舟千歳丸・幸重丸・孝福丸・幸喜丸・旭丸・幸榮丸等の諸入用金を書留たるもの。

二〇六 船道會廻文控 一册 宮本 祐二氏藏

船道會は寛政八年組織せられたる船主の組合なり。本書は文久三年に於ける船道會廻文の控をはじめ、明治十六年解散にいたるまでの諸記録をも載す。

二〇七 荷物船手用捨定 一册 宮本 祐二氏藏

江州千枝村藤野店より出したる文久三年改正の用捨定。

二〇八 日々要用日記 慶應元年 一册 宮本 祐二氏藏

二〇九 松前相場書 一册 宮本 祐二氏藏

慶應三年松前産物の値段を記す。

二一〇 繪馬 幸甚丸並ニ山王丸ノ圖 嘉永六年奉納 一面 出水神社 社藏

出水神社往古の社地は、出水の潤と稱する海岸續きに鎮座の處、波濤の爲崩欠し、中古海邊の出水山に遷りたるものといひ、海神豊玉姫命等を祀る。

二一一 同 神惠丸ノ圖 安政四年奉納 一面 出水神社 社藏

二一二 同 正運丸ノ圖 元治元年奉納 一面 出水神社 社藏

二一三 同 萬代丸ノ圖 慶應二年奉納 一面 出水神社 社藏

二一四 同 天神丸ノ圖 一面 出水神社 社藏

二一五 同 旭丸ノ圖 明治二年奉納 一面 出水神社 社藏

二一六 同 寶永丸ノ圖 明治三年奉納 一面 出水神社 社藏

湊村

手取川の河口に在りて、西方海岸線の延長は十五町三十間なり。手取川は初め比樂湊に入りしが故に比樂河の名あらはれたるが、後河道を變じて現在の位置をとりたるを以て、河口を今湊、水





を湊川と呼ぶに至れり。

歴史上早くより顯れ、源平盛衰記・太平記にも見ゆ。化政頃の在船調によれば、千石積一、八百石積十二、七百石積十四、五百石積十五艘の數に達したることあり。

文政の末頃、加藩登米の用命に應ぜざるを以て、航運業を禁ぜられ、往來手形を押收せられ船役人を免ぜられたり。

二二七 前田利長定書

能美郡之内、今湊村并出村之事。

不作之地可致開作之旨、就申上定置條々。

一 當村物成之事、以檢知之上、當年來年者高ニ付而三分一ニ可收納、以後者見立次第可申付之事。

一 當村諸役、當年來年中令免除之事。

一 海上之舟并渡舟、如前之成次第、可仕之事。

右之趣不可有相違者也。

慶長 六年

正月廿八日(花押)  
(前田利長)

今湊村 千もいり  
惣百姓中

(圖版参照)

二二八 村上頼勝下知狀

一通 吳竹文庫藏

我等領内、他所八木出入堅相留候。万一かくし米入候者、聞付次第類親ニ相懸、可令成敗候條、成其意へく候、恐々謹言。

(天正末)

正月廿五日

周防守 頼

勝 (花押)

湊浦

(圖版参照)

美川町

美川港は手取川の河口に在り、東西六町四百間、南北八十間。舊藩時代には本吉港と稱し、北海道・樺太・小樽より海産物、山陰地方より木炭・薪、奥羽方面より木材等を主として移入し、石炭・依・苧・繩を移出せり。明治三年調による帆船數は尙五十餘艘あり。紺屋三郎兵衛は廻船業者中最も顯れ、寛政年間隆盛を極めたり。其外明翫屋・田中屋・上野屋・加登屋・通善屋・竹内屋・川原屋・尾山屋・永嶋屋等名高し。

二二九 本吉湊繪圖

二枚 美川町役場藏

二三〇 久保田藩開拓方辭令並福梅丸版畫

一軸 竹内精一氏藏

積年來於當藩、送船運搖ニ周旋盡力之廉不少、依之先日當局差配人申付置候所、此度蒸氣八坂鑑引卸方之儀ニ付、日夜碎神魂、懲膽精頗ル發明茂有之哉ニ聞及候ニ付、右鑑引卸方其許に御委任被成候故、



猶更盡心力、速遂成功之様勉勵可有之候。附而諸事當局に可被相伺候、以上。

明治三年午六月四日

久保田藩開拓方〇(黒印)

開拓方差配人

竹内傳三郎殿

二三 竹内傳三郎肖像畫

石崎謙實 絹布

一軸 竹内精一氏藏

初め上野屋與六郎と稱し、文化中千石積以下十數艘を有し、北は樺太、南は呂宋まで廻漕せり。又佐竹侯の御用を勤めて十人扶持を賜はり、嘉永年間自ら二本橋西洋形二千石積帆船を自ら設計し、船長となりて遠洋航海をなす。

中年傳三郎と改名し、大阪に於て外車蒸汽船を建造し、自ら操縦して運漕せる等功績多し。明治十六年十二月十八日歿す。

二三 船鑑 札

天保十五年萬福丸使用 (圖版参照)

二枚 美川小學校藏

二三 船往來手形

慶應四年 (圖版参照)

一枚 梅本彰平氏藏

二四 船鑑 札

文久四年 木製 (圖版参照)

一枚 明翫彌之助氏藏

所藏家の祖、明翫屋は代々傳兵衛と稱し、元文元年六艘の廻送船を有し、明治初年迄運漕を業となせり。

二五 廻船問屋發行曆

明治三年

一枚 明翫彌之助氏藏

金石町

金石港は舊宮腰湊と稱し、犀川河口にありて、古くよりあらはる。金澤に近き爲、加賀藩の要港としてその保護を受け、寛文三年既に十五歳以上の者四千數百人の人口を有し、通商交易最も盛なりき。殊に錢屋五兵衛の廻漕業を以て家を興してより、宮腰の名全國に顯れ、多くの廻漕業者全國各地に雄飛せり。明治初年の舊記によれば、五百石積以上二十三艘・五百石以下百八十二艘・漁船等二百九十二艘とあり。

二六 宮腰町繪圖

元祿年間寫

一枚 中山一衛氏藏

二七 二百石以上在船書上

安政三年宮腰船肝煎より廻船係宛

一冊 大鋸彦太郎氏藏

二八 加州錢屋五兵衛一件

寫

一冊 大阪府立圖書館藏

二九 錢屋五兵衛事蹟

寫

一冊 石川縣立圖書館藏

三〇 錢屋五兵衛の話

野口之布著 寫

一冊 石川縣立圖書館藏

三一 錢屋五兵衛雇船材木積登留帳

文政三年

一冊 東北帝國大學奥羽史料調査部藏

青森縣野邊地町野坂與次兵衛氏舊藏本の寫

三二 年々留

文政十一年—嘉永四年

二冊 清水五兵衛氏藏



二三三 錢屋五兵衛渡海免狀

加州手船宮腰町錢屋五兵衛才許船頭水主共九人乘、永代渡海於浦々異儀有間鋪者也。

弘化三年四月

加賀宰相内

里見亥三郎 (黒印)

四〇

一冊 村松七九氏藏

津々浦々役人中

二三四 錢屋五兵衛書簡斷片

一冊 藏 尙太郎氏藏

二三五 青森市香取神社石燈籠臺石拓本

二枚 東北帝國大學奥羽史料調査部藏

嘉永二年宮腰錢屋寶國丸八十吉と刻す。

二三六 御差引目錄

一冊 野崎依一氏藏

安政五年津輕瀧屋善五郎より、輪島屋佐兵衛宛の仕切差引帳なり。

現代野崎依一氏は、輪島屋十三代なり。九代の祖より廻船業に従事し、十代の頃最も殷賑を極め、五六百石積以上五艘を有し、十一代の頃は錢屋家と親密なる關係を有せり。十二代に至り廢業す。

二三七 大寶惠 文久三年

一冊 野崎依一氏藏

輪島屋持舟、縁丸與助のものにして、御主人様諸方入口・諸方拂口・糧米之口・大工道具之口・鐵用之口に分つ。

二三八 船頭請合狀

一通 野崎依一氏藏

請合狀之事

一 當所紺屋勘右衛門と申者、貴家様御船沖船頭ニ相乘罷申候ニ付、私共請人ニ相立申處實正ニ御座

候。然上者公儀御法度之趣少茂相背申間敷、尤主人太切に相心得、正直ニ相勤可申旨常々可申付候。若又不法並引責等仕候節ハ私共罷出、貴家様御難題懸ケ不申、急度相誘可申候、依而爲後日之請合證文一札如件。

慶應四戊辰正月

請人

永室屋惣助 (黒印)

輪島屋與三兵衛様

相河屋長左衛門 (黒印)

二三九 爲替手形

一通 野崎依一氏藏

願力丸喜兵衛より木屋市郎兵衛宛 外九通あり。

爲替手形之事

一 合千兩也 但通用金

右之金子於秋田湊河井兵左衛門殿爲替取組、右令爰元ニ而慥ニ請取申候所實ニ御座候、然ル上者右代り金、來ル十月晦日限此手形引替無相違金子御渡可被成下候。爲念爲替手形、仍而如件。

文久元年酉九月廿二日

加州宮腰 輪島屋與三兵衛

代 願力丸喜兵衛 (黒印)

秋田湊證人 船木助左衛門 (黒印)

大阪北堀江四丁目

木屋市郎兵衛殿

四一



二四〇 借用手形

借用手形之事  
一金貳百兩也 但利足付

右者此度中荷金要用ニ付、慥ニ借用致候處實正ニ御座候。渡方之儀者、秋田湊着船次第此手形を以、元利無相違相渡可申候。爲後日之借用手形仍而如件。

萬延二年酉三月

加州宮腰 輪島屋與三兵衛

代 大神丸 利吉 (黒印)

船木助右衛門殿

二四一 舟荷物送狀

願力丸喜兵衛殿送狀之事

一 瀬戸物入 四箱

一同 箱入 三個

右は旦那様御買物

一 銘酒男山印 四斗入 二挺

右者平木屋作次郎様分

右之通積送申候條、其御表着岸之砌改、御請取可被成下候、仍送狀如件。

酉四月廿九日

輪島屋與三兵衛殿

木屋市郎兵衛 (黒印)

五通 野崎 俵一氏藏

二四二 舟賣附書

播州室津榮年丸佐助より、輪島屋喜兵衛宛、廿三反帆廻船一艘。堺大和屋政七より輪島屋與三兵衛宛、辨才千三百石積一艘の帆船賣買證なり。

二四三 仕切書

木屋市郎兵衛より輪島屋與三兵衛宛賣仕切。

二四四 船頭關所手形

輪島屋船頭水主等九人、宮腰より大阪に至る關所手形なり。之等水主等は、冬季は舟を大阪に留めて歸郷し、春に至りて上阪活動せり。故にその往復は陸路を通りたるもの。

二四五 大廻講勘定控

堺・大阪等に商取引ある金澤商人が、元文五年二月大廻講なるものを結び、加賀の船場より運送を行へり。天保年間住吉講と改稱し、連綿として明治廿四年に及ぶ。

二四六 大廻講ニ祀リタル神號

二四七 繪馬 福壽丸ノ圖 明治九年奉納

二四八 加越丸附屬品書上 明治十四年寫

二四九 明治三年曆

明治三年、加州宮腰諸船問屋石見屋八右衛門より頒ちたるもの。

二通 野崎 俵一氏藏

二通 野崎 俵一氏藏

一枚 野崎 俵一氏藏

一冊 小野次郎助氏藏

一軸 小野次郎助氏藏

一面 秋葉神社藏

一冊 大鋸彦太郎氏藏

一枚 山口成弘氏藏



大野港は大野川の河口に在り、船舶の碇繫に便なるを以て往昔は頗る繁榮し、大野湊はその舊稱なり。文化三年調による船數は、二百石積以上九艘。同九年には二百五十石積以上十四艘。明治初年尙大小七十艘ありて、北海道方面より練肥料及び木材を多く輸入せり。廻漕者中最も有名なるは丸屋にして、世々富豪を以て粟崎木谷と並稱せられ、船舶數十艘を有して北海の重鎮たり。

二五〇 大野海岸圖 慶應三年寫 一枚 金澤市大野町藏

二五一 大野川口圖 安政六年寫 一枚 金澤市大野町藏

二五二 若狹屋藤右衛門願書 安政三年 一通 金澤市大野町藏

辰四月大野浦船問屋若狹屋より荒木平助に宛てたるものにして、越後米廻送中難風に遭ひ、大野浦にて右米を賣却せんとせし願書。

二五三 大坂爲御登米地船積不納米等御札一件 文政五年 一冊 金澤市大野町藏

宮腰船肝煎吉左衛門・本吉船肝煎彌左衛門・同久次郎・湊船肝煎次郎助・安宅船肝煎喜兵衛・同六兵衛・粟崎肝煎安之亟・大野組合頭仁兵衛連署の御算行場宛願書寫。

二五四 船方御用仰付方願書 文政四年十一月、大野村組合頭仁兵衛外六名の連署を以て、郡奉行宛のもの。 二通 金澤市大野町藏

二五五 大津廻米船敦賀浦延着ニ付答書等 十八通 金澤市大野町藏

文政二年十二月、船肝煎大野村次郎左衛門より五十嵐孫作宛のもの。

二五六 賣券 一通 金澤市大野町藏

文政九年正月、粟崎笠屋忠兵衛より大野番匠屋庄八宛、七十五石積八幡丸の賣渡證。

二五七 津出願 嘉永七年 四通 金澤市大野町藏

丸屋傳太郎所持の越後大豆を、他國に津出せんとするもの。

二五八 大野浦津出津入之譯書上申帳 横屋彌三右衛門所持 一冊 國本榮作氏藏

寛政三年津出・津入の際の諸手續、役銀等に關し大野浦横屋彌三右衛門の記せるもの。

二五九 横屋家過去帳 寛政十二年以降 一冊 國本榮作氏藏

二六〇 津輕御役並庭口錢覺 横屋彌三右衛門所持 一冊 國本榮作氏藏

文化二年津輕侯御用の米穀・木綿・荒物・紙・疊表・木竹・瀬戸物・金物並塗物・船具等の運漕口錢に關する記録。

二六一 御用船之帳 横屋彌三郎所持 一冊 國本榮作氏藏

文化六年三月、横屋彌三郎が前田淡路守の御用船を勤めたる時の記録。

二六二 取立物帳 横屋彌三右衛門所持 一冊 國本榮作氏藏

嘉永五年大野浦、廻漕業者等の頼母子講の記録。



二六三 仕切書

四六

二六四 大野栗崎湊ノ儀ニ付懸合一件寫帳 寛政四年

四通 作宮七太郎氏藏

二六五 御神紋附御印下附書

一册 作宮七太郎氏藏

慶應三年福神丸沖船頭宛のもの。

一通 作宮七太郎氏藏

栗崎町

海岸線の延長十一町十八間は砂丘にして、舟揖の便なけれども、東方大野川に添ふ所水運・漁利の益少からず。海運業は寛永以前より既に發達し、降りて天明年代の如きは木谷一家の持船のみにて、千石積以上十艘、千石積以下十九艘を有せり。乗組船員數は當時百人を算し、舉村殆ど之を以て衣食せる時代あり。之等業者中木谷藤右衛門最も顯れ、向栗崎島崎徳藏亦顯著なり。

二六六 栗ヶ崎瀉水變の圖

一枚 石川縣立圖書館藏

嘉永五年八月中旬以後、湖水の魚類悉く死せるため、同九月三日魚獵指止となりし時の圖なり。嘉永五年森田柿園謄寫。

二六七 栗ヶ崎村船方記録

元治元年寫

一册 大鋸彦太郎氏藏

二六八 津出入定書

一通 金澤市栗崎町藏

享保二年十月廿二日、宮腰奉行馬淵友進より加越能三州舟肝煎宛のものにして、近年津出入次第に猥となりたるにより、宮腰川口に番所建立の上相改る由のもの。

二六九 牧木船一件書類

三通 金澤市栗崎町藏

元祿十年閏二月廿日・同三月廿六日・同四月廿八日附の三通にして、向栗崎と大野浦間に於ける牧木船入津賣買に關する爭論一件なり。奉行は永原權亟・長瀬湍兵衛なり。

二七〇 大野浦荷物入津御定之達

一通 金澤市栗崎町藏

内藤十兵衛より田井村次郎吉宛のもの。

二七一 栗ヶ崎村沖船頭口書

一通 金澤市栗崎町藏

上出屋次兵衛船沖船頭善兵衛及び角嶋屋與兵衛船沖船頭吉三郎等より奉行所宛の口上書にして、町會所御用米運送の途、大野に於て、米・手形・送り狀等を奪取せられたる一件なり。

二七二 船手拜領銀ニ付願

一通 金澤市栗崎町藏

慶應元年栗崎組合頭より田邊次郎吉宛のもの。

二七三 瀉下リニ付願

一通 金澤市栗崎町藏

元治元年栗崎村組合頭より津出奉行所宛のもの。

二七四 荷代金貸附方願

一通 金澤市栗崎町藏

明治三年栗崎村肝煎より郡治局宛のもの。



二七五 流着物届書

一通 金澤市栗崎町藏

元治二年栗崎村組合頭より田邊次郎吉宛のもの。

二七六 津出手形

二枚 木谷吉次郎氏藏

文化十二年 小松・魚津御藏米の運漕

二七七 船往來手形

一通 木谷吉次郎氏藏

文化十二年

木谷家は天正年間より栗崎に入居し、運漕を以て藩主利家に仕へ、糧米・戦士の輸送をなし、傍ら蝦夷・津輕・下關・大阪等の諸港へ手足を伸ばして航海の業を営めり、就中藩米の移出と材木の移入は最も著しく、爾來家運隆盛を續け化政時代には一族の持船數十艘を數へたり。代々藤右衛門と稱し明治時代に及ぶ。

二七八 船艦札

一枚 木谷吉次郎氏藏

粟ヶ崎木谷藤右衛門千石船に使用せる鑑札なり。

二七九 通航札

一枚 木谷吉次郎氏藏

明治三年金澤藩よりのものにして木製なり。

二八〇 賣拂米ニ關スル願書

二枚 大鋸彦太郎氏藏

安政五年午二月木谷藤右衛門より御勝手方役所宛のもの。

二八一 仕切書

三十通 木谷吉次郎氏藏

木谷藤右衛門宛のものにして、賣買仕切書なり。

七 塚村

南北に長き方形を爲し、西方は日本海に面し、南は一帶の砂地によりて内灘村と接し、東方は宇ノ氣村、北は高松町に續く。海岸は一直線を爲し、海岸線長しと雖、港灣を有せず、漁獵を主とせり。之等漁獵者の中には、廻漕をも志し、宮腰・輪島・伏木・佐渡・新潟・直江津・秋田・北海道に通航せり。木津は、木の津と唱へて材木の集散を以て知られ、南部秋田方面との取引を行へり。白尾濱は寛文頃唐仁屋三郎兵衛一族の活動の根城となりしところとして知らる。

二八二 木津村小物成定

一通 七塚村木津區藏

俗に村御印と稱するもの。

加州加賀郡木津村小物成之事

一 五百六拾目 地子銀

一 貳拾六匁 退轉 鹽竈役

一 八拾五匁 内四拾目出來 獵船擢役

一 六拾目 外三拾目退轉 外海引網役

一 三百七拾八匁 出來 外海船擢役



一 八 匁 出 來  
 油 役  
 一 壹 双 七 分 出 來  
 六 步 口 錢  
 本 米 貳 石  
 一 四 斗  
 敷 借 利 足  
 高 不 持 二 付 元 利 共 明 曆 二 年 同 三 年 取 立  
 右 之 通 可 納 所 十 村 見 圖 之 上 二 而 指 引 於 有 之 者 其 通 可 出 之 者 也  
 寬 文 拾 年

二八二 九月七日 (前田綱紀) (滿字黒印)

木津村 百姓中

- 二八三 木津高松兩漁場ノ圖 一枚 七塚村 木津 區藏
- 二八四 濱魚引場賣切證 貞享三年 一枚 七塚村 木津 區藏
- 二八五 木津高松漁場爭論裁判狀 寬政十二年 二通 七塚村 木津 區藏
- 二八六 船荷物預ケ宿願 慶應二年 一通 七塚村 木津 區藏
- 二八七 唐仁屋菩提寺專長寺記錄 五一册通 專 長 寺藏

「當山諸事曆代記」慶安三年の項に、「第六世受法師者當寺中興ノ開基也、此年御堂建立、材木ハ不殘唐仁屋三郎兵衛寄進」とあり。

「當寺傳來由緒帳」「第七代受慶」の項に、

「第七代 元祿十七甲申歲二月十八日寅刻住生 受慶 春秋六十三歲」

右受慶時代には同村唐仁屋三郎兵衛並一類之別家等同村並金城等に在之、當時さかんの時節にて御堂並佛具・家財等迄不足無之、成就致申候。則寄進人等法名忌日別にし置申候云々とあり。

- 二八八 繪 馬 寬德丸ノ圖 文政十年奉納 一面 木津 神明 社藏
- 二八九 繪 馬 大吉丸ノ圖 鍛冶屋孫左衛門俸利作 安政四年奉納 一面 木津 神明 社藏
- 二九〇 同 長榮丸ノ圖 高橋佐吉嘉永六年奉納 一面 木津 神明 社藏
- 二九一 同 儀寶丸ノ圖 元治元年奉納 一面 秋濱 八幡 宮藏
- 二九二 同 金毘羅丸ノ圖 一面 秋濱 八幡 宮藏
- 二九三 同 永福丸ノ圖 紺屋治右衛門・文政十二年奉納 一面 木津 神明 社藏

木津地方の漁網の原料は最上苧と稱して會津方面より移入せるが、會津に戰亂起りて最上苧の移入杜絶し、漁民の困難一方ならざりしにより、紺屋治右衛門は金澤の丸中孫兵衛・高岡の菅野傳左衛門・石動の上野某等の後援を得て決死隊を組織し、永福丸に乗じて會津に赴き、戰亂の中に多量の苧を移入し來りて木津に荷揚げし、大に漁業に貢獻せりと傳へらる。



- 二九四 繪馬 嘉徳丸ノ圖 森屋喜三右衛門・文久元年奉納 一面 木津神明社藏
- 二九五 同 大日丸ノ圖 室屋文四郎・文久三年奉納 一面 木津神明社藏
- 二九六 同 福壽丸ノ圖 鍛冶屋孫吉・慶應四年奉納 一面 木津神明社藏

—能登の部—

南大海村

西方日本海に臨み、宇二ツ屋の住民は多く漁獵を業とす。言ふに足るべき港灣なきも、又近隣地方との海路交易を行へり。

- 二九七 鬮賣買ニ付高松商人取締方願 一通 近 彌二郎氏藏  
天保十年羽咋郡二ツ屋より北川尻村孫七郎宛のもの。
- 二九八 獵券狀 安政三・四年 三枚 近 彌二郎氏藏  
安政四・四年二ツ屋村理兵衛より寺家村茂兵衛宛のもの。
- 二九九 船手形下渡願 二通 近 彌二郎氏藏  
安政四年・文政十三年の兩通にして、鬮千加千俵並に百四十八俵賣却のため羽咋郡二ツ屋漁夫より郡奉行所宛のもの。

もの。

- 三〇〇 羽咋郡二ツ屋浦入津荷物の指紙届 二通 近 彌二郎氏藏  
安政五年二ツ屋浦澗改入市郎右衛門より奉行所宛。
- 三〇一 羽咋郡二ツ屋村領濱間數調査書 一通 近 彌二郎氏藏  
中沼村濱境より免田村濱境まで四町十間の調査にして、嘉永二年境界争論の際のもの。二ツ屋村肝煎市右衛門・組合頭宇左衛門・同八郎左衛門より五十里村庄右衛門宛。
- 三〇二 獵漁ニ付願書 二通 近 彌二郎氏藏  
嘉永四年二月及び同年三月十日附、二ツ屋村肝煎市右衛門等より五十里村庄右衛門宛。
- 三〇三 羽咋郡二ツ屋村長左衛門獵漁ニ關スル口書 寫 二冊 近 彌二郎氏藏

末森村

西方は日本海に臨み、住民漁業を生業とせり。宇今濱は、初め荒寥たる砂濱なりしが、南方大海川尻の水害によりてその繁榮移り來り、古宿驛として有名なり。當時内浦・外浦の追分に當り、藩の米廩を置かる。海岸には港灣なきも山田屋・角屋等は多數の船舶を保有して大規模に廻漕業を營みその名を顯はせり。之等は皆大阪に根據を置き、郷里より多數の水を雇ひて活動せり。毎歲十二月より翌年三